
走りたがりの暗殺者（仮）

玄野 洸

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

走りたがりの暗殺者（仮）

【Nコード】

N6009X

【作者名】

玄野 洸

【あらすじ】

『——このゲームがクリアされるまでログアウトすることはできません』この言葉を聞き、俺は思う。「一旦スルー。面倒くさいから別のことを考えるか」と。そしてその“別のこと”とは何なのか？と聞かれればこうだ「——よし、これが終わったらとりあえずあてもなく走ろう」
これはそんな考え持つ、一人の少年の話。

誤字の指摘と評価待ってます。もし良かったら、お願いします。
皆さんから色々指摘を受けたので、少し設定

を変更したいと思います。すいません。

001：止まるリアルと始まるセカイ【1】（前書き）

こんにちは、玄野洸です。

酷い文ですが、もし良かったら暇つぶしにでも読んでやってください。

それでは、どうぞ。

001：止まるリアルと始まるセカイ【1】

「——このゲームがクリアされるまで、ログアウトをすることは出来ません」

ほんの少しでも動くものならば、他の人とぶつかってしまうであろう距離。

始まりの町 ユーレシア の一番大きな広場に集められた一万人のプレイヤーがかたずをのんで聞き耳を立てる中で、システムによる合成音声が辺りを震わせる。

この世界を創造したであろう人間は、一体何を考えているんだろうか？ しかし、その創造主が「出来ない」と言うのなら出来ないのかもしれない。

全く、どうしてこんな事になってしまったのだろうか。

本来なら俺は今まで慣れ親しんだ町内を思い切り走りまわっていたはずなのだが……。

兎にも角にも、俺は厄介事に巻き込まれたらしい。

俺は長年培った来たスルースキルを駆使してその事をいったんそこから辺に放っておく事に見てみた。周りの連中は叫んだり怒ったり泣き喚いたり忙しそうだ。全く、少しは落ち着けて言うんだ。ここは俺みたいにな「一旦スルー。面倒くさいから違うことでも考えるか」だろうが。

それでもって俺が考える『違うこと』ってうのはこれだ。

——よし、とりあえずこれ終わったら当てもなく走ろう。

「は？」「World Diver」が当たった？」

「そうそう！ 凄くない！？」

「そりゃ凄いけどよ……」

ワールド
ヴァーチャルリアリティ
「World Diver」。通称はWD。それはこの世に初めてVRをもたらしした新時代の電子機器。

頭の全体を全て覆うフルフェイスのヘルメットのような形状のそれは本来頭がやり取りするはずの脳波——つまり電気信号に、偽物の電気信号を意図的に割り込ませることで本来知覚している世界とはまた違う世界を知覚することができるというものだ。

この技術は軍事や医療などに使われていて、最近発展を見せ始めているものだ。

そして出てきたのが、『ゲームの中に入って遊ぶ』と言うもの。

それまでは一般人に手の出す事の出来ない相当に高価なものだったのだが、近年は比較的安価な物になっていて、普通の家庭であれば一台は普通に買えるだけの値段になっている。

そんでもってこの世界に瞬く間に普及したのがVRMMORPGと言うジャンル。元からMMORPGと言うジャンルは流行っていたのだが、それにVR技術が加わることで爆発的な広がりを見せたものだった。

兎に角、『ゲームの中に入って他人と遊ぶ』——って言う事がただの一般人でも可能になったということだった。

まあ、それは”ただの”一般人の話。

俺の場合は”貧乏な”一般人だ。何が言いたいかと言うと、俺の家にはWDが無いってことだ。……今の今までは。

「だよね？ やっぱ兄さんも驚くよね」

「しかも三台！ これで三人全員一緒に出来るでしょ！」
「さんつ、三台！？」

驚いた……。まさか三台も当たってたなんて。一台当たればいい方なんじゃないのか？ いや、俺は何の応募でそれが当たったのか知らないから何とも言えないが。

俺の目の前にはついさつき俺の部屋に興奮した様子で突撃してきた夏姉と、少し遅れて部屋に入ってきた秋穂がいた。

夏姉こと、^{キクシマ ナツノ}季久島夏乃はなんつーか……、美人だ。うん。弟の俺から言えるくらいの美人。

艶のある黒髪は腰まである長いポニーテールにして結い上げている。髪と同じキリリとした黒い瞳やスツと通った鼻筋などのおかげで何処か大人っぽい……、凛とした印象を与える美人だ。身体にしても、本当に高校三年生か？ と疑いたくなるほどの背の高さとグラマーさでナイスボディだ。半端ねえ。

しかも凄いのは外見だけじゃないと来た。高校二年から連続して生徒会長を務め、人望も厚い。更にはテストをすれば学年の十位以内には必ず名前が挙がるといった頭も持つてる。少し分けてほしい。クラスの奴からも、『夏乃先輩ってお前のお姉さんなんだよね？ こ、今度さ、俺に紹介してくれよ。な？ な？ 俺達……友達だ

る?』とか言われるほどだ。

もう一つ言うならば、俺にそう言ってきた奴は友達でも何でもない。入学してから二、三回しか話した事（しかも事務的報告）が無い奴が友達とか言えるか。阿呆め。

そんなもって秋穂こと、季久島秋穂は、キクシマ アキホこれも例に漏れず可愛い。兄の俺でも肯定するほどだ。間違いない。

少し色素の薄いライトブラウンの髪を肩甲骨のあたりまで真っ直ぐ伸ばしていて、おっとりとした感じの垂れた瞳とぷくらと膨らんだ桃色の口元が柔らかな雰囲気をかもし出している。可愛い娘って感じた。身長に関しては俺より頭一つ小さくて、それで……うん、夏姉の身体を少しでも分けてやれば良かったのにと本当に思っているよ、俺は。——…まあ、端的に言えばペタンコだ。

そしてもう一つ、こいつも夏姉同様に頭がいい。むしろ夏姉よりも頭がよく、高校入って初めてのテストでは三位の中に君臨する——と、言うか一位だったらしい。少しどころか半分くらい分けてほしい。

クラスの奴からは、『秋穂ちゃんって可愛いよなあ。……そういえば君の妹なんだろ? ——なあ、僕と秋穂ちゃんの仲を認めてくれよ』とか言われるほどだ。

バカ野郎。お前秋穂と面識無いだろうが。そんなもってお前は誰だ、見たことねえぞ。……って教師じゃねーかつ! 急に話しかけて来てそれは無いだろうがこのロリコン野郎がつ。妹は大学卒業するまでは誰にもやらん。

そして俺こと季久島冬紀はそんな姉妹の間で育ってきた極々普通の男だ。分かってほしい、俺は男なんだ、男なんだぞ? 周りの奴みたいに『女の子みたい』とか言うんじゃないっ!

……ああ、ごめん。取り乱した。ともかくは俺は黒い髪が長めに垂れていて、瞳もまた黒い。しかし夏姉のような凛々しさは無く、

何処か暗い色だ。身体の線も細いから『女の子みたい』とか言われるのかもしれない。身長に至っては夏姉に届いてないなんていう情けない事態だ。夏姉は元々女子の中では突出して身長が高いから、追いつけない俺でもそれなりの高さがある。でも、でもっ、あと二センチなのに……っ！

……っと、すまん、取り乱した。それでもって俺は上と下の姉妹に比べて、正直頭が悪い。テストでは毎回平均を少し上回るくらいだ。本当、何で俺だけこうなんだろうかな？

俺が二人に勝てていることを唯一上げるとするならば……、足の速さくらいか？ あと運動神経かな。でも、運動については夏姉にだけ負けそうで怖い。

うーん…… 本当に何で俺だけこうなんだろうかなあ？

考えれば考えるほどに疑問である。

「でも三台つてどうやったらそんなに当たるんだ？」

「たまたまよ、たまたま。全くの偶然」

「そうなんだよ。わたしたちが応募した分と兄さんの分が全部当選したの」

「—— ちょっと待て、何時の間に俺の分なんか出したんだ？」

「私が勝手に出したわ」

「何やってんだよ！ …… っと言いたいところだが当たってるし何も言え無いよなあ……」

「そうそう。当たったんだから結果オーライでしょ？ それに私が出してなかったらゆきだけ一人ぼっちでPCのMMOやる羽目になるじゃない？」

ちなみに俺たち全員PCのMMORPGプレイヤーである。

俺たちがプレイしているのは、クロニクルオンライン と言うゲームだ。

国内で最大級と言われるそのゲームを始めたのは夏姉が最初であった。そして次にプレイし始めたのは俺、秋穂の順だった。

クロニクルオンライン よくある中世ヨーロッパを舞台にしたゲームで、数年前までは国内最大のシェアを誇っていたが、最近はVRMMOにユーザーを取られていて過疎化してきたタイトルでもある。それでもここまで生き残ったのはもうほとんど無い。

もう一つ加えるのであれば クロニクルオンライン での強さ・廃人度は夏姉、秋穂、俺、の順番である。——と、言うか何故そんなにゲームに時間を割いているのに頭がいいんだ……？ 永遠の疑問である。

あ、あと”ゆき”は俺の愛称だったりする。

「……そう言えばなにに応募してWDが当たったんだ？」

「オープンβテストよ。Laplace社が初めて出すVRMMOのオープンβテスト」

『Laplace社』と言うのは俺たちがプレイする クロニクルオンライン を製作、運営している会社である。

クロニクルオンライン の過疎化にあたってそれを停止し、新たにVRMMOの開発を始めているという話は聞いていたが、まさかこんな形で関わることになるうとは思わなかった。

「それで、そのゲームのタイトルは？」

「エターナルオンライン って言うらしいよ」

「へー……で、肝心のWDはいつ届くんだ？」

「連絡では一週間後らしいわ」

「……ってことは夏休みの初日と重なる訳か」

「そうね、この分だと夏休みはゲーム三昧よ！」

「お姉ちゃん、やり過ぎないでね」

「わ、わかってる、わかってるわよ」

行き過ぎそうになる夏姉と、それを早々たしなめる秋穂という何時もの光景を見ながら、ポケットしていると、不意に俺の部屋に置いてあるアラームがピピピッと甲高い音を立てた。

「お、もうこんな時間か」

「今日も行くの？」

「もちろん」

「……兄さん、最近噂になってるよ？」

「……ど、どんなだ？」

「『夜の八時半くらいになると奇声を上げながら走り回ってる変質者がいる』って……」

「ま、マジかよ……」

「ぷっ、あっははは。なに、ゆきつて変態なの？」

「違うっ！」

「いや、でも実際言われてるんでしょ？」

「そうかも知れないけど……。ああっ、もうどうでもいいや！ 走ってくる！」

笑う夏姉と苦笑する秋穂の居る俺の部屋を飛び出し、俺は玄関へと向かっていくのだった。

黒の簡素なジャージとランニングシューズに身を包んだ俺は、淡い暗闇の広がる遊歩道へと歩み出た。

何時もの様にトントン、と靴の先を地面で叩き、馴らす。

「つたく、誰が奇声を上げる変質者だよ」

先ほど聞いた秋穂の言葉とけらけら笑う夏姉が脳裏を通り過ぎ、ちよつとムツとした表情を作る。まさかそんな風に噂されていたなんて全く知らなかった俺は少し憤慨するのだが、数分もすればそれも収まった。

「——ま、それなら噂されないようにすれば良いだけか」

そう、俺は呟く。

なに、噂されないようにするのは簡単だ。俺が奇声を上げながら走ってるのが問題なのだから、無言でランニングをしてればいいんだ。夜にランニングなんて誰でもやってるだろうしな。

「うしっ、出発っ」

数回の屈伸運動をした俺は、そう小さく息を吐きながら足を動かす始める。

タッタッタッタと、リズム良く音を奏でる足音を聞いていると自然と気分が向上してくる。それと比例して奏でる足音のリズムがスピードを増す。そしてそれを受けてまた俺のテンションが上がる。なんと言つか、いつも思うがウナギ登りだ。

ものの数十秒で最高に高揚した俺のテンションは、もはや俺の言う事を聞かなくなる。

俺はそのテンションに身を任せて、青白い街灯に照らされた遊歩

道を風の如く駆け抜ける。

（あ、ああ、駄目だ。これは出る。絶対に出る。確実に出る）

大部分を最大のテンションに占領された俺の中でわずかに残っていた理性がそう言う。しかし、それももう遅い。

「いやっつほおお——っうつっ！——！」

わずかに残っていた俺の理性が、その声で早々と折れた。

「いっつえええ——っいっつ——！」

そのあとに俺のテンションが元に戻ったのは過度の疲労で立ち止まった約三十分後だった。

001・止まるリアルと始まるセカイ【1】（後書き）

暇つぶしくらいにはなっただでしょうか？

002：止まるリアルと始まるセカイ【2】

「えっ、お前も エターナルオンライン のオープンβに当選したのか!？」

「ああ、何か知らない内に当選してた」

昼休みになった教室は、ガヤガヤと騒がしいものになっている。

俺は何でもないように返事を返しながら弁当——俺の家は父子家庭かつ、上と下の姉妹は料理だけはからつきし駄目なので俺が毎朝作っている。

当然、夕食も俺だ——を広げた。今日のおかずは卵焼き常備にベーコンとほうれん草の炒め物と鶏の唐揚げにレタスとトマトの簡単なサラダ。今日の唐揚げは我ながら出来が良い。

「でも、お前んちってWD無かったんじゃないのか？」

「それならなんか三台当たった」

「はあ!？」

それで俺の机に自分の机をくっつけて購買で買ってきた焼きそばパンとカレーパン、それにコロッケパンを頬張りながら驚きを表しているのは友人の神田誠二。^{カンダ セイジ}短い茶髪をツンツンと立たせたそれなりのイケメンである。

一年の最初の席が前と後ろだったところから始まった仲だ。何の因果かこいつも クロニクルオンライン をやっていて、それで話が弾み今ではすっかり仲のいい友人になってる。

「そう言えば」お前も”って言ってたが誠二も当選したのか？」

「あ、ああ。俺の方はWDを元々持ってたから確率の高いほうに応募して当選したんだが……」

そこで一度言葉を切り、誠二は信じられないような目つきでこちらを見ながら、言う。

「確率の低いWDセットの方で三台も当たるなんてなあ……」

「うん、俺もびっくりだ」

「……ん？ 三台ってことは夏乃先輩と秋穂ちゃんも来るのか？」

「おう。誰一人としてぼっちになる事無くこの夏を切り抜けられそうだ」

「そ、そうかあ……。夏乃先輩もくるのかあ……」

急にトリップし出した誠二。理由は至極単純である。こいつは夏姉に惚れてるのだ。結構俺の家に遊びに来たりするのだが、初めて来たときに一目惚れだそうだ。いやー、青春だねえ……

そしてこうやってトリップした誠二を現実に戻すのにも、もう慣れたものだ。俺は弁当をついばんでいた箸を置き、きゅっと指を引き絞る。そのまま誠二の額あたりまで持っていき思い切り離すと、パチンツと小気味いい音と共に指の先で誠二のでこを叩く。

——所謂デコピンだ。

「あだっ」

「戻ったか？」

「お、おう。すまん」

「なーに、気に済んな」

最初の方は文句言ってた誠二も、最近はこんな感じである。慣れつつ恐ろしいもんだ。

「しかし、遂に冬紀もVRデビューか」

「ああ、そう言うことになるな。PCのゲームしかやって無かった

からもうWDのは諦めようかと思ってたけど、こんな形で出来るとは思ってもみなかったぜ」

「きつと驚くぞ、余りにリアルすぎてな」

「それはもう死ぬほど聞いたさ」

こいつが初めてVRを体験した時の話は何度も聞いている。貧乏への嫌味がこんちくしょう、とやさぐれた瞬間もあったが、それをスルーしている内に俺のスルースキルは更に磨きあげられたものになった。

正直、そんなに磨きあげられなくても良かったのだが。

兎に角、話もそこそこに俺たちは再び昼飯を食べ始めた――。

「へー……これが エターナルオンライン か」

夕食を終えた俺は自室に備え付けられたPCを覗き込み、そんな事を呟いた。

一昔前はPCを家族に一つずつ完備なんて貧乏家庭が出来るはずも無かったのだが、最近のPCは随分安くなったもので、こんな貧乏家庭でも余裕で人数分を買える程である。

そして俺はそのPCで エターナルオンライン の公式ホームページを閲覧していた。

そこで知った エターナルオンライン の世界観は、なんと言う

か……混沌としている。比率で表すならば、中世ヨーロッパ：日本の江戸：西部劇、5：3：2と言った感じだ。本当に混沌としている。

キャラクターの成長には職業制ジョブを用いているようだ。公式ホームページに載っているのは最初の《ノービス》と一次職の《ファイター》、《プリースト》、《メイジ》、《スカウト》の四つの職業で、Lv5になった時点でその四つから選んで転職できるらしい。

更に、サブ職業として生産職が選択できるそうだ。こっちでも経験値は入るので、サブをメインとすることも出来るらしい。

公式ホームページをとりあえず一通り見終わった俺は、今度は攻略サイトの方へ移動した。

攻略サイトとっても、クローズドβテストの情報しか載って無いのでそこまで多いとは思わないのだが――、

「――って、うわっ」

攻略サイトを開いた俺は余りの情報量、文字量に思わず声を上げる。

こちらには初期の五つの職業しか載って無かった公式ホームページとは違い、様々なクエストの情報、ポジションなどの重要なアイテム類、意外と美味しいなど、色々と書いてあった。

そのあと俺は様々な事を読み込みながら、夜の時間を過ごしていったのだった――。

ついに……、ついに……！

「……来たあ——っ！」

夏休み初日。昼飯を早々食べてリビングで三人揃ってそわそわしている、唐突にピンポン、とインターフォンが鳴った。

そこからの夏姉の動きは素早かった。シュタツ！と擬音が付き、そんな速度で玄関へとダッシュし、扉を開ける。

そこには爽やかな笑顔の宅配便のお兄さんが立っていて、夏姉はもの凄い速さで印鑑を押したかと思うともう荷物の運び込みに入っていた。宅配便のお兄さんもびっくりしてましたよ、ええ。

とりあえず俺たちはそれを各々の部屋へ持っていき、自分の身体をスキャンする。

このスキャンというのは、WDの中に自分の身体の詳細を読み込ませることを指す。

これの具体的な方法はWD本体を何処か……机の上とかに置き、その前に下着姿になって立つ。そして「スキャン」と音声を発するとWD本体から帯状の赤いレーザー光線が俺を頭から爪の先まで通過していく。それを十秒程するとピーツと電子音が鳴り完了となる。これでどうやって身体の情報を読み込んでいるのかは全くわからんが、とにかくそういう物らしい。

そして何故、こうやって身体の詳細を読み込ませるのかと言えばもちろん、キャラクターの作成に使うからだ。

無論、一からキャラクターを作ることとは不可能ではないのだが、

それだと手間がかかり過ぎるし、第一に扱いづらい。

本来の自分の身体とかけ離れたそれを使うのであれば、それは現実での身体と違った重心などになり、容易に動かす事が出来なくなるのだ。

そして俺はそのデータをPCの方に移し、キャラクターを作つてゆく。

顔や体の造形は基本、変える気は無い。『女の子みたい』とか言われる顔をしているが、この顔は両親に貰った大事な顔だ。それを変えるなんて事が出来るか。

変えるとしたら、髪の色と瞳の色くらいだろうか……。

俺は小一時間PCと格闘し続けた。

部屋の中にはマウスをクリックする音と「……うん……」という俺の不安げなうめき声だけが木霊していた。

しかし、それも昔の話。今の俺はPCに表示されている俺のキャラクターを見ながら、満足げに頷く。

「うん。これでいいだろ」

PC画面に映るのはトランクスタイルの下着を着用した妄想での俺の身体。

変更した髪の色は暗い紺色と鈍い灰色の斑だ。まだら比率的には、紺色：灰色が3：1と言ったところだ。この髪色は俺が愛読していたとあるライトノベルの主人公の髪色であり、気にいていた配色だ。この色を出すのに苦労したものだけれど……。

瞳の方は結局、あまり変えなかった。理由として、先にも言ったライトノベルの主人公が俺の瞳みたいな色だったからだ。

より近付ける為に暗さを増してみたのだが、予想外にあっていた

のでそうしただけだった。……そう言えばあのライトノベルってどうして売れなかったのだろうか？ 俺的にはそうとう面白かったのに人氣がでなかったらしく三巻で打ち切りにされた。続き待ってたのに……。

そんな事を考えながら画面に映るキャラクターを眺めていると、コンコンツと部屋の扉がノックされ、返事もする間もなく扉が開けられる。

「キャラクターの設定終わったかー？」

「いい感じに出来た？」

「あ、夏姉に秋穂。ああ、一応できたよ」

そう言って部屋に入って来た夏姉と秋穂にPCの画面に映る俺のキャラクターを見た。

「あれ？ 顔は全く変えて無いのね」

「そうなんだね。兄さんは何時も『女みたいって言われるのは嫌だ』って言ってたからてつきり変えるのかと思っていたけど」

「あー……、『女みたい』って言われるのは嫌だけど、俺は自分の顔を大事にしたいからな」

「そうね……」

夏姉が、何とも言えない顔でそう呟く。秋穂の方は黙ったままだ。俺の家が父子家庭の貧乏家庭という話を少し前にしたかもしれないが、それは母さんが俺が中二のころ……、三年前に他界したからだ。

近所でも評判の美人であった母さんはキャリアウーマンなんかやっていて、バリバリ働いていた。そんな自慢の母が他界したが故の父子家庭であり、貧乏家庭だ。

母さんの生きた証であるこの『顔』はゲームだろうと当然残す。
それが俺の考えである。

「そう言えば、こっちに來たってことはそっちのキャラクターは出
來たのか？」

「もちろんだ」

「うん。結構うまく出来たよ」

「へえ、じゃあ俺もそっちのを拝見しに——」
「ダメ」

俺の言葉が終わる前に夏姉と秋穂から否定の言葉が被せられた。

「何だよ？」

「あんだねえ……。今の自分のキャラクターがどんな格好してるか
わかる？」

「トランクスのパンツ一丁」

「そこがわかればいくらおバカな兄さんでもわかるでしょう？」

「バカは余計だが……、別に何も関係無いだろう？」

「こんだだけバカだとは正直思っただけ……」

「そうだね……」

夏姉と秋穂が心底残念そうに言葉を零し、可哀そうな物を見る目
で俺を見ってくる。いやいや、何故だ。

「いや、だから何だよ？」

「何でって、ゆきの方のキャラクターが下着ってことは私たちも下
着ってことよ？ 見せられるはず無いでしょうが」

「はあ？ 夏姉や秋穂の下着姿なんて風呂上がりとかにしょっちゆ
う見てるじゃないか。それが何で今になって——」

そこから先の言葉が続く事は無かった。

バチンッ！　と言う音を俺の聴覚が聞き取ったときには俺はもう女性二人から平手打ちされていた。右が夏姉、左が秋穂というそれは、同時にやられたが故に衝撃を受け流すことが全く出来なくて、半端じゃない衝撃になっていた。

「ゆ、ゆきはっ、何時の間にそんなにデリカシーの無い子に育っちゃたわけ!？」

「そ、そっだよ兄さん！　兄さんにはデリカシーが無さ過ぎるんだよっ!」

そう言って夏姉と秋穂は脱兎の如く俺の部屋から離脱していった。そんな二人を俺は茫然と見送りながら、呟く。

「—————　そんなら服着て風呂からあがってこいよ……………」

俺のそんな無駄な抗議の呟きは、誰一人として届く事は無かった。虚しく響くだけであった。

昨日、WDが家に届いてからキャラクターの作成をしたりなんたりあったが、それよりも大変だったのが待つことだった。

オープンβテストの開始が届いたその日ではなく翌日と知ったのはいざログインしようと意気込んだ時だった。まあ、考えてみれば普通の事なのだが、出鼻をくじかれた俺は不貞腐れたように攻略サ

イトを巡回していた。

そのあとは、いつもどおりに帰りの遅い父さんを置いて俺の作った夕食を三人で囲った。その最中には、ログインしたらどの職にするかとか、生産職はどうしようかとか、誠二の奴もくるらしいとか色々話し込んだ。

夕食を終えた俺たちは早々とベットへと入ったのだが、いかんせん眠れない。俺だけかもしれないが期待とか興奮とか色々混ざりあって全く寝付けなかった。

こりやしょうがない、と思った俺は結構な時間であつたがジャージに着替えて、闇に包まれた街を駆けだした。その時の様子は、まあおおむね想像通りであると思う。

唯一いつもと違ったのは、疲労し過ぎて玄関で寝てしまったということだった。

朝、眼を覚ましてから一番にシャワーを浴び、簡単な朝食を作つて、食べてから数時間。

そして今に至る。

ベットの上への寝そべった俺の頭にはすでにWDが装着されている。

只今の時刻11:59。そしてそれを確認した時に丁度12:00へと変化した。俺はそれに合わせ、興奮を纏った声を上げる。

「《ワールドダイブ》！」

その声と共に、俺の意識が全て闇へと包まれた。

003：止まるリアルと始まるセカイ【3】

俺は四方が暗闇に包まれた真っ黒の空間へ降り立った。いや、”降り立った”という表現はいささか適切ではない。今の俺は仮の身体すらない意識だけの存在だった。

目の前には『Now Loading』の文字列が躍っていた。一定の周期で点滅を繰り返すそれは、数十秒の内でロードが終わったようで、ひときわ大きな点滅のあとに消え去った。

刹那の時も開かず俺の目の前に数え切れないほどのウィンドウが展開された。これは、システムが俺の脳波を読み取ってアカウントの作成をしているのだろう。

一人一アカウントが原則らしく、脳波パターンを読み取ってアカウントを作るらしい。そんな事を考えている間にも、ウィンドウは少しずつ数を減らしていき、ものの数秒でアカウント作成は完了した。

『キャラクター外装を設定してください』

女性っぽいシステム音声が辺りに響く。そして間髪いれずに、

『外部にキャラクター外装データが存在します。インストールしますか？』

という問いが飛んできた。俺は「はい」と短く返事をする。発せられた俺の声は、のっぺりとした現実味の全くない声だった。

しかし、その音声が発せられた直後に俺の視界を白い光が覆う。目を開くとそこには何時の間にか出現した鏡のオブジェクトとそこに映った俺の姿があった。

そこに映る俺の姿は、髪、瞳の色以外は何も変わらない現実と同じ体があった。新たに与えられたその身体は、面白いくらい俺に馴染んだ。

感心しながらその姿を見てみると、再度システム音声が響いた。

『キャラクター設定が完了しました。それでは エターナルオンライン の世界をお楽しみください』

その声と共に、俺の身体が光の粒子となって散った。

「おお……」

思わず俺の口から洩れたのは現実の俺の音声とよく似た感嘆の声だった。

背後には小さな森小屋が、眼前には森が広がっている。

その森は現実より現実っぽい……、こういうとなんか変だが、要は森独特の緑の香りや、さわさわと擦れる葉の音が心地いい。現実と言っても確実に間違えるレベルだ。

ここはチュートリアルを行うためのフィールドだと、攻略サイトには書いてあった。俺はチュートリアルの事項もしっかりと読み込んでいたので、やるつもりはない。

「こんにちは。世界を渡る冒険者よ」

「——わっ!?!」

突然背後から老人の声が聞こえて、思わず俺は飛び退く。
そこには、これぞ森の隠居お爺さんです！　と言った印象の杖をついた一人の老人が立っていた。
そのお爺さんは驚いた俺の様子を見て、おっほっほっほ、と笑っていた。

「驚かせてすまんかったな。わしはこの森で隠居生活をしているナスタルというものじゃ」

「あ、はい。俺はスノウと言います」

俺はぺこりと頭を下げながら、思わずそうかえす。

——が、ここで俺は気がつく。このお爺さんの額には五芒星を模した紋章の様な物が浮かび上がっている。これがあるということ
ノンプレイヤーキャラクター
は、NPCということだ。NPC——つまり、AIが動かす中に人の入って無いキャラクターだということだ。

こんなにスムーズに会話が成立するものなのか……、どう見てもただの人にしか見えない、と俺は初めてのNPCとの邂逅の感想を胸の内で呟く。

あ、ちなみに”Snow”は俺のゲーム内での名前である。
スノウ

ゲームをやる時は何時もこれを使う。名前の由来は、”冬紀”から”ゆき”を取る。それを英語にして”Snow”だ。ここで、”冬”を取って”Winter”を使わないのが、俺のこだわりである。
……なに？　くだらないって？　気にするな。

「ふむ、ではスノウ、この世界で生活していく上で必要な事をお主は知りたいか？」

「いえ、大丈夫です」

「そうか。では、他の冒険者がそろつまでそこら辺に腰かけて待つ

ててくれるか？」

「あ、はい。わかりました」

そう言って切り株を勧められたので、俺はおとなしくそこに腰かける。

そこからは森の音や香りに感覚を傾け、森林浴を堪能した。

数分すると、俺の向かい側の切り株に腰かけて目を細めていたナスタルさんが、不意に立ち上がった。俺もそれにつられて立ち上がる。

「む、ようやく全ての冒険者がそろったようじゃ。スノウよ、今からお主を始まりの町と呼ばれる ユーレシア に送る。あそこは新米冒険者にはうってつけの場所じゃ。良いな？」

「はい。いつでもお願いします」

俺がそう言うと、ナスタルさん「うむ」と満足そうに言って手に持っていた杖を真上へ突き出した。そうする俺の周りを青く光る魔法陣が照らし出した。

「良い旅を」

俺はナスタルさんの言葉を受け、始まりの町 ユーレシア へと旅立った。

人、人、人——……

右も左も見渡す限りの人の壁である。これでは夏姉や秋穂とかとの合流もままならない。……あ、後ついでに誠二も。

ガヤガヤと騒ぎたてる周りの人々を見回し、どうにかならないものか、とため息を吐く。

そんな時、”ポーン”と間の抜けた電子音が、騒ぎ立てる空気を震わせた。

その音に反応して人々は静寂を取り戻す。

音の響きを感じ俺も、何かに導かれたように真上を仰ぐ。そこには、無限に広がる蒼穹の空が広がっていた。そう、”いた”。

俺が仰いだ空を真紅の文字羅列が覆った。遠すぎるそれは、文字の羅列であると認識は出来るがなにが表示してあるのかはわからない。瞬間、その文字羅列が一か所に集中していく。それと共に空が蒼穹の色彩を取り戻す。

集結した文字羅列は、空中で水晶^{クリスタル}の形を作る。クリスタルは、文字羅列と同じ真紅の色だった。

『これより、第二次チュートリアルを開始します。一度しか行われませんので、聞き洩らさぬようにお願いします』

クリスタルからシステムによる合成音声を複数重ね合わせ、反響、増幅、歪曲したような声が響き渡った。その声音は、本能的に拒絶したくなるような雰囲気^{雰囲気}を纏っていた。

ついさっきまでガヤガヤと騒ぎ立てていた人々も、しん、と静まり返る。

『まず第一に、——このゲームがクリアされるまで、ログアウトをすることは出来ません』

空気が、凍った。

全ての人々がその言葉の意味をすぐには理解することが出来なかったであろうか。しかし、数秒もすると辺りの人々が叫びをあげた。

どういうことだ、説明しろ、うそだろ、等々の叫びが辺りを叩く。そんな中の俺は、意外と冷静だった。——冷静だった、というのはちよつと違つかもしれない。正直、この事態について行く気も、真に受ける気も無かった。

俺は得意のスルースキルで違う事を考え始めた。

——よし、とりあえずこれ終わったら当ても無く走ろう。

俺は自分の中でそういう思考の終結を迎え、再びクリスタルへと意識を戻した。

『ここで言うゲームのクリアというのは、《王の塔》の全てのクリアを意味します』

《王の塔》——それは他のゲームで言うダンジョンである。その塔の高さ、階層、装飾は多種多様。頂上には、“王”の名を冠するボスモンスターが出現するらしい。

この《王の塔》の数は、——実は判明していない。公式サイトにも書いてなかったし、攻略サイトには、四つだけは攻略出来た、と書いてあるだけだった。

『そして第二に、外部からの接触、外部からの通信切断による強制ログアウトは可能です』

俺はその言葉に、んん？　と思わず首を傾げる。周りも似たような反応だ。

それなら、俺の家は父さんが外すんじゃないか？　——そう言う疑問が俺の中で浮かび上がった。いくらなんでも夕食時になつたら外すだろうし。だって父さん料理できないから俺に頼りつきりだったしな。俺がいないと父さんの食事が無くなることを意味する。そんな考えをめくらせる俺の聴覚に、再度あの声が響く。

『そして第三に、当ゲームは新たに導入された【Clock up System】を実装しています』

今度は「くろつくあつぶしすてむ……？」と我ながら間抜けに眩きながら首を傾げる。

聞いたことも無い言葉だった。俺はその説明を、真紅のクリスタルへと視線だけで頼む。

『【Clock up System】とは、ゲーム内の時間を現実においての時間より加速させるものです。具体例で言えば、ゲーム内の時間を現実での二倍にすると現実での半日はゲーム内での一日に相当します。そして当ゲームに導入された【Clock up System】の最大倍率は——』

そこで真紅のクリスタルは一度言葉を切り、衝撃の言葉を続けた。

『——1000万倍です』

俺たちプレイヤーの途方も無い驚愕をよそに、真紅のクリスタルはまたも衝撃の発言をくり出した。

『具体例で言いますと、現実での六秒はこの世界での約二年に相当します』

六秒が、二年……

つまり、現実のわずか数秒はこっちの数年になってしまうということか。壊されていく現実が、新たに構築された非現実が、『こりや、相当な厄介事に巻き込まれたものだなあ』とのん気に俺に囁いた。

んなこと、わかってるつつーの。

余りに衝撃的な事実は俺の驚きという感情と、焦りという感情をショートさせた。そのおかげで俺が考え付いたのは『夕食に遅れなくて済むな』である。我ながら神経図太すぎるだろうと思った。

『これにより、外部からの強制ログアウトはお勧めできません』

そう言った真紅のクリスタルは、次の事へと話を進めた。

『そして第四に、デスペナルティの変更があります』

この言葉に、俺はごくりと思わず息をのむ。

こういう非現実にはアレは付き物だ。つまり、ゲームでのデスペナルティが現実での死。こんな事になるのであれば俺は一生生産職で生きていく覚悟はできている。

こんなゲームで死んだんじゃ元も子もない。

——しかし、俺のこの覚悟は心のゴミ箱に放り込むこととなった。

『死亡した場合のデスペナルティは、レベルを一つダウン。それと待機所への移動後に二十四時間の行動不能となります。死亡した後は、もっとも新しく訪れた町に強制送還されます。この時の行動不能時は、その個人だけの【Clock up System】の倍率を変更しますので、実質時間の経過は感覚に残りません』

この言葉に、安心する一方、驚きがあった。

M M O R P Gでデスペナルティとして経験値の減少はよく聞くが、俺としてはレベル自体を下げるのは聞いたことが無かった。これにより、俺は何とか死亡は無くしたいと思うのだった。

『そして第五に、感覚、生理的欲求をより現実近づけます。視覚、聴覚、嗅覚、味覚、触覚、食欲、睡眠欲、性欲などを現実の99、97%の精度で再現します。痛覚に関しましては現実の70、00%とさせていただきます』

これには、正直唖然とするしかできなかった。

全感覚の完全接続は不可とされていたWDの常識を覆すものとなった。99、97%ということは完全……ではないのだろうが、そんなことは関係なくなるほどの精度だ。

痛覚が七割なのはショック死をなくすための措置なのかもしれない。しかし、七割でも正直痛そうだ。切られたりしたら相当の苦痛だろう。

『——以上で、第二次チュートリアルの説明を終了とします。これからあなた方の冒険を少しばかり手助けする意味で、十の王器の中の一つをこの世界のどこかに、丁度一時間後に墮とします』

そして真紅のクリスタルは、短い言葉を発した。

『良い旅を』

意図してやってるのか、偶々なのか、——いや、意図してやってるのだろう。最後のこの言葉は、森の隠者であるナスタルさんの言葉と同じだった。

そんな事を思っていた時には、もう、真紅のクリスタルは消えていた。

それと同時に辺りは叫びに、嘆きに、怒号に、罵声に、懇願に、満ちている。

そんな中俺はというとそいつ等を無視^{スルー}して視界の端に表示されている簡易マップを見ながら街の外を目指す。ガツガツと人にぶつかりながらも人垣をかきわけること約一分。ようやく外に出られた。

「よっしゃ！ 思いきり走ってやるぞお——っうー！」

そう言っただけは街の外へと駆けだした。

003：止まるリアルと始まるセカイ【3】（後書き）

完全に勢いで書き始めました。

気分転換に書き始めた物なので、いつか唐突に終わるかもしれないが、その時はごめんなさい。

それまではよろしく願いします> ((<

004：見知らぬ樹の海で迷子の俺は【1】

「……ここは、どこだ………?」

状況を整理しよう。

俺は、あの『第二次チュートリアル』とか言うのを聞いて、まあ驚いたけどそのままスルーしたはずだ。そのあとは人垣をかき分け、なんとか外に出たはず。それから街の外に出て思い切り走ったんだ。そう。何時ものように狂ったようにシャウトしながら。ゲームの仕様なのか余り疲れにくくなってたこの身体のおかげで何時もの二倍近くの時間を走っていたはずだ。

そして、今だ。

ギャーギャーと不気味な鳥の声が木霊する。俺の周りを囲むのは森……、というか樹海だった。昼間のはずなのに、周りの日の光は樹木の葉に隠されて何処か薄暗い景色が広がっている。

「明らかに……、明らかに初心者^{ニュービート}が来る所じゃないだろう、ここは………」

今までモンスターに遭遇しなかったのが不思議でしょうがない。

まあ、その事は俺の運氣^{リアルラック}が高かったからに違いない、と勝手に結論付け、俺はとりあえずメニュー画面をしてみる事にした。

「オープン」と音声を発すると、目の前に薄青で半透明のウィンドウが開かれた。

俺はその項目の中から【キャラクター】の項目を右の人差し指で押し込む。するとウィンドウはキャラクターのステータス画面に映り、様々な情報が記載されていた。

【Snow：ノービス：Lv1】

多分一番上が名前、二番目が職業、最後がレベルだろう。……いや、それ以外あり得ないか。その他にもHP100にMP100と、いかにも初期値っぽいのが並んでいた。

俺は次に【アイテム】の項目へと移動する。そこには何も無いものかと思っていたら、『木の剣』という武器が入っていた。それを見て、そう言えば武器を装備してなかったな、と今更ながらそれを装備する。

俺の手元に青い光の粒子が集まっていき、『木の剣』を形作る。無から生み出されたそれを見て「お……」と声を上げ少し感心し、そして腰に収めた。

「とりあえず……、歩くか」

一応、今後の方針(?)を決め、俺は歩き始めた。——正
確には、歩き始め”ようとした”。

「……ん？」

ふと、視界の上の方で何かが煌めいた気がして上空を仰ぐ。

しかしそこには鬱蒼を葉に覆われた僅かな空があるだけで何も無かった。気のせいか、と気を取り直して俺は歩き出す。そしてその瞬間、

——ズウバアッッン！！

「……っ!？」

俺が今の今までいた所に激しい衝撃音が響き渡った。俺が慌てて振り向くと、そこには剣が刺さっていた。

「はえ？ ……」

思わずこぼれてしまった間抜けな声。

しかしその声もすぐ消えた。俺の視線の先に刺さる剣はとても、とても美しかった。それ故に息を呑み、思わず無言になった。

特にこれと言って特徴的な飾りがあるわけではないのに目を引くその姿と、透き通るような蒼銀の刃を持ったそれは闇夜に浮かぶ銀色の月の様に美しかった。

細く長い刀身は細剣と片手剣の中間、と言った感じだ。——いや、やっぱり片手剣の方が合っている気がする。

そして俺はそれを小鳥が餌をついばむような軽い手つきで一度触れた。瞬間、そこから薄青で半透明のウィンドウが開いた。そこには、こんな事が表示されてあった。

【蒼銀王の剣：《シルヴァリオン》】

【この剣は如何なる者も操る事が出来る。善を慕う者も、悪を望む者も、和を好む者も、平を嫌う者も、全てが、この剣で舞う。そしてこの剣は、主と共に在る。】

【《シルヴァリオン》を入手しますか？ Yes or No】

俺の指が勝手に、イエスの部分に触れた。

それとともに【《シルヴァリオン》を入手しました！】というものに変わった。俺は、光の粒子へと変わっていくその剣を追うように【アイテム】の項目を開く。

そこには、新たにデフォルトされた剣のアイコンがあった。俺はそれを何かに憑かれたように滑らかな動作で装備する。先ほどと同

じく手元に光の粒子が集まってゆく。

俺はそれを握り、持ち上げた。——と、思った。

「う、うおおおもおいいい——っ！！」

その重量に耐えきれず、ザクツ、と音を立てて《シルヴァリオン》が俺の手に握られたまま地面に刺さった。

俺は自分の叫び声に、幻想に浸っていたような気分から現実へと帰還した——あ、いや、ここ現実じゃなかった。

「ぐおおおおおおおおおおお………——」

獣のような低い唸り声をあげながら《シルヴァリオン》を両手で掴み、持ち上げようとする。……のだが、ぴくりとも動かなければ、うんともすんともなんとも言わない。”如何なる者も操る事が出来る”んじゃないかったのかよ！？と、唸り声をあげるのに忙しい口の代わりに思考が叫ぶ。

「——ぐつ、……はあ、はあ、はあ、はあ……」

走った後もこんなに息が上がらなかったというのに、酷い息の荒れようだ。

だが、これで少しわかった事がある。ついさっき（唸つてるとき）思い出したが、これは攻略サイトに書いてあった『低レベル者が高レベルの武器を装備した時に起きる現象』だ。

具体的には、そんな事態が起こった時に武器の方は本来の重量の数十倍、数百倍、はたまた数千倍にまで重量を引き上げて、無駄に振り回せないようにするらしい。

実際、振りまわすどころか持ち上げられていないのだから成功なのだろう。

「てことはLvが足りないってわけか……。——いや、そりゃそうか。考えてみりゃ当然だな、《ノービス》のLv1がこんなレアアイテムっぽい武器装備できるはずが無い」

そんな風に思考が結論へと至った時、ガサガサツと木の葉は擦れる音がする。俺は反射的に身構えてそちらを向く。

俺の視線の先——生い茂る草木の間から顔を出したのは、紫と黒のでっかい芋虫だった。毒々しい。

確認することも無く、それがモンスターだと悟る。……しかし、一向に襲ってくる気がしない。俺は不審に思っ^てモンスターの事を注視する。

そしてモンスターの上に現れたのは「???」と言う表示とその下に青いHPバー。《???》と言うところには本来モンスターの名前が入るはずなのだが、プレイヤーとモンスターのLvが開きすぎていたりすると見えないらしい。ようするにヤツは相当格上のモンスターだってことだ。うへー……。

そして同時に何故ヤツが俺に攻撃してこないのかもわかった。何故かと言うと、ヤツが非好戦的^{ノンアクティブ}モンスターだからだ。これはヤツの《???》が黄色だったことから理解した。

ちなみに逆の好戦的^{アクティブ}モンスターは名前の部分が赤色で表示されるらしい。

俺はヤツが攻撃してこないモンスターだとわかると少しホツとして息を吐く。その証拠にもヤツはそこらへんの葉っぱをムシャムシヤと食べている最中だった。

「それなら逃げるべきだな。負けるのは目に見えてる」

うん、そうだそうだ、と俺の中の二等身の俺が同意する。……そん^なの居たのか、俺の中。

そしてそんなアホな事考えていた時、ふと、ある考えが思い浮かんだ。それは《ノービス》のLv1が格上すぎる黒紫の芋虫に勝てる方法。だが、成功するとは限らない。むしろ失敗しそうな気がする。

しかし、俺はそれを試さずにはいられなかった。

故に俺は剣を【アイテム】の項目へとしまった。

手ぶら、初期装備、初めの職業のLv1、というこの世界での最弱に位置する筈の俺は、ゆったりとした歩みで黒紫の芋虫へと向かう。自分でも吃驚するくらい緊張していない事に、俺は少し驚いた。黒紫の芋虫は僅か10センチメートルの距離にまで近づいているのだと言うのにまるで俺が存在しないかの様に葉をムシヤムシヤと頬張り続ける。

俺は何も握ってはいない右手を差し出す。仮にそこに剣があるのなら、振りおろせば黒紫の芋虫の首を確実に切り落とす位置。俺は空いた方の左手で「オープン」で出現させたウィンドウを操作する。

利き手ではない左手の所為か、やはり存在した緊張の所為か、ぎこちない動作で俺はウィンドウを操作していった。そして最後――

俺は《シルヴァリオン》を装備した。

握った右手が、途方も無い重さを感じ取る。俺はそれを支えるなんて先刻のような馬鹿なことは考えず、重力に力を貸してもらいうに思いきり振りおろした。

たかがLv1の腕力でも少しは足しになるようで、《シルヴァリオン》の落ちるほんの少しだけ速度が増す。

斬ッ

「グギャッ」

《シルヴァリオン》が、黒紫の芋虫の首を切り取った。落ちてゆく刃に無抵抗に己の首を差し出す様は、ギロチンに首を掛ける死刑囚のようだった。

そして黒紫の芋虫が、青い光の粒子となって散った。それ共に”ポーン”という電子音が俺の耳に届いた。はやる気持ちでキャラクターのウィンドウを開けてみると【Snow：ノービス：Lv2】と変化していた。そして俺は狂喜した。

「は、は、ハハハ……、マジ……か」

余りの喜びに上手く感情を表に出す事が出来なくなるほどだった。そしてまたガサガサと擦れる音が鳴る。そして沸いて出てきたのはまるで『殺してくれ』とでも言うようなタイミングで出てきた黒紫の芋虫の大群。しかもそのすべてノンアクティブである。

もはやあれは脅威ではない。あれは――、

餌だ。^餌

数分後、まだ三分の一も喰い終わっていない時。

”ポーン”と本日四回目である電子音が樹海の空気を震わせた。俺は地面に食い込んだ《シルヴァリオン》を【アイテム】の項目に戻すと今度は【キャラクター】のウィンドウを開いた。するとそれと同時に追加で開かれるウィンドウ。そこには、

【転職可能Lvまで達しました。転職しますか？ Yes or No】

——とあり、俺は迷わずイエスを叩く。

【どの職業に転職しますか？】

【《ファイター》……仲間を守る戦士】

【《プリースト》……仲間を癒す司祭】

【《スカウト》……敵を討ち取る狩人】

【《メイジ》……敵を滅する魔法使い】

俺はそこで特に迷うことも無く、《スカウト》の部分を押いた。何故スカウトかというと、単純だ。一番足の速さが速そうだからである。《プリースト》や《メイジ》は魔法系の職なので問題外。《ファイター》は将来は金属鎧を装備するので重くて走りずらそうだから却下。そうやっていくと必然的に《スカウト》になる。

それに《スカウト》は軽装備の小回りが利く職であるはずだから、俺の戦闘スタイルと合いそうだ（まだろくな戦闘した事無いけど）。

【《スカウト》に転職しました！】

その表示を確認してから【キャラクター】の項目を見ると、【Snow：スカウト：Lv1】となっていた。何とも言えない満足感を身に奔らせ、俺は歓喜した。

そして新たにその下に【スキル】というものが増えていた。それ

を開くと、そこには【小剣：Lv1】【片手剣：Lv1】【短弓：Lv1】【索敵：Lv1】【隠密：Lv1】の五つが増えていた。このスキルというのはそのスキルに対応した技能を使うことでLvを上昇させ、使える戦技^{アーツ}、効果を増やしていくと言うものだ。

ここで戦技の事も説明しておこう。

これは、武器スキル——俺の場合は【小剣：Lv1】と【片手剣：Lv1】と【短弓：Lv1】だ——が一定のレベルの達すると習得することが出来る”技”である（魔法スキルでは魔技^{マジック}と称される）。

これはMPを消費してシステムにより身体をアシストしてもらう事が出来るので、剣の初心者だろうが誰でも使える。今のところ俺には小剣に《スタブ》が、片手剣の所に《スラッシュ》が、短弓の所に《ショット》がある。

この武器スキルを見る限りスカウトは遠近両方戦えるオールラウンダーであることが予想される。ここから先の転職で遠距離か近距離が決まるのかもしれない。

次に俺は【アイテム】の項目を開いた。

黒紫の芋虫からドロップした《強毒の糸》×7やら《強酸の粘液》×3やらが場所を取っている。その開いた所には新たに《鉄の短剣》《鉄の剣》《木の短弓》《木の矢》×30と、《スカウトセット》というアイテムが追加されていた。これは転職時の餞別、ということらしい。攻略サイトに載っていた。

一応俺は、そこにあつた《スカウトセット》なる物を装備してみた。今の服を光の粒子が包み、入れ替わるように俺の防具——というより服装が変化した。

今の俺の服装は、カーキのシャツに、その上に明暗の少し違っているがほとんど同色のベストを重ね、ストライプの黒いズボンとそれを中に入れたブラウンの革のブーツだった。

結構似合っている——、と思いたい。

次は《鉄の剣》を装備しようか、と考えたところでやめた。
何故かと言えば、《鉄の剣》で黒紫の芋虫が倒せるかの自信が全
くないからだ。

スカウトに転職している筈なのに、まだ名前が黄色い《???》
で表示されているということはまだまだ格上だということだ。それ
を、スカウトの初期装備と思わしき武器で勝てるとは思えない。

そこからはまた、俺は徐々に増え続ける黒紫の芋虫の大群を《シ
ルヴァリオン》で喰らってゆくのだった。

ぐう~~~~きゅるるる

「……………腹が、減った」

散々、黒紫の芋虫を喰らい続け、大群が一段落したところで俺は
腰をおろしていた。その際に、腹の音が鳴ったのである。

あのチュートリアルとかで感覚がほぼ完全に再現されている、と
か言っていたが、本当だった。樹海のせいもあるのか、辺りは結構
な暗さである。

ちなみにこんな暗さの中でも喰らい続けることができたのは、
【索敵：Lv20】のおかげである。視界の端に映る小さなマップに
ノンアクティブモンスターが黄色い光点として表示されるようにな

ったのだ。それを使って黒紫の芋虫の位置を確認し、ひたすら喰らい続けたわけだ。

そんなこともあって今の俺は【Snow：スカウト：Lv23】のスキルが【小剣：Lv1】【片手剣：Lv22】【短弓：Lv1】【索敵：Lv20】【隠密：Lv20】である。小剣、短弓は全く使っていないので、手つかずの状態だ。

そして腹の件だが、解決策は——ある。

あるのだが、出来れば使いたくない。何故かって？ それは簡単さ。【アイテム】の項目に格納されている唯一の食糧が《黒紫の蟲肉》×12だからだ。幸か不幸か、毒のありそうな名前だが毒は持っていないらしい。備考にそう書いてあった。あと、意外と美味いとか。

——でも正直、食いたくなかった。

しかし俺の腹は『腹減ったあ！』と叫んでいる。
食べたいのに、食べたくない。食べたくないのに、食べたい。そんな葛藤が頭の中を渦巻く。

そして、散々な葛藤の末、食欲が勝った。

人の三大欲求には逆らえないものなのだと、再認識させられた瞬間であった。

俺は意を決して、《黒紫の蟲肉》を実体化させる。目の前に光の粒子が集まりはじめ、ボトリ、という鈍い効果音と共に虫肉がそこへと参上した。

「うぐっ……」

思わず息が詰まる。

そこからの俺はもう自棄^{ヤケ}だった。鼻をつまみ、目を瞑り、右手で

虫肉を掴んだあ！　そしてそれを口に運んだあ！　俺は虫肉を噛みちぎったあ！　噛むたびにコリコリとした感触がうめえ！！――

――……ん？　美味い？
少し遅れてその事実が気がつく。

「美味い……？　美味い……。美味いつ！！」

三段階に変化する俺のテンション。最初は疑惑100%。そこかしらしみじみとした感じになって……最高に美味い事に気がついた。そこから俺は虫肉にがつつき、約十秒の内に跡形も無くなった。

「ま、まさかこんなに美味かったとは……」

と、その時。

「……ふあ……な、何だあ？　眠くなってきた……。あれか？　腹いっぱいになったからかあ……？」

知らぬ間に蓄積されていた疲労と、食事による満腹感により訪れた睡眠欲に対して、俺は逆らうことなく落ちていった……。

004・見知らぬ樹の海で迷子の俺は【1】（後書き）

見知らぬ樹の海で迷子の主人公は……——蟲の肉を食べることを覚えてきました。

005：見知らぬ樹の海で迷子の俺は【2】

バツ！ と、そんな擬音が付いてきそうな凄い勢いで俺は起き上がる。不意に目を覚ました俺は周りをきよきよと見回す。

そこは、少しだけ明るくなった樹海が広がっていた。フィールドで寝たというのに、周りにノンアクティブのモンスターしかいなかったおかげで命拾いしたらしい。……というかフィールドで寝るとかどんだけ神経が図太いんだ俺よ……

「あー……、どうしよう。結局帰り道わかんねえじゃん……」

そうなのである。俺は帰り道がわからない！ 今更ながら迷子だ！ 視界の端に映るマップは自分から半径二十メートルしか映さないし（索敵のスキルが上がれば広がるっぽいが）、大体このフィールドの名前も知らないし……

そんな事を考えていると、ガサガサツと音がした。それとともに数匹の黒紫の芋虫が顔を現す。

「ま、こいつら喰ってからでも遅くはない……、か。幸い、食糧も確保できたしな」

我ながらのん気だなあ、とこれまたのん気に考える。と、そこであることを思いついた。

「……というか死ねば一応帰れるんじゃないかね……？」

いやいやいや、帰れるかもしれないけどそれは少し嫌だ。それにレベル下がるし、一日も停止させられるんだから、俺の以外のプレイヤーとレベル帯を離されたらなんか嫌だ。

「うーん……まあ、取り合えずは時間が解決してくれるだろ。俺はひたすら喰ってればいいや」

そんな軽いノリで俺は剣を落とし始めた。

結論から言おう。

時間は解決してくれなかった。

事実、初めてこの樹海に入ってからもう少なくとも一週間はたった気がする。正確な時は日の光がよく見えないからわからん。

ちなみに今の俺はこんな感じだ。【Snow：スカウト：Lv49】の、スキルが【小剣：Lv1】【片手剣：Lv48】【短弓：Lv1】【索敵：Lv47】【隠密：Lv47】である。

小剣と短弓は変わらずだが、その他諸々が色々上がった。その中でも一番うれしかったのは索敵だ。

Lv47になったためにマップの範囲が半径47メートルまで広がった。これのおかげで目に見えない木陰などにいた黒紫の芋虫も積極的に喰らう事が出来た。

とそんな事を考えている間にも木の葉の間から黒紫の芋虫が姿を現した。そう言えばまだ名前が見えない。どれだけ格上なんだ、オイ。

思考とは関係なく身体が動く。右手を突き出し、左手が慣れた手

つきで滑らかにウィンドウを叩く。このウィンドウを操作する動きもぎこちない最初と比べたら雲泥の差だ。今では一秒と経たずに勝手に腕が動くぐらいになった。

斬ッ

「グギエッ」

短い断末魔を残して黒紫の芋虫が光の粒子となって四散した。すると、「ポーン」という電子音が俺の鼓膜を震わせた。俺は慣れた手つきでウィンドウを操作して、【キャラクター】の項目を開く（最初は利き手である右手でやってた操作も何時の間にか全部左手になった）。

【Snow：スカウト：Lv50】

「おおー……。五十代か……。何か年寄りになった気分だな」

俺は続いてスキル欄も確認する。が、残念なことにスキルの方はなにも上がっていなかった。まあ、スキルの方はジョブレベルと別口で上昇するっぽいから何ら不思議はないんだけど。

ぐ~~~~きゅるるる

腹が鳴く。

しょうがないな俺の腹は、とため息つきながらすっかり食べ慣れた《黒紫の蟲肉》を実体化させるために【アイテム】の項目へと指を走らせた。目当ての物を色々と詰め込まれた所から見つけ出し、実体化させた。——……。って、ん？

「今なんか見慣れないアイテムがあつたような……？」

目の前に実体化された虫肉には一旦待ってもらつことにして、俺は【アイテム】の項目をスクロールさせた。

「んん？ 《ポイズンフィン》ってなんだ？ ——……あ、もしかしてさっきの奴がドロップしたとか？」

俺は《ポイズンフィン》のアイコンに触れ、備考を呼び出す。

【毒喰らう翅剣：《ポイズンフィン》】

【《デスポイズン・キャタピラ》が極々稀に落とす片手剣。《デスポイズン・キャタピラ》が羽化する時の為に体内で生成した非常に切れ味の鋭い翅の剣。その翅は他の全ての毒を無効化し、自らは猛毒を有する。】

アイツは《デスポイズン・キャタピラ》って言うやつだったらしい。アイツやっぱり結構強いんだな……、ただの芋虫どころかポイズンとかデスとか付けちゃってるよ。半端ないよ。

ま、とりあえずその事は置いておくとして俺は《ポイズンフィン》を《シルヴァリオン》の代わりに装備してみた。手元に光の粒子が集まっていく。

そして手に握られていたのは昆虫の薄翅の様な剣。黒と紫の毒々しい翅は二つ、折り重なったようになっておりとても鋭い。

「——お？ おお？ おおお！？」

俺は《ポイズンフィン》を、持ち上げた。

「おお——っ！——」

俺は《木の剣》や《鉄の剣》以来の俺がともに振れる剣が手に入り、歓喜の叫びをあげた。

調子に乗って俺は右手に収まる翹剣を振りまわす。

ほっ、やつ、はっ、と短く息を吐ききながら、口の端に笑みを浮かべて俺は剣を振るう。

初めて握ったその剣は想像以上に手に馴染む。さすが仮想現実。現実じゃありえな事を軽々とやってのけるものだ。

俺は最後に、セイツ、と一声あげて真上から真下へと垂直に振り下ろす。

すると、俺の目の前にあった虫肉がスパッ、と真つ二つに切り裂かれ、光の粒子となって消えた。

……………つてえええ！？

「あっ、ああっ！俺の、俺の飯があ……………うう……………」

くそう…………。そんな風に呻きながら俺はガクツと頂垂れた。しかし、俺が斬ってしまった虫肉はもう戻って来ない。

「くうう…………。まあいいやつ！まだストックはたくさんある。今回は剣ゲットの祝いとして特別に二個食べようっ！」

そう言っただけ俺は《黒紫の蟲肉》を二つ実体化し、目の前に置いた。

「いただきます！」

……………やっぱ、虫肉うめえーっ。

俺が虫肉二つを食べ終えた頃。

ブンブン、と今まで聞いたことのない、虫の羽音のような音が空気を震わせた。俺は反射的にマップを確認しながら、戦闘態勢に入る。マップに表示されている光点は……赤色。つまり、アクティブモンスター。

なーんでこんなにタイミングいいのかなー、なんて考えているとマップの光点が俺に向かつてすごい速度で移動してくる。

俺はそれと対峙するために翅剣を構える。本当は《シルヴァリオ》を使いたいところだが、アクティブモンスターはノンアクティブモンスターの様に俺を無視してはくれない。

だから、正面から戦わなくてはならない。

そして俺の前に姿を現したのは黒と紫の毒々しい色を持つ羽虫だった。

体長は俺と同じくらいで、身体はまるでスズメバチのようだ。尻には何かで濡れたように輝く鏃の付いた針が見て取れた。

しかし、翅だけはスズメバチとは違っていた。ちょうど俺が握っている《ポイズンフィン》とよく似た、鋭い翅を左右に五つつつ、合計で十枚あった。

ブンブンと羽音を鳴らす翅の刃は、全てを切り裂く力を持っている気がした。

名前の方はやっぱり《????》と赤く表示されているだけで、分からない。

その黒紫の雀蜂の眼孔がキュルキュルと動いて周りを見回す。そ

してその眼が、俺の事を一直線に捉える。

黒紫の雀蜂は「キュウウウルルルッ」と不気味な叫びを放ってこちらへと突進を行う。俺はそれを、地面に付きそうなくらいまで下に構えた剣で、迎撃に入る。

「はッ」

俺は突進してくる黒紫の雀蜂に向かって、身体を少し横に逸らしながら思いきり振り上げる。突進力も上乘せされてか、ヤツのHPが二割弱程削れた。

初めてのまともな剣での戦闘。しかし、俺の手に握られた剣はまるで俺の手の延長線上にある一部であるかのように華麗に、舞い、踊る。

ヤツの身体と同じ黒と紫の剣閃が飛ぶ。ある一撃は的確にヒットし、ある一撃は俺の剣と酷似した翅に弾かれ、ある一撃は俺の身体を決る。

「——ぐ、アッ……」

痛い、痛い痛い痛い痛い痛い！

本来の七割程の痛みだと言うのに、痛い。

翅に切り裂かれた左の肩口の痛みが燃えるように、鋭く俺を襲う。そこから本物とは思えない血が滴る。

しかし俺は、なんと言うか、自分で言うのもあれだが——冷めていた。

（スルーだ、スルー。無視だ。無視しろ。痛みから目を背ける。この痛みは俺が負ってるんじゃないんだ。無視、無視、無視、無視無視無視無視無視無視無視……——）

そして俺は、痛みを意識から外した。
傷を負った左の肩口と腕は、” 痛みの意識の除外 ” により完全に力を失ってしまった。

今は、だらんと無造作に垂れたままだ。俺は余った意識を全て右腕へと注いだ。集中力が、より精錬されていくような感覚。

「おおおおおおッ！」

低く咆えた。

それと同時に脳内にあるスキル欄で確認した時にもっとも俺に結びついた戦技^{アーツ}のモーションを再生。

そしてそれを己に投影。

自分の身体が、何かに突き動かされていく感覚。身体が加速され、知覚が加速され、思考が加速される。

俺はそれに乗っかるように一閃、二閃、三閃。淡い水色の燐光を纏った翅剣^{アーツ}が、正三角形の軌跡を描いた。

片手剣の戦技^{アーツ}である《トライスラッシュ》が見事に発動した事に内心歓喜する。

——しかし、喜んでいいのはそこまでだった。

俺の《トライスラッシュ》を受けた黒紫の雀蜂は大きく膨らんだ尻を爆発^{バースト}させてから、光の粒子となって飛散した。

爆発の際に、辺りに薄紫色の何かが飛び散った。それは勿論、至近距離にいた俺の体にも掛かっており、相当な臭いを発している。ダメージはないが鼻をつんざく様な刺激臭に、思わず顔をしかめる。

そして、四方から数え切れないくらいの羽音が木霊した。マップを見ると最高に少なく見積もっても、二十……。

「おい、おいおいおいおい。何だよこの冗談、笑えねえよ。この匂いにつられてやって来たってか？ 絶対無理だろ……」

片や格上の黒紫の雀蜂の大群。

片やHPを四割近く削り取られたニンゲン。

……勝敗はもう、目に見えていた。

しかし、俺の中の”俺”はこんな状況を諦める^{スルー}するのはどうにも納得しなかった。

ブンブンと羽音を震わせて巨大なスズメバチが俺に迫る。

「——ハッ、やってやろうじゃねえか」

先刻の声とは全く逆の雰囲気^{スルー}を冠した声。いつもみたいなスルーするときの表情とは違う。口の端が獰猛に釣り上り、大きく歪む。

俺は駆け出した。

異形の怪物に向かって。

その命を刈り取るために。

「はッ……。とッ……。セイツ……」

短く息を吐き、翅剣を走らせる。

最後の一闪で、ようやく黒紫の雀蜂が光の粒子となって四散した。これが、三匹目。俺はまた敵へと突っ込む。HPがもう残り二割程しかないが、そんなことは気にしない。

不規則にステップを繰り返し、その間にも何度も何度も斬りつける。

その間に黒紫の雀蜂のHPは僅か数パーセントとなり、俺のHPも一割を切った。しかし俺は止まらない。もとより、回復などする気はない。……だってポーション無いし……。

「うおおおッ！」

俺の咆哮と共に、頭の中にある《トライスラッシュ》のモーションを再生。

そして俺の体に投影。

最後にそれを実行。

黒紫の刀身が淡い水色の燐光を纏う。相当な速さで動かされる俺の腕に従って、剣の軌跡が水色の正三角形を描く。それが終了すると黒紫の雀蜂は光の粒子となり、崩れ去った。

そして俺の鼓膜を”ポーン”という電子音が叩いた。

俺はその音に気を取られ、一瞬ではあるが動きを止めた。——
が、その一瞬は大きすぎる一瞬だった。

ドシュッ……という鈍い音が俺の耳に届いた。

視線を少し下に向けると、自分の胸のあたりから鏃のある大きな針が飛び出ている。

背後から、それも心臓へと。完璧なるクリティカルヒット。

俺のHPは、一瞬にして喰らわれてしまった。

そこから先は、覚えていない。

005：見知らぬ樹の海で迷子の俺は【2】（後書き）

補足しておきますと、デスボイズン・キャタピラ黒紫の芋虫のLvはLv60で、主人公がLv50になった状態なら備考を読み取ることが出来るはずでした。デスボイズン・レイ黒紫の雀蜂はLv62で、主人公は読み取れないLvでした。

見知らぬ樹の森で迷子の主人公は……——後ろから心臓を一突きされて絶命しました。

006：町に帰ってきた俺は姉と妹に…

俺は目を開いた。

視線の先には巨大な十字架に何か……女神みたいな像。それとキラキラと光を透過して輝くステンドグラス。——これは……人工物？

今まで樹海の中で過ごしていた俺は、久しぶりに見る人工物に即効で頭を覚醒させられる。

しっかりと開けた瞳に映ったのは、何処か、教会のような所だった。……と、ここまで考えて思い出す。

「——ああ。俺、死んだんだっけ」

最後は隙を突かれての背後からの一撃でクリティカルヒット。そのまま一撃でノックアウトかあ……

出来ればもう少しがんばりたかったなあ……

「あ、そう言えばLvどうなっただろ」

そう呟いて俺は「オープン」と言っただけでウィンドウを出現させ、【キャラクター】の項目をしてみる。——のだが、変化が無い。【Snow：スカウト：Lv50】の、スキルが【小剣：Lv1】【片手剣：Lv48】【短弓：Lv1】【索敵：Lv47】【隠密：Lv47】という前に見たのと全く同じ数値が並んでいた。

首を捻って考えていると、また一つ思い出した。

俺の死因はレベルアップの電子音であった、と。ということは、死ぬ直前にレベルアップしてデスペナルティ分上書きされた……

？ あ、いや、前だから下書き……？

余り信じられる話ではなかったが、それしか考えられないので納得することにした。

「——そうだ。夏姉と秋穂に会わなくちゃ……。もう一週間もあって無いじゃん」

不意に思いだしたそれに従って、俺は教会の外へと歩き出した――。

「お、おお、ひ、人だ……」

なんか一週間だけだけれど、モンスターと樹海で暮らしてたからなのか、人が凄く珍しく感じる。

「——さて。それは一旦置いておいて、聴き込みでもするか」

何故聞き込みなどというメンドクサイ事をして夏姉と秋穂を探すのかと言えば、単純にそれしか方法がないからである。

連絡はフレンド同士なら”コール”という電話みたいなものがあるのだが、夏姉や秋穂とはこのゲームで一度も会ってないからフレンド登録はおろかお互いの容姿も知らない。あ、あつちは俺の知ってるか。

名前の方は分かっているのだから、それだけで”コール”出来ればいいのに……と思ったが、思ったところでもならないから

忘れる事にした。

それ故の聞き込みである。これで大まかな場所とかわかれればラッキーだなーっと思っていたり、途中で会えたらいいなーっと思っている。

そう言う訳で最初の聞き込みはあの露店で防具売っているお姉さんにしよう。……あ、あわよくば、とか思っていないよ？　ただ防具もちよつと見てみたいなーとか思ったただだよ？　本当だよ？

「すいませーん」

「あ、いらっしゃい！」

俺が声を掛けると、お姉さんはにぱーっ顔をはころばせて対応してくれた。

お姉さんは淡いブルーの髪を無造作なショートヘアにしている、猫のような爛々と輝く髪と同じ色の瞳が印象的だ。

身体の方は夏姉に劣るものの、けっこうグラマラスである。その身体を簡素な白いシャツとジーパンで飾ってい——……………ジーパン？

「何をお求めですか？」

「あ、えっと。防具もほしかったんですけど、それと違って聴きたい事があったて」

「聴きたいこと……？」

「はい。N a t u か A k i h o って人知りませんか？」

俺がそう聞くと、お姉さんは怪訝そうな顔を取る。俺がその事に首を捻っけていてもその顔は解除される様子はない。

「どうしたんですか？」

「えーっと、逆に何で知らないんですか？」

「……はい？」

「いや、だから何で知らないんですか？」

「いや、えーと最近死にっぱなしだったから……」

もちろん、とっさに付いた嘘である。これなら少しはだませるはず。……多分。

「ふうん……？ でも、知らないってことはないと思うんだけどな……」

「あ、えっと、結局知ってるんですか？」

「うん、知ってるよ」

「じゃあ、ちよっと教えてほしいんですけど……」

「あ、はいはい。終わったらちゃんと防具も見てってね」

お姉さん曰く。

夏姉こと^{ナツ}Natsuは今のところ王の塔の攻略に一番近いと言われるギルドのマスターを務めていて、実力も相当ある。

それにあの顔だ。世間では『あの顔や体にはデータでいじった形跡がないぞっ！』という事が広がっているらしく、それのおかげでこの世界で五本の指にはいるほど有名であると。

秋穂こと^{アキホ}Akikoは夏姉と同じギルドに所属していて、夏姉同様実力もあり。

そしてこれまた夏姉同様に、あの顔だ。世間でも夏姉と同じような事が相当広がっているらしい。

姉妹だつてことも知られていて、襲われそうになったところを夏姉が助けていたのも有名になった理由であるらしい。

「——あいつら……そんなに有名になってたのか……」
「え？」

「あ、いや何でもないです」

「よし、じゃあ防具見ちゃって！」

「——あ、あと、どこに行けば二人に会えますかね？」

「え、あ、うーんと……。確か『フジミの宿屋』って言うところを
拠点にしてたからそこに行けば会えるんじゃないかな？」

「なるほど……。ありがとうございます」

「というか何時の間にお姉さん砕けた口調になった？ 俺お客じゃないの？ ——……いやまあこっちの方が話しやすいから俺は良いけど。」

「よしっ、その装備ってことは《スカウト》だよな？ 防具の参考
にLv聞いてもいい？」

「あ、はい。《スカウト》のLv50です」

「そう言つと今度はすごい勢いで目を見開いて固まった。——……
え？ もしかして俺Lv低すぎたとか？ マジで？ そんなに低い、俺……。」

「えつと……、ホントにLv50ホントのホントに50……？」

「ええ、俺やつぱり低すぎましたかね……」

「はい！？ 何でそうなるの！？」

「だって、驚いてたじゃないですか。あれって俺が低すぎたから驚
いてたんでしょ？」

「いやいやいやいや、むしろ逆だから。逆」

「へ？」

「本当に知らないの？ 今の最高Lvって23なんだよ？ あ、今
50になっただけ」

「……はい？」

「だーからー。今のところあなたは这个世界の人間の中で一番強い」

「……………はあああああ！？」

俺のその叫びを聞いて周りで露店を開いていた人たちとそのお客さんが一斉にこっちに向いた。

「あつ、いや、何でも無いです！　買い物続けちゃってください！」

反射的にそう叫んでいた。幸い、やはり買い物に集中したかったのか皆すぐに視線を戻した。

あ、あぶねえー……。

「えっと、今の話は本当？」

「というかあなたが言ってたしVも本当？」

「え、うん。本当だけど」

「もちろん私も本当だけど」

「あ、そうだ一応見せますよ」

俺はそう言っただけでウィンドウを出す。本来他人には見えないそれを可視モードに切り替え、お姉さんに見せる。

するとお姉さんは「へー……本当だ」と感心していた。ううむ。こんな事になるならこのLvはむやみに教えるべきじゃないかなあ……。

「えーっとスノウさん？ スノウ君？ スノウ？」

「何でもいいですよ。呼びやすいので」

「じゃあ、スノウ君。私はイーリン。リンって呼んでもらえると嬉しいな」

「はい。リンさん」

「——で、何でLvが50もあるのに《スカウト》の初期装備なの？」

ちなみに説明しておく、今の俺の身なりはカーキのシャツに、その上に明暗の少し違ってはいるがほとんど同色のベストを重ね、ストライプの黒いズボンとそれを中に入れたブラウンの革のブーツ……つまりあの《スカウトセット》だ。

武器である《ポイズンフィン》は装備していない。教会を出るときに街中で武器をしょってる人がほとんどいなかったので俺もそれにならった。

「えっと、これは内緒でお願いしますね？ 絶対誰にも言わないで下さいよ？」

「うんうん。で、どうなの？」

「………実は、ずっとフィールドだったんですよ」

「へ？」

「このゲームが始まってからずっとフィールドにいたんです」

「は？」

「帰るにも帰り道が今一わからなくて、しょうがないからそこで暮

らしてました」

「え？ ええ？」

「まあ、あそこで取れる肉は意外と美味かったのでどうにかなりましたけどね」

「……えつと、要するにフィールドで一週間野宿してたと……？」

「まあ、端的に言えばそうです」

リンさんが口をあんぐり開けて固まっている。おーい、綺麗な顔が台無しですよー。

「なんか、驚きすぎて呆れたわ」

「そうですね。自分でやつといて今俺も呆れてます」

「そうでしょうね……」

「まあ、そんなわけでお金なんか持ってないし防具とかも作れなかったからコレなわけです」

「へー……。じゃあ、お金貯まったら私の所来てよ！ その時には最高の一品を作ってくから！」

「え？ あ、お願いします？」

「うんうん！ —— あ、あとフレンド登録いい？」

そんな感じでリンさんとフレンド登録したのちに少し世間話して別れた。

うーん、何でおれこんなにズレてるんだろう。どこで間違ったかな、俺。

—— …………… ああ、街から出て走り出した所からか。

「来ない……」

リンさんと別れていから俺が来たのは、『フジミの宿屋』という宿屋だった。何故か、と問われれば夏姉と秋穂の事を捜すためだ。宿の中に入った俺はシブイいぶし銀のオッサンに「泊まりか？」と聞かれたけど、それには違うと答えておいた。——おいおい、何だあのNPCのマスター、カッコよすぎるだろ……。その魅力を俺にも少し分けてくれ……。

宿の断った俺はとりあえずそこらへんにあつた椅子に腰かけ、夏姉と秋穂のことを待つことにした。——のだが、一向に来ない。かれこれ二時間近く待っているのに。腹も空いてきたところである。

ぐう~~~~きゅるるる

ほら、鳴った。

俺は、しょうがない、と短くため息を漏らしウィンドウを開いて【アイテム】の項目へと指を走らせた。樹海で散々お世話になった虫肉を取り出す。

デスポイズン・キャタピラアを有り得ない量狩り、喰い尽したおかげで、今はもう二百個近くあったりする。虫肉万歳！！ 虫肉最高！！

べちよつ、と音を立てて血の滴る虫肉が目の前のテーブルの上に落ちる。

最初の方はこれだけで気分が悪くなったりしたのだが、今はもう慣れた。

俺は虫肉の塊を右手で掴み、そのまま口元に持っていき、噛み千切る。ぐっちゃぐっちゃと余り立てたくはない音を立てながら咀嚼していく。

周りから見ればもの凄くシユールで猟奇的だと思うが、幸い、ここに俺以外の客はいなかった。

やっぱり虫肉うめえーっ、なんて言いながらそれを咀嚼していく。一つ食べ終わったのだが、まだ俺の腹がメシを所望していたのでもう一つ取り出し、食べる。

二つ目の虫肉もぺろりと食べ終わると、どこからか不意に”ポーン”という音が鳴った。

「……………ん？」

レベルアップ……、にしてはタイミングが不自然すぎる。そう思った俺は、ウィンドウを開いて【キャラクター】の項目へと目を走らせる。そして上昇していたのは——いや、”増えて”いたのは【称号】というものだった。増えている………というか新しく出ていたその備考を呼び出す。

【蟲毒の素人】

【《黒紫の蟲肉》を喰らい過ぎて、体にその毒の一部を宿した者。

獲得条件：《黒紫の蟲肉》を加工前の状態で50個完食】

【称号効果：素手での攻撃の場合、相手に一定の確率で《猛毒》を投与する】

【耐毒の素人】

【毒系モンスターの食材アイテムを喰らい続けることで、その毒の抗体を体に宿した者。獲得条件：毒系モンスターの食材アイテムを加工前の状態で50個完食】

【称号効果：《毒》、《猛毒》に対しての抵抗率が上昇する】

「……………」

な、なんかこれだと俺の好物である《黒紫の蟲肉》が毒持つて
るみたいに聞こえるんだけど……。気のせいだよな？　ね？　ね？
そう問うが、答えてくれるものはいなかった。その代わりに宿の
扉が開く音が聞こえた。

「…………ん？」

「「「ぎゃあ——っ！！」「」」

俺が振り返って返って来たのは悲鳴だった。

何だよ、失礼なやつだなあ……。と、考えたところで気がつく。

俺は今の今まで血の滴る肉を喰らっていたところだ。そんなわけで、
俺の口の周り、腕の辺りには血がべつとりと付いている。

これは数時間たてば消えるから今まではあまり意識してなかった
わけなのだが…………——

や、やつちまったなあ……

宿の中に入って来たのは、六人の男女だった。

女性四人、男性二人という少し偏った構成のその六人はきつとパーティーメンバーなんだろう。このゲームでのパーティは一つ六人である。ちなみにその中の女の子が一人、俺の姿を見て気絶していた……結構へこんだ。

「きや——……って、ゆき？」

「あ、夏姉」

よく見ると叫んでいる中の一人は夏姉だった。容姿は全く現実と同じだが、髪と瞳が透き通るような銀になっている。あと、その名前で呼ばないでほしい。ここでの俺は”スノウ”だ。

「夏姉、ここではその呼び方やめてくれ。ここではスノウだ」

「あ、ごめんゆ……じゃない、スノウ。っというかじゃあなんで私は呼び方同じなの？」

「だって夏姉のキャラネームはN a t uじゃないか。ここでも支障はないじゃん」

「まあ、そうだけど……。ってどこ行つてたのよ今まで！　そしてその血何！？」

途中からナツ姉の剣幕が凄いことになった。クワツと眼を開き早口でそう言った。

「あー、うん。これにはいろいろと事情があつたりするんだ」

「お、おいナツ？　こいつは……？」

ナツ姉の隣にいた青年が、ナツ姉にそう問う。長身痩躯、茶髪のイケメンだ。顔をいじってる可能性も捨てきれないから、本当にイケメンかどうかからん。

「ああ、これは弟のゆ……じゃなかった、スノウよ」

「えっと、この血みどろなの？」

まさかの”これ”呼ばわりのあとは”血みどろ”だそう。そりゃキツイってもんだ。

「スノウのどこが血みどろよ！ 私の弟を血みどろなんていわない——いや、血みどろだったわ」

……ナツ姉、怒るなら最後まで怒ってほしい。余計へこんだ。

「へーい、血みどろの弟・スノウです。よろしくお願いしまーす」

なんかもうめんどくさくなって何ともふざけた自己紹介になった。それと同時に、六人を見回す。

一人はナツ姉。もう一人は茶髪のイケメン。更にその横には魔法使いっぽいローブ着たメガネの少年、線細い、なよなよしてそう。その反対の隣には俺と同じ職であるスカウトっぽい装備をしたスレンダーな美少女、胸はちよつとザンネン。その斜め裏には隠れるようにして黒髪でおかつぱの少女が。

そして最後に気絶しているのは我が妹だった。——ってなんで兄の顔見て気絶してんだよ！？

「えっと、まあ。ナツ姉とアキホと話したいんですけど良いですかね？」

とりあえずアキホのことを置いておくことにした俺がそういやってパーティの人たちを見ながら問うと、そのパーティの視線がナツ姉へと集まった。

「わかったわ。今日の狩りはもう終わったしいいでしょ？」

その答えに様々な返答を返す。共通点は、肯定を表しているところである。

ナツ姉はこのパーティのリーダーであるらしい。ああ、そう言えばリンさんがギルドのマスターとか言ってたな。このパーティがそのギルドなのかも。

「そいじゃ、いきますか。ナツ姉、どこにする？ 出来れば人にいないところが良いんだけど」

「じゃあ、宿に取ってある私の部屋にしましょう。あそこは私の許可がないと基本入れないから」

「おー……宿とか初めてだわ。どうなってんだろ」

「泊まった事無いの？」

「ん、まあな」

「はあ……、なんかもうよくわからないわ。血だらけだったり宿に泊まった事無かったり」

「ま、気にしないで」

「……で、アキホはどうするの？」

「ああ、俺が担いでくよ」

俺はそう言うといすから立ち、そこまで一直線に走った。瞬く間でアキホが気絶しているところまでたどり着く。そしてそのまま、アキホを背負う。

「……っ！？」

「？ ナツ姉、どした？」

「い、いや。何でも無いわ」

本当はナツ姉以外にも驚いた顔をしていたが、名前を知らないの

でナツ姉だけに聞いた。というか、なにを驚いているのだろうか？
アレか？ この速さか？

まあ、この速さには俺も驚いたよ。この身体、ホント使い易い。
俺は長距離走も好きだが、短距離走はもっと好きだ。この身体はスタートダッシュがしやすい。マジいい。

「じゃ、行こうぜ」

「ええ」

俺はアキホ背負ったまま、部屋のある二階へと続く階段へと向かって歩き出した。

部屋にあがった俺は背負ったアキホをベットに寝かせ、自分は椅子に座った。ナツ姉も俺の向かいに座る。

「で、一週間以上、どこに行ってたの？」

「うん。まあ、簡単に言えばどことも知れぬフィールドで野宿してた」

「は！？」

「俺ってさ、走り出すと、……ほら、止まらないだろ？」

「そうね。いつも叫びながら走ってるものね」

「そうそう。それでこの身体ってスゲー使いやすかったから一時間もぶっ続け走れたわけさ。そしたら何時の間にか知らないところに……」

「……バカなの？」

「……言い返せないのがつらい」

ナツ姉がはぁ……、とため息をつく。本当に、何も言い返せないのがつらい。

「でも、野宿なんてどうやってしたの？ フィールドで戦えばお腹も減るでしょう？」

「ああ、その事ならモンスターが運良く食べ物をドロップしてくれてさ。それ食って生きてた」

「へえー……」

「それでそれが俺が血だらけな理由につながるんだよ」

「？ どうしてよ？」

「森で出るのってさ、生肉なわけさ。それ食ってるうちにそれが大好きになっちゃって、それをここで食ったらあの状況ってわけ」

「な、生肉……？」

「そうそう。血についても、森にいた時はそんなこと気にしなかったから失念してたんだよな」

「こ、こんなに近くにリアル肉食系男子がいるとは思わなかったわ」

「しかも肉親にな」

俺は笑いを漏らす。それにづられてナツ姉も笑いだす。

何ともほんわかした空間だ。あの樹海では考えられない空気である。あそこはもう行きたくな——……くはない。虫肉のためなら行きたいかもしれん。そんな思考を知ってく知らずか、ナツ姉はこう問うてきた。

「それにしても、何の肉？」

「ん？ ああ、虫の肉」

俺がサラッとそう答えるとナツ姉がピキッと氷の彫像の様に固まった。

「いや、芋虫の肉なんだけどさ意外と侮れないんだよね、これが。牛肉みたいな食感と極上に脂の乗った感じ！ もう、半端なく美味いんだよ」

俺は思わず頬を緩ませながらそこまで言つと、あることを思いつく。

「あ、そうだ。ナツ姉も喰つてみる？ 美味しいよ？」

「やつ、ややややめとくツ！ って言うかムリ！ なによ虫の肉つて！ しかも芋虫！？ 有り得ないでしょう！！」

「そう？ ムチャクチャ美味いんだけどなあ……」

ナツ姉、現実ではなにつくっても食べてくれるから料理楽だったのに……。こっちではこんなに好き嫌いの激しい事に……

「……なんか変な事考えてない？」

「別に？ ナツ姉は好き嫌いが激しくなっちゃったなーってさ」

「……普通、誰でもこっという反応するわよ」

俺が思った事を言ってみると、そんな答えが返つて来た。うーん……どうしてなんだろうか？ 謎だ。その時「ううん」という声がベットの方から聞こえてきた。

「あ、アキホ起きた？」

「あれ？ お姉ちゃん？ ここは……ぎゃあ——っ！」

むっくりとベットから体を起こしたアキホは疑問顔で辺りを見回

す。そして俺と目線が交錯した時……叫んだ。女の子が出しちゃいけないような声で。

「いやいやいや、俺だから！ お前の兄だからっ！」

「ぎゃあ——……え？ 兄さん？」

「そうそう。やっと気づいたか」

「あれ！？ 兄さん！？」

アキホは驚いたように叫んだ。何で叫んだんだ……って俺まだ血拭いてなかったじゃん。ナツ姉も言ってくれよ。気がついたら拭いたのに。

そして金髪碧眼になったアキホがベットから起き上がって俺へと詰め寄って来た。

「一週間以上どこ行ってたの！？」

「ああ、フィールド」

「フィールド！？」

「そう。そこで野宿してた」

「野宿！？」

アキホの表情が驚愕や疑問へところどころ変わる。

それを見た俺は、これは面倒そうだと直感し行動に出た。

「ナツ姉、俺ちよつと寝る」

「え？」

「だからこのベット借りるわ」

「いやそれじゃ血がついちや——ってそうじゃなくてアキホへの説明どうするのよ？」

「大丈夫。一回ついた血は他の所に移らないから」

「いや、そうじゃなくてアキホへの説明どうするのよ？」

「……ナツ姉、よろしく」

そう言って目の前のアキホを一旦押しのけて、ベットへと入る。

「ちょっ、ゆき!？」

あー……やべえ。ベットってこんなに柔らかかったんだっけ……

かってえ木の根とは大違いだ……

いいーやあーさあーれえーるうー、うー、うー、うー………

そうして俺は深い眠りに落ちていった。

006：町に帰ってきた俺は姉と妹に…（後書き）

町に帰ってきた主人公は姉には叫ばれ、妹には叫ばれた上に気絶されました。

お気に入り100超えました。こんな駄文ですが、読んでくれてありがとうございます。

007：剣狩人な俺は弓狩人な彼女と

俺は瞳を開く。

まだまどろんでいたいたい気分だが、一週間しか森で生活してないのに起きたら速攻で覚醒する癖がついた。

これが良いものなのか、悪いものなのかはわからない。少なくとも今の俺にはいらぬ。まどろみたい、まどろみてえ。まどろみてえ——っ。

そんなことを胸の内で叫びながらむっくりと体を落とす。窓の外は暗闇に包まれている。

俺の手元に血は付いていない様子。自然消滅してくれたようだ。ふと、右に身体を向ける。顔面には、ふにゅつと柔らかい感触が。

—— ナツ姉が気持ち良さそうにスヤスヤ寝ていた。俺の顔はすっぱりと豊満な胸に埋もれている。ナツ姉は「んんっ」と異常に色っぽい声を出す。

え！？ いや、なんで！？

俺は慌てて顔を引つ込め、左側へと身体を背ける。

—— アキホが安心してきつたように静かな寝息を立てていた。俺の目の前には幼いながらに色気を醸し出す唇が。

ええ！？ いやいや、なんでさ！？

俺は突然の事態に頭が真っ白になる。

いくら姉と妹だとはいえ右には銀髪銀眼のグラマーな美女が、左には金髪碧眼の可愛い美しい美少女が寝ているのだ。

これでパニックにならない男は男とは呼べない。そいつはもう女の方に分類してやれ、今すぐに。

ナツ姉は「うん……」と再度艶っぽいめき声を漏らした。その声に反応してか、反対側のアキホがもぞもぞと身をよじらせる。

もう一度聞こう……。なんでだ！？

そう叫ぶも、やはり答えてくれる者はいない。隣に寝ているのは姉と妹なんだ、肉親なんだ、血い繋がってるんだ、……何故興奮する！？ おかしくねえ！？

俺の頭の処理能力はそこで容量をオーバーした。そして俺の頭がオーバーヒートした。

ぼぶん、と頭からベットに倒れる。

寝てしまおう、寝てしまおう、寝てしまおう……

そこから先の記憶は、やっぱりない。

窓から差し込む朝日が瞼の裏を突き刺す。

まだまどろんでいたい気分だが、一週間しか森で生活してないのに起きたら速攻で覚醒する癖がついた。これが良いものなのか、悪いものなのかはわからない。

少なくとも今の俺にはいらな——ってちよつと待て、なんかこれ言った気がする。デジャブ……？ いつ言ったかは思い出せ

ない。

俺はむっくりと体を起こす。顔をフルフルと左右に振ると、その過程で二人の女性を見つけた。

銀髪銀瞳の我が姉と、金髪碧眼の我が妹だ。なんか二人で身を寄せ合いながら話し込んでいる。どうしたのだろうか？

「どうしたんだ？」

「「ひゃあっ!?!」」

そんな声を二人は漏らす。そんなに俺に驚くか？　ちょっと悲しい。

「どうしたんだよ」

「なんでもない、なんでもないわ」

「そう、何でも無いよ、兄さん」

とにかく何でも無いらしい。ふむ、どうしたもんか。

「あ、そう言えばアキホさ、ナツ姉から俺の話聞いた？」

「え、あ、うん。聞いたよ。でも、正直信じられないよ」

「事実は小説より奇なりとか言うだろ？　そんな感じだよ」

「へえー……」

なんとか納得してくれたようだ。

いやー、マジで良かった。なんか俺に迫ってくるアキホは（言ったら絶対怒られるけど）鬼のようだった。あれをスルーできたのはナツ姉のおかげだ。ありがとう、ナツ姉。いや、ナツ神様。

「あ、ゆき。今日私たちと一緒に狩りに来てよ」

「は？　っつか何でその呼び名なんさ」

「だってさ、Snowなんでしょ？　じゃあ、”ゆき”で良いじゃない」

「うーん、まあ、そうなんだけど……」

「じゃあそれで良いじゃない」

「ま、良いか」

と、言う訳で俺の呼び名は”ゆき”になりましたー。わーわーぱちぱち。……ってそんなことどうでもいいんだ。問題なのはそれじゃない。

「何で俺も一緒に狩りに……？」

「うーん……ギルドの勧誘のための実力検査？」

「はあ？　俺、ギルドに入る気はないぞ？」

「「えっ……」」

「だって俺MMOでもギルド入んなかっただろ。基本ソロが好きなんだよ、俺は」

「でも、その方がよくない？」

「良くない、良くない。今はもうそっちのパーティはメンバー固まつてるんだろ？　俺が行っても意味ないよ。つかただの邪魔物だろ」

「「……」」

俺のその言葉に、二人は押し黙ってしまった。これは本心である。というか、一人の方が気楽で好きだ。人のこと気にしないで済むし、何より、フィールドで独りでいる感じが好きだ。

ただの画面越しでもそれが好きだった。

「まあ、でも狩りは行くよ」

「「本当に!？」」

「ああ、本当に」

「「よかったー」」

そんな安堵することか？ まあ、安心してると言ふまでもない。それにこのゲームのパーティ戦はどういうものなのか見てみたい。

「じゃ、いじつぜ」

「えっと、改めましてナツ姉の弟でアキホの兄のスノウです。《スカウト》やってます。今日一日よろしくお願いします」

俺はそう言つて頭を下げる。俺と一緒にいくことを意外や意外、簡単に了承してくれたパーティメンバーさんに改めて自己紹介をする。

それが終わると、次は例の長身痩躯の茶髪のイケメンが自己紹介を始めた。

「俺はアロツズ。Lv22の《ファイター》やってる。よろしく」

あ、ちなみにナツ姉もファイターやってる。盾と片手剣の壁仕様だそう。それでLvは23、こん中じゃ一番らしい。身体は柔らかいのに、堅そう。……って俺はおっさんか。

「えーっと、僕はロム。《メイジ》のLv21です。よろしくお願いします」

そう言って自己紹介したのは、黒髪にメガネの線の細い少年だ。魔法使いっぽいローブを着ている理由もこれで良くわかった。

そう言えばアキホも《メイジ》だってさ。Lvは22だと。

「スイ。Lv21の《スカウト》。よろしく」

簡潔にそう告げたのは濃い青の髪のスレンダーな女の子だった。背は俺と同じくらいで、胸は昨日見たの同様残念だが、顔の方はナイフの様な鋭い顔立ちを持つ美少女である。

髪の色といい、職といい、この人とは気が合いそうである。

「え、えと、ぷ、《プリースト》のLv20です。リ、リリユネ……で、す。よつ、よろしくお願いしましゅっ」

何処かたどたどしい口調で最後に噛んだのは黒髪をおかっぱ風にした少女だった。もしかしたら昨日の俺を思い出して怯えてたりして。……何それすっげえ悲しい。

それと背はアキホと同じくらいだ。……ようするに、小さい。

何はともあれそんな感じでサクッと自己紹介を終えて、俺たちはフィールドへと繰り出すのだった――。

パーティについて行くというのは、今回はナツ姉たちのパーティ

にソロの俺がついて行くことを指す。

つまり、あくまでもナツ姉たちはパーティプレイ、俺はソロプレイだ。

そこで俺の戦闘スタイル、技量を見るのだとか。しかしそれは俺的にはどうでもいい。

「じゃあっ！ レッツ、ランー！」

「待て」

「ぐえっ」

街の外に出て走り出そうとした俺をナツ姉が襟を掴んで引き戻す。首が締まったぞナツ姉、あと走りたい。

「なんだよナツ姉」

「あんたに走らせたらろくな事無いでしょうが」

「ええー……」

「ええー、じゃない。ほら、歩いて行くわよ」

「ちえっ」

「舌打ちしない！」

折角走り出そうとした俺を、ナツ姉が引きとめる。おかげで歩いてフィールドに行くことになった。

フィールドに着いた時に余計な疲労をしないための行動なんだろうけど、すっげー物足りない。

「というか兄さん、武器は装備しないんですか？」

「ああ、忘れてた」

アキホのその言葉で俺は腰元に翹剣がささっていないのを思い出す。

俺は手早くウィンドウを操作して《ポイズンフィン》を装備する。
腰元に何時もの重みが加わり、俺はウィンドウを閉じる。

「あれ？ 兄さんは片手剣なんですね」

「おう。モンスタードロップのヤツだ」

「——それ、どのヤツ？」

そこで会話に入ってきたのは、俺の隣を歩いていたスイさんだつた。

「え、えーと何処かはしらないですけど。《デスポイズン・キャタピラ》というヤツです」

「何処かは知らない……？ あと、敬語はいらない」

「それならタメ口で。——何処かは知らないって言うのは、そのまま。これがドロップしたフィールドの名前を俺は知らないってこと」

「つまり、誰から買ったってこと？」

「いや、俺がドロップした」

「？ どういう事？」

「まあ、その話はいつか」

俺は途中でめんどくさくなってそう答えた。

しかしそれで退いてくれるヒトじゃ無かつたらしく、一定の歩みで進んでいたところを少し早歩きにして俺を追い抜かしてから俺の前を阻むように立った。

「ダメ。教えてくれないと通さない」

「オツケ。それじゃあ、俺は帰るわ」

「えっ、えっ……？」

俺はクルリとユーターン。そのままスタスタと歩きはじめる。

後ろの方では、オロオロと狼狽した気配が伝わってくる。最初に感じた鋭いナイフのような印象とはかけ離れた感じだった。

なんというか、からかいがいのありそうなヒトだ。

「兄さん、冗談はいい加減にしてください」

「へいよー」

「——えっ、冗談……？」

アキホのたしなめられた俺は、またもクルリとユーターン。少し歩調を速め、俺は直ぐにスイさんやアキホの所に追い着く。というかスイさんは本気だと思ってたらしい。

本当にからかいがいのありそうだ。というかあるな、このヒト。

「冗談冗談。別に教えるさ、スイさん信頼できそうだし」

「そう？ ……わたしのどこが？」

「あーっと、職とか、髪の色とか似てるところ？」

「なに、それ」

「まあ、そんな理由。特に言いふらさないって言うなら、一応話す」
「うん。言いふらさない。——あと、”スイ”でいい」

そう言つてスイは花の咲いたような笑顔になった。

最初の印象とは全く違った白い百合の花の様なその笑顔に少し…、ほんの少しだけ見惚れた。「お、おう」とつつかえながらも何とかこたえる。

その隣ではアキホが俺の事を何故かジトつとした目で見てきた。なぜだ、どうしてだ妹よ。

「兄さん。なにスイさんにデレデレしてるんですか」

「な……っ。してない、決してしてないぞ！？」

「ふーん……、どーだか……」

尚もジトーっとした視線を投げかけるアキホ。ちがう……それは決して違うつ、と言ったところで絶対聞きそうにない雰囲気である。というかさっきのも聞いてなかった。

——まあ、その事を俺はスルーすることにしてスイに色々掻い摘んで『まさかの見知らぬフィールドで野宿してた事件』（ただ今命名）を話していくのだった。

「そんな事が……」

「うん。まあそんな事があつた訳だ」

話し終えた俺は、『というかこの短時間で良くここまで仲良くなれたもんだ』と一つ心の中で呟いた。最初にいった『気が合いそう』意外と当たっていたっぽい。すげえ、俺すげえ。

「皆、フィールドに着いたわよ。ここからはアクティブモンスターもいっぱい出てくるから何時も通り気を引き締めてね」

ちょうど俺が話し終えた時に、ナツ姉がそう言った。

いよいよ戦闘開始と言ったところである。いよっしゃー、頑張るぞー！……というが、正直走ってる方がいい気がする。嗚呼、走りたい。

「じゃあ、ゆき。私たちが先に戦うから一応それ見てて」

俺はそれに「あいよー」と戦場にあるまじき間の抜けた声をあげて、それに答えた。

……というか別に戦場じゃ無かったわ、ここ。ここはRPGでよく在りそうな森だ。

画面越しだと良く伝わらないが、実際に体験してみると凄いものだと思おう。

ちなみに、ここでは植物系のモンスターがでるそう。ほら、よくある”歩く花”とかも見えるかも。

そして俺の返事を聞いたナツ姉は一度頷いて再度歩き始めた。一応、翅剣は抜いておく事にした。

ついでにここで皆さんの武器を紹介しておこう。

ナツ姉は片手剣と盾、アロズさんも右に同じだ。この二人が壁役をやると思われる。

それとアキホ、ロムさん、リリユネさんが杖装備だ。皆細部が異なっているが、全部魔法のダメージや効果を上げるためだろう。

そしてスイが腰に小剣と手には弓、背には矢筒である。やはり《スカウト》は遠近両用のオールラウンダーなのだろう。どんな動きをするのか期待だ。

と、そこで俺の索敵スキルの索敵範囲に六つの赤い光点が引っ掛かった。

俺は一応、その事をメンバーに伝える。

「あ、右……これじゃ駄目だな。東の方から六体こっちに向かってますよー」

「なに？ それは本当か？ スイ、反応は？」

俺の言葉に疑わしげな視線と言葉を向けてきたのはアロツズさんだった。なんだいなんだい、教えてあげたのにそんな対応ひでえじやねえか。

しかしそんな俺の心の内をほつとて話は進む。俺の隣にいたスイが、その質問に対してフルフルと首を左右に振る。やはりスイも《スカウト》であるから索敵役であるらしい。

「なんだよ、でまかせじゃ——」

「あ、反応があつた。東から六体来る」

被せるように出たその言葉で視線を向けられたのはスイではなく俺の方だった。……え？ なして？

しかし、そんな視線も打ち切られる。何故、と聞かれればもうモンスターが視認できる位置まで到達していたからだ。植物のくせに素早い事で。

そのことを確認したナツ姉が、素早く指示を飛ばす。

おおー、さすがパーティリーダー兼ギルドマスター。ちなみに、俺は遠巻きに見てるだけだ。これならこっち合流しないで走ってた方が良かったかもしれん。

一番前にナツ姉とアロツズさんが、そしてそこから少し距離を置いてスイが、その後ろには魔法使いや司祭などの魔法職のアキホ、ロムさん、リリユネさんが陣形を作る。

そして目の前に現れたのは枯れ木の様な体をしたモンスター四匹と、巨大な花に口を付けた食虫植物ならぬ食”人”植物の様なやつ二匹だ。ビシバシとツタを振るってる。

そして俺の索敵スキルで表示された名前は《枯れてしまった木人：Lv27》と《人食らう花：Lv27》だ。

これだけみると、Lv差が相当ある気がするが、そんなことはない。

Lv21や22というのは、“一次職の”Lvだ。これに初期職の《ノービス》のLv5を足すことで本来のLvは26や27であると言える。故に、このLvの選択は妥当であると言える。

そんなことを考えているとすぐさま戦闘が始まった。

まず、ナツ姉とアロツズさんが何か、——たぶん《ファイター》^{アーツ}の戦技を使用して横薙ぎに大きく一閃。

光によって伸長した斬撃を受けたを受けたモンスター、——それぞれ《枯れてしまった木人》を二体に《人食らう花》一体をだ——のターゲットを取る。

そしてそれらを盾、剣を使っていなし、攻撃を加えていく。

その間にも、後方からはスイの矢が確実に一体を確実にハリネズミのようにし、ナツ姉が相手をしていた方の《人食らう花》が光の粒子となって消えた。

更にその後ろからは直径50cm程の火球が二つ浮かんでいる。

そしてその二つがそれぞれアキホ、ロムさんの指示で敵の方へと飛んでいく。

数秒程で、着弾。それによってナツ姉とアロツズさんの《枯れてしまった木人》がそれぞれ一体ずつ炎に包まれた。

次々と襲う火球が三つを数えた頃に、《枯れてしまった木人》は光の粒子となって四散した。枯れ木だからだろうか、よく燃えたものだ。

残ったのは《枯れてしまった木人》が二体と《人食らう花》が一体。

数が半分になったそれを、ナツ姉とアロツズさんが交互に、交換するようにターゲットを取っていく。

その間にスイの弓からは矢が、アキホとロムさんの杖の先からは火球が発射されていく。

気がつけば、そこには光の粒子が散る残滓だけが残っていた。

ふとそこで全員のHPに目を向ければ、敵の攻撃を受けていない後衛陣はまだしも前衛陣までもがドットも減ってはいなかった。

いや、それは少し語弊があるな。俺が知らぬ間に、リリユネさんが回復魔法をかけていたらしい。そう言えば、ナツ姉たちの身体が淡く緑色に光っていたかもしれない。

それらすべてを終えたナツ姉たちは、こちらへと歩いてくる。

「まあ、パーティの戦闘ってこんな感じよ。わかった？」

「ああ、それなりに……、かな」

ナツ姉の問いに、俺はそう答える。

内心の俺はこのゲームで初めて見た数人での戦闘に少し参っていた。やること自体は、従来のPCでやるMMORPGと何ら変わらない。

しかし、それを生身でやるのは至難の業……だと思う。やっていないからわからないが、敵の動きを見ながら味方の事も気遣って戦うのは正直俺には荷の重そうな事だった。

やはり俺はソロが良いな、と答えが出たところで、再度俺の索敵スキルに真っ赤な光点が引っ掛かった。

数は四、先ほどより少ないから、今度は俺が殺^やらしてもらおうと思う。

「ナツ姉、北東から四体来るから、それは俺が殺る」

「え？ あ、そう？」

「ああ、基本俺一人で殺るからピンチになったら援護してもらえるとありがたい」

「う、うん。わかったわ」

その言葉が終わるときには俺はもう北東の先を見据え、右手には毒々しい色の翅剣を構えていた。そして俺は地面を蹴る。

視認できる位置に入ったそれを俺は完全に視認する。配分は違うが、種類は先ほどと同じだ。《枯れてしまった木人》が一体と《人食らう花》が三体。どちらも仲良くLvは27。

「はッ」

高速のスタートダッシュでそいつ等の目の前に辿り着いた俺は、一番前にいた《枯れてしまった木人》に向けて細かな斬撃を見舞う。ズザザザザッ、と目の前を高速で行き来する黒紫の刀身がまるで暗闇の膜が張ったようになる。

そして最後はもつとも初期動作が速く最も硬直時間の短い戦技^{アーツ}のモーションを再生。そしてそれを己に投影。自分の身体が、何かに突き動かされていく感覚。

身体が加速され、知覚が加速され、思考が加速される。そしてもつとも単純な一閃が俺の手から放たれる。

ザスッ、と音を立てて《枯れてしまった木人》が縦に丁度二つに割れた。

この技は片手剣のカテゴリで最初に覚えた戦技^{アーツ}、《スラッシュ》

だ。薄い水色の燐光を纏った剣を真上から真下に剣を落とすだけの技だが、単純ゆえに速度も速い。

それに、幾度となく行ってきた”黒紫の芋虫を喰らう動作”と酷似しているためやりやすいというのもあった。

薪割りの様に綺麗に割れたのちに光の粒子となった枯れ木を視界から外し、こんとは三体の《人食らう花》へと意識を向ける。

その間にも振るわれるツタを、避けて、いなし、撃ち落とす。

隙間隙間に自分の攻撃ももちろん挟むが、いかんせん相手の手数が多過ぎる。相手が五回攻撃してくればこちらが攻撃できるの是一回くらいだ、キツイ。

そこで俺はふと気がつく。《人食らう花》のHPバーの下に、見慣れぬアイコンがあった。俺はその正体を探るために意識を少しだけそこに裂く。

手は絶え間無く動かしながら、なんとかそのアイコンの備考を呼び出すことに成功した。

【状態異常：猛毒】

【五秒ごとに総HPの内の1%のダメージを与える。残り56秒】

……単純だが、途轍もない効果だ。

普通に考えて五百秒の間、剣を交えていれば相手は死ぬ。

無論、そんなことはできないのだろう。現に一分の時間制限を付けられている。そうでなければどんなボスも楽々倒せることになる。

この猛毒は今右手に収まる《ポイズンフィン》のおかげだろうか？ 備考にも『自らは猛毒を有する』って書いてあったし。

しかし今の俺はそんなことは気にせずに翹剣を振り続ける。

幸い、まだ一撃も攻撃は喰らってはいない。あの壮絶な痛みにまだ再会してはいなかった。

俺はそんな痛みと再会を果たす前に片づけてしまおうと剣戟を加

速させる。

徐々に、徐々にだが、俺の攻撃回数が増えていく。その間に《スラッシュ》もくり出す。

それから三十秒も経たない内に、三匹が順を追うように光の粒子となって四散した。

そのことを確認し終えた俺は腰に翹剣を戻し、ナツ姉やアキホ、スイたちの居る所へと悠々と歩いて戻っていった。
そしてその俺に突き刺さるのは――、

――総じて驚愕の視線のみ。

「は？　なんか驚くことでもあつたんですか……？」

007：剣狩人な俺は弓狩人な彼女と（後書き）

：猛毒の効果に制限時間表示追加しました。

剣狩人な主人公は弓狩人なスイとの仲をすつごく深めました。

高校の受験が迫ってきたので更新の速度がさらに遅くなりそうです。
ごめんなさい。

008：特異性がバレたらしい俺は

「いやいやいやいやつ。『驚くことでもあつたんですか？』じゃないだろ！　なんだあれ！？」

クワツ、と眼を見開きアロツズさんが叫ぶ。

俺はそれがわからずにただただ首を捻る。

「四匹を……一人で！？　しかも一撃も喰らわずに……！？」

今度はロムさんだつた。

なんだつて言うんだ。確かに一撃も喰らわなかったが。だつて喰らうと痛いじゃないか。

「ゆき……　そう言えばあんたレベルは……？」

今更な感じでナツ姉がそうたずねてきた。

俺的には、面倒くさくなりそうなので言いたくなかったのだが。……　どうしようか。

「あー……、それは言わなくちゃだめか？」

「「ダメ（だ・です）」」」

これまで絶句していた人たちの声も綺麗にそろつた。何でこんな時まで抜群のチームワークを発揮するんだ。

「えーつと……　誰にも言わないと約束するなら。あと根掘り葉掘り聞かないと言つなら」

俺が出したその条件に、六人は各々の反応を見せる。頷く者もいれば、わかった、という者もいる。全てが了解の意を示した所で俺は胸の内で、はぁ、とため息を吐きながら口を開いた。

「――……50だ」

「……は？」

「だから俺は《スカウト》のLv50だ」

そのあとに響いた驚愕の絶叫に俺は思わず耳を塞いだ。

ほらぁ……やっぱこうなるじゃァん……

俺の目の前の六人は瞳を白黒させ口をパクパクと陸に上がった魚の様に開け閉めしていた。

これからの糾弾が面倒臭くなってきたのでそろり、そろりとその場からダッシュで立ち去ろうと足を向けると、

「何処行くんですか兄さん」

「――うげっ」

がしっ、と逃げ出せぬようしっかりと腕と掴んできた。言わずもがな、アキホだ。

「すまん。逃げさせてくれ。後生だ！」

「こんな事にそんな大事なものの使わないでください」

そう言われれば俺も使いたくわないのだが、それくらい使わないとこの事態は絶対に逃げられない。——いや、結局逃げられずにアキホに引きずられて居るのだが。

そんなことを考えている間に俺はその六人の前につれてこられる。

「ゆき、どういふことか話してくれる？」

「兄さん、お願いします」

「スノウ……」

最初からナツ姉、アキホ、スイである。そう言えばスイは俺の事を呼び捨てで呼んでくれるらしい。いやー、こんなに仲良くなれるなんてほんとよかったな！。アハハハ。

つとまあそんな現実逃避は置いておくとして俺は思考を巡らす。どうやって、どうすれば、この場を切り抜ける事が出来るのか。そうだ、アレだ、アレしかないっ！

「そ、それじゃっ」

「「逃げんな」」」

ギンツ、とすげえ睨みが飛んでくる。

なんで！？ 何で俺こんな事になってるの！？

そんな問いも絶対答えをくれなさそうな雰囲気である。

「なんで、そんなに、レベルが、高い、のよ」

なぜそんなに片言っばく言うんだろうか。なんか後ろにオーラが見える気がするよナツ姉。いや、見えるよナツ姉。

「そ、その件についてはノーコメント」

実はもうリンさんに話しちゃったりしてるが、そのことは俺がそんなに高レベルであることを知らなかったからであって、これ以上は知られることは避けたい。

「なんでなんですか？」

アキホの視線が突きささる。物理的には痛くないけど、精神的に痛い。

「な、なんでって、さっき『根掘り葉掘り聞かないなら』って言うたじゃないか」

俺のその言葉に、うぐつ、その他6人が息詰まる。これを確認した俺は、しめたつ、と言わんばかりに話を終息へと向かわせようとする。

「そんなわけだから、この話はこれで終わりです」

俺のその言葉で、まだ納得していないようであったが、曖昧に頷いてくれた。

やめて、そんな視線で俺を見ないで。

しかし俺はそのまま歩きはじめる。如何わしげな視線は途切れていないが、俺は歩きはじめるんだ。

……むしろ走りたいんだけど……いいかね？

そこから後は特に何もなく進んだ。

Lv差があつたためか、俺は職業・スキルともにLvが上がる事が無かつた。ちよつと残念だ。

基本的には六人で戦闘をしていき、幾らか数の少ない敵の場合は俺が殺す、と言つた感じだつた。

今は町に戻つてきているところだ。その帰り道に何回^{走る欲求}発作が出たかはここでは言わない。ただ、逃げ出したいという感じも相まって何時もより数倍多かつたと言つておこう。

「それじゃあ、俺はこれで」

一応、全員とフレンド登録を済ませた俺はそう言つてナツ姉たちに背を向けて歩き出した。

スタスタと速足で歩いて行き、徐々にスピードが上がつてく。

「おおっ」

たつたつたつ、軽快な音を俺の足が奏で始める。

仮想の世界とは思えぬほどにリアルな地面の感触に、どんどん俺のテンションが上がっていく。

「来た来た来た来た」

ここは別にご近所を気にせず走れるし、現実では味わえないファ

ンタジーな景色は圧巻だ。ただの町であるが。現実とはかけ離れ過ぎた外見に心躍る。

「いっつえええ——っいっつ！！！」

人に溢れる街中を我ながら器用に避けて、疾駆を繰り返す。時折りジャンプやステップを加えて、街中を縦横無尽に走り回る。

「いやっつほお——っうつつ！！！」

この身体は現実の身体よりスペックが高いようで、ジャンプでも頑張れば垂直に二メートルくらい跳べる。現実の俺じゃ無理だ。

そんな跳躍力を駆使して町を駆けまわるのは面白いったらありやしない。

驚いても知らずに視線を向ける輩が多数いるが、そんな物は気にしない。どうせ走っている俺としてはそんな物が目に入るのは刹那の間だ。

自分が風になったような感覚に徐々に俺は酔いしれていく。頬は紅潮し、顔は楽しそうに笑っているのは安易に想像がついた。

まあ、想像がついたところでどうこうするつもりもない。というか、意識して止められるものでもない。その事は随分前から知っている。

そんな風に町の中を軽やかに走り回る事約三時間半。Lvが上がったからか、体力の限界が訪れるのがだいぶ遅くなっていた。

「ほっ、はぁ、ふう……」

思わず地面に腰をおろし、切れ切れの吐息のまま空を仰ぐ。
走り始めた時は夕暮れ時の様に赤く染まって居た空は、星煌めく
夜空に姿を変えていた。樹海のように空を阻害するものは何一つなく、
吸い込まれてしまうようだった。

「綺麗な……、もんだな」

思わずそんな言葉が口から零れる。

まあ、素直に感嘆の言葉を送っていいほどのものであることは確かだ。

「あ、そくだ、今日の宿どうしよう……」

そう言えば寝るとこない。

ふと思い出したその事実を少し固まる。

「とりあえず、探すしかないか……」

俺はそこで十分くらい休憩したのち、また走り始めた。……――
出来るだけ速度を出さないようにするのは至難の技だったと一応言
っておこう。

「……………何故だ」

俺は独り立ち止まる。

「何で見つかからないっ！」

そうなのだ、宿屋が見つからない。

いや、本当は見つかっているのだが、どの宿屋も満室で空きが一つも見当たらない。

確かに俺は出遅れた。町デビューという結構なイベントに半端なく遅れてしまった。が、この仕打ちはないだろう。寝床すら獲得できないってどういうことだ。これじゃアイテムすら買えない――、

とそこで俺は最悪の事実気がつく。

「金は！？俺って金一銭も持っていないじゃん！？」

そう言えばそうだ。ナツ姉達との戦闘ではポーション等のアイテムを持っていないとわかってから少しだけ恵んでもらったので、アイテムの購入経験すらない。

というかこの世界の通貨が何だったのか、これまで色々あり過ぎてもう思い出せない。

「チクシヨウ……これじゃ仮に宿屋見つけても部屋を借りれない……」

うぐぐ、と俺は唸る。

どうすれば、金を手に入れられるのか……。その事を俺は考える。たいして良くもない頭で考え続ける。――そして名案が！

「そうだ！森で手に入ったアイテムとか換金す……れ………ば」

尻すばみになっていく俺の言葉。それもそうだ。だって――、

「ってだからどこで換金すんだよ！ そんな場所知らねえよ！」

もう嫌になってくる。フラフラと歩き続けていたら何時の間にやらやばい雰囲気漂う場所に着ちゃってるし。始まりの町にこんなところ用意していいんだろうか。

それに見てみてほしい。あそこに見えるのが何かわかるか？ 『娼館』って書いてあるぞ。良いのか？ これ。というか出来るのか、こじ。』

まあ、俺はそんなところ行くつもりはないがなっ！ 初めては好きな人の方が良いしっ！

……急に何言い出してんだろ、俺。

そんなこと言いだしたそこらへんの俺を置いておいてここの俺はどうすればいいか再度考え始める。そしてもう一度名案が！

「そうだリンさん！ リンさん防具屋だし、何か買ってくれるかも知れない！ それに駄目でもきつと換金できるところを教えてもらえるはずだ！」

そうときまつた俺は「オープン」と短く発声して、メニューを開く。そこからフレンドリストを探し出し、その中の七つの名前の中から『Eリン』という名前を左の人差し指でプッシュする。更に追加で現れたリストの中から、『コール』を選んで、更にプッシュ。

するとブルブル、と一昔前の電話みたいな音が聞こえてから、頭の中で音声が反響するように女の人の声が響いた。

『只今、Eリンさんは就寝中です。再度掛け直してください。只今、Eリンさんは就寝中です。再度掛け直してください。只今、Eリンさんは就寝中です。再度掛け直してください——……………』

「って留守番電話かよっ！」

思わず叫んだ。

ぬか喜びさせないでほしかった。

一瞬、女の人の声が聞こえたからリンさんにつながったと思ったのに。

「どうしようか……」

思わず呟く。脱力したように俺は身近な壁に背中を預けた。

「ここは……、うん。そこらへんで寝ればいいか」

野宿の経験があるからか、意外と抵抗が無い気がする。

そつと決まればと、どこで寝るのか考え始める。

「地面は……嫌だな。なんか汚そうだし。そこらへんで座って寝るか……？ うーん、それもなあ……。——あ、屋根でいいか」

意外と簡単に決まったので、俺は丁度いい赤い屋根の民家を見つけると、壁に手を掛ける。そのまま、「よっこいしょ」とおっさんみたいな声を出しながら壁を登っていく。

三十秒としない内に赤い屋根の上に辿り着く。眠気もそれなりに溜まっていた俺は無造作に寝転がった。

「明日は絶対に金を手に入れてやるぞお……」

そんなことを呟きながら俺は星煌めく夜空としばしの別れを告げ、
瞼を閉じた。

樹海とは違う屋根の感触も悪くはないな、なーんて思いながら俺
は眠りについた。

008・特異性がバレたらしい俺は（後書き）

自分の特異性がバレた主人公は、一文無し故に屋根で寝ることになりました。

009：攻略の始まりを知った俺は

”ポーン”

まどろみから即座に覚醒した俺の耳を、どこからともなく響いた電子音が叩いた。瞳を見開き、堅い屋根から身体を起こす。

何事かと首を左右に振る。すると、それは再度俺の耳に響いた。

『王の塔《小鬼王の塔》が、ギルド《half・and・half》
《「ギルドマスター：ガンテツ」によってクリアされました」』

昨日、リンさんにコールして聞いた留守番電話の声と同じ女性の声。

それが、何時の間にか真上に上っていた太陽と空を覆うように広く響き渡る。

その声が響いた数瞬後、今度は別の――……様々な驚愕の音が響き渡った。

何時の間に攻略出来るようになったんだとか、どうやって攻略したんだとか、あのギルドってあんなに強かったのかとか、色々だ。屋根の上に居るのに聞こえるってあんだ等どんだけ大声なんだと言いたくなる。

俺としてはそのギルドの名前からピザを想像してしまっただけ、無償に食いたくなった。もちろん虫肉も美味しいのだが、少々飽きが出る事もある。……はあ、お腹すいた。

そう思った俺はもはや半自動的に左手が動いた。メニューの画面から【アイテム】の欄を選択し、《黒紫の蟲肉》を二つ外に出して

ガシッと両手に一つずつ掴む。

左右で交互に腕を動かしながら、もっきゅもっきゅと咀嚼していく。

「どーすっかなー……」

俺は手や口に赤黒い血を滴らせながら俺は呟く。

「とりあえず、金だよなあ……。金が無いとどうしようも無いし」

全て食べ終えた俺は両手を軽く払い、付いた血を振るい落とす。幾らかは残ってしまったが、それでもいいか、と俺は立ち上がる。昨夜よじ登った時とは違い特に苦労することも無く屋根から飛び降りる。

バシッ、と広がる足への衝撃が意外と少ない事に首を傾げながら前を見据える。

「ま、一応リンさんに『コール』してアポ取っとくか」

そんなことを口から零しながら俺は歩き出した。

まだ見ぬ金に向かって――。

「——あ、リンさん」

俺が手を振りながらそう呼びかけると、リンさんは小さく笑顔になりながら手を振り返してくれた。

先日と同じ場所に露店を開いていたリンさんの所まで寄って座り込む。

「とりあえず、さっき言った通りアイテムの換金って出来ますかね？」

「もちろん。ある程度なら買い取れるよ」

俺はその返答におおっ、と感嘆の声を上げ、さっそくアイテムをメニューから実体にしていく。

「あっ、大丈夫だよ。トレードウィンドウ使えば済むから」

リンさんのその言葉に俺は思わず間抜け面で顔を上げる。

「……そ、そんな便利なモノが……？」

そうするとリンさんがあはは、と笑いだす。いくらなんでもそりゃないよ。

俺が軽くうなだれている間にリンさんは手早くメニューを操作して自分の前、そして取引相手である俺の前にトレードウィンドウを出現させた。

そこに自らのアイテムを放り込もうとしたところで、手がピクリと一度止まる。

「？ 何したの？」

「あ、いや、何でも無いです」

俺は自分のアイテム欄が九割ほど紫とか緑とかの毒々しい色のアイコンが詰まっている。さて、これはどうしたものか……。

残り一割は先日のナツ姉たちとの狩りで手に入れたアイテムなので、何の迷いもなく売れるのだが、俺がああ樹海で手に入れたアイテムはどうにも簡単に売りに出せない。

まあ、売れるところは売れるのだろが、これらのアイテムの相場がわからない。なにより、ちゃんと相応の値段で買い取ってくれるかも分からないからだ。

むむむ、と悩むこと時間にして約コンマ三秒。

結局、売らない事に決めた。

何というか、これまで売ったらまた目立ちそうだ（……特には今のところ大多数に目立っている訳ではないが）。

俺は先日手に入れた枯枝みたいな素材やら、真っ赤な花弁みたいな素材やらのアイテム類を全てトレードインドウの中に詰め込む。そうしたら俺はトレード了承のボタンを押し込む。

「お、来た来た。どれどれ程の物が……」

渡したアイテムをリンさんが物色していく。

ときおり、おおっ、と驚いた様な声も出すから、意外とレアアイテムもあつたのかもしれない。俺的にはそんなことよりもどれだけお金がもらえるかが問題なのだが。

「——うん。結構いいの持ってるね。これなら全部で2510^{エル}位かな」

「……えっと、それは結構いいんですかね？」

「十分良いよー。大体は現状で最高レベル帯の人が半日で稼げるくらいかな」

ふむ、妥当なようである。

先日の戦闘はこの世界の最高レベル帯（俺を除く）の人たちと一緒に戦闘してたからこの金額で十分だと言える。それとこの世界の通貨はE^{エル}Lだそうな。やつと思い出したわ。

そんなことを考えてると俺の前にトレードウィンドウが再度浮かんだ。そこには、「2510EL」と表示されてあるのが見て取れた。そのことを確認した後には了承のボタンを押しこむ。

よっしゃ！ 金ゲット！！

俺は小さくガッツポーズをした。

「そう言えば、一番初めの王の塔が攻略されたよねー」

買い取りが終わった俺にリンさんが話を切り出した。

「そうですね。……そう言えばあの《half・and・half》っていうギルドなんですか？ ピザですか？」

「……………いや、ピザじゃないけど。確か男所帯の今のところ一番規模の大きいギルドじゃなかったっけかな？」

「男所帯て……、ムサ苦しそうですね」

「うーん、まあ確かにそうかもしれないけど、今のところ一番人数の多いギルドだから、《White My Heart》と良い感じらしいんだよね」

「《White My Heart》？ それ何処のギルドですか？」

俺がそう聞くと、リンさんは目を見開いた。——あれ？ 俺変なこと言ったか？ 別に聞いたこと無かったから聞いたただけなんだけど……

「え？ そのギルドの人を探しに言ったんじゃないの？」

「はい？ それ誰の事です？」

「いや、だから、Nat uさんとかA k i h oさんとかが所属しているギルドの事だよ。……もしかして知らなかったの？」

「……ええ、まったく」

そう言えば一番攻略に近いギルドのギルドマスターをしていると言ってたな。

でも、それなら何で攻略をしに行かなかったんだろう？

「ああ、そう言えば《half・and・half》が王の塔を攻略したからそこに入ろうとしてる人も増加してるらしいよ？」

「へー……」

そんな理由だけでギルド決めるなんて、俺には考えられない感じだな。

俺のことをじいっと見つめる淡いブルーの瞳を感じて、俺は問う。

「なんです？」

「いや、スノウ君はギルド入らないのかなーって思ってた」

「入りませんよ。面倒くさい」

「め、面倒くさい……？」

「ええ、必要以上に人と関わるのは面倒なんですよ。関わるのは限られた信用できる人におきたいんです」

「……へえ。——その”限られた信用できる人”って私も入ってる？」

「正直、そこまではいって無いです」

俺はそこできると、リンさんが目を見開くのがわかった。俺はそれを直視しないように碧く染まった天を仰ぐ。

上を向いたまま、俺は言葉を続けた。

「——でも、これからの付き合い次第で売り手買い手から、親しい友人になったり、彼氏彼女とかにもなるかもしれないですね」

俺がそう言っただけで薄く微笑みながら顔を正面に戻すと、リンさんが顔を赤く染めながらこっちを見て呆けていた。

「ん？ どうしたんですか？」

「………——っ。な、なんでもない、なんでもないよ」

俺が困惑を浮かべながらそう聞くと、リンさんは赤くなった顔を隠すように手のひらを正面に突き出してブンブンと振った。

何でも無いと言い張っているが、どこからどう見ても何でも無いようには見えない。しかし、本人が何でも無いと言っているからどうすることも出来ない。

どうしたものか、と思案しながら俺は取り留めもない話を続けていった。

赤い顔で呆けるリンさんは可愛らしかったと、話を続けながら頭の片隅で小さく思った。

「それじゃ」

「う、うん。またねー」

そう言って立ち上がった俺は手を振りながらリンさんの露店を後にした。

先ほどの世間話で色々な事を聞いたから、これからの予定も決まった。とりあえず、様々なNPCシヨップがそろう通称、『商店街』と呼ばれる所に行ってみる事にした。

そこでポーシヨン等の回復薬を買い、そのあとは地図を買い、事にした。本来は食材等も一緒に買っらしいのだが、俺は『黒紫の蟲肉』があるのでその必要はない。

「いらっしやいませ」

「ああ、ポーシヨン類を見せてほしいんだけど」

商店街についた俺は、そう言って額に五亡星の様な紋章を浮かべた少女に声を掛けた。

少女は俺に向かって手を一振りする。それと連動したように目の前に見慣れぬウィンドウが浮かび上がった。そこには【HPポーションLv1】や、【MPポーションLv1】などの回復薬のほかに【毒ポーションLv1】や【麻痺ポーションLv1】などの毒薬も並べられていた。この毒薬は投げつけて使うそうだ。俺は《ポイズンフィン》があるから必要はない。

とりあえず【HPポーションLv1】と【MPポーションLv1】を十五個ずつ買った。一つ50ELだから、合計で1500ELとなり、残りは1010ELだ。

とりあえずそこでの買い物を終えた俺は次の店に向かう。

今度は額に五亡星の様な紋章を浮かべた三十路過ぎたくらいの無愛想っぽいおっさんだった。

「いらつしやい。どこの地図をお求めで？」

「とりあえず、全部見せてください」

「あいよ」

その返事と共におっさんに指が振られ、目の前にウィンドウが出現した。そこには、【地図：始まりの町 ユーレシア】や【地図：メクル草原】などの町やフィールドの地図が並んでいる。先日狩りをおこなった森も、【地図：トンナの森】という名で地図が置いてあった。

そこから、当然として【地図：始まりの町 ユーレシア】を100ELで買い、そのあとは欄の一番上にある物から順に購入していった。

残金が10ELになってしまつて何も買えなくなったので買い物終わりにした。

何時の間にか周りは夕焼け色だった。

町の中を歩きながら俺は観光でもするかのように辺りを見回す。

……もちろん、観光しているわけではない。俺の目的は今夜泊まれる宿を探すこと……で……。

「——って、あああああああつっ!」

俺は自分の失態に気がついた。

俺、今、10ELしか、無い。

しかし、宿に、泊まるには、最低でも、”50EL”が、必要である——。

「やつちまつたああああああつっ!」

思わず頭を抱えて叫ぶ俺に街中の人々の視線が向けられる。

……—とりあえずその視線から逃げるように走りだした。

009：攻略の始まりを知った俺は（後書き）

攻略の始まりを知った俺は、アイテムと金を手に入れて結局は金欠になりました。

先日、何か新しい小説読もうかとランキングを見たら、ちょっと目を疑いました。なんと……、なんとなんと！

日間ランキングの1位になってました！

ビックリです！　ありがとうございます！　これからもぜひ、よろしく願います！

010: ザコを倒した俺はとりあえず

自分の失態から、無我夢中の無表情で町の中を走り抜ける。視界から己以外の物が消え去り、自分が世界の一部になったように錯覚する。

「……っっ！！」

何時もとどこか違う無言の叫びが口から飛び出る。

……——まあ、ここまで仰々しく言つたが要は泊まる宿が無いから結局は今日も屋根で就寝になりそうであり、その事実と自分の無計画さが情けな過ぎてそれを振り払いたいが為にこういう風になっている。

「——あつ、そうだ！」

キキツと効果音がつきそうなくらいに急ブレーキをかける。

突然立ち止まった俺に普通に道を歩いていた人たちはビクウツと驚いたような視線を向けてくるが俺はそんな物にかまっている余裕はない。

「今から稼いで来ればいいじゃん！」

クルツとユーターン。そのままさつきと同じ速度で走りだした。とりあえずまだ夕方だ。これならほんの少しだけ稼いで戻ってくればたぶん間に合う。きっと。

俺は相も変わらず安易な考えで夕焼けで赤く染まる道を駆け抜けた。

とりあえず最初に着いたメクル草原で見つけた《ブルースライム：Lv1》というのを斬り付ける。「グピュッ！」とか変な断末魔をあげて《ブルースライム》が光の粒子となって消えた。
何かアイテムが手に入ったか、とアイテムの欄を開く。増えたアイテムの備考にはこうあった。

《ブルーゼリー》

【ブルースライムの亡骸。爽やかなブルーはサイダーの味！ 初心者冒険者の渴いた喉に優しい味方！】

……………ナニコレ。

え？ なに、あのドロドロのトプトプだったスライム飲むの？
え、飲むの！？

とりあえず確かめてみる事にした。実体化のボタンを押しこむ。
すると、何も無い所からコップを傾けたようにボタボタと青色の液体がこぼれ落ち――、

「っておい、まて！ ちょっとちょっとちょっと！」

しかし時すでに遅し、とつさに手を差し出すも、「あれ？ まだ生きてる？」と問いたくなるほどの動きでするりと手の隙間を抜けていった。草原に落ちた《ブルーゼリー》は、しゅーっと溶かされたような音を立てて蒸発した。

「え、ええー……。なにこれ、どうすればいいのさ？」

やることも無い右手の翹剣を担ぎあげるようにしてカツカツと肩を叩く。

「もしかして本来はコップとかで注ぐのか？ ……ま、今は無いから放置ということだ——ハッ！ そうだ、直で飲めば問題無いな！ 出てくる場所はだいたいわかったし！」

そんなわけで、俺は【索敵】を発動して周囲を見渡す。すると10メートルくらい先に居るところを発見。

「待ってるや、俺のサイダーあーっ！」

……というか”ゼリー”が”サイダー”って矛盾してない？

そのあと一時間くらい、俺は狂ったように《ブルースライム》を屠りまくった。

途中に初心者パーティーらしき奴らに出くわした。俺の防具を見て初心者と思っただのか誘って来たんだが、とりあえず断つといた。「てめー、俺たちが誘ってやってんのに断るってか、ああん？」みたいなこと言ってたけど、途中から無視して《ブルースライム》斬りつけてたら何時の間にか居なくなっていた。

これだから人と関わるのってめんどくさいんだよ、ハア……。

空は微妙に薄暗くなっているが、【索敵】を持つ俺の敵ではないしかし、狩りつくしてしまったのか、狩るべき対象が全く見つけれなくなってしまった。

一応、どれ位の量が入ったのかとアイテムを確認すると、そこには《ブルーゼリー》×74とあった。

絶対落とすわけではないから、たぶん百匹以上狩ってると思う。

そりゃあ、モンスターの湧出も枯^{ホッブ}渇するわな。

辺りにモンスターの気配が全く無いようなので、俺は気だるげに翅剣を肩に担ぐ。少しの間思考を巡らせ、それが終わると同時に俺は翅剣を鞘に戻した。

「それじゃ、さらなる獲物を求めて――」

バツ、と座り込むように体を沈ませる。しかし、これはただ体を沈めたわけではない。これは所謂クラウチングスタートというやつだ。

「――レッツ、ラン!!」

バシュツと風を切る音が俺の耳に届く。
その後も、風の音がたびたび変化する。最終的にはゴオオオオオ
ツ！と轟音が耳を叩く。人によれば雑音とも取れそうなソレが、
俺にとっては堪らなく気持ちイイ。

「ヒヤツツツフウウ——ツツ——」

どっかで快樂殺人者とかが上げてそんな奇声を上げながら、俺は
草原を疾駆する。しかし数秒もすれば草原を抜け、林の様な所にな
った。

しかし俺は止まることは無く、足を動かし続ける。……いや、止
めようと思ったところで足が止まらない。まあ、俺の意思を特に無
視している訳ではないから別にかまわないのだが。

「いやつつほオオ——ツウツツ——」

疎らであるがそれなりの太さの木が出てきたので、それを土台に
するようにジャンプし、加速していく。

それ程の距離を飛べるわけではないのだが、まるでバネの様に俺
は飛びまわる。

今までにない走り（……というか跳び？）に自分の興奮が手に取
るようにわかる。熱を帯びてゆく顔と身体が、にいつと吊りあがる
口の端が、俺の今の心情を表している。

「いっつつえええ——っいっつつ——」

林の様な所から、木が生い茂る森へと変わっていった。この前来た森のようだ。

しかしの視界の端に表示された【索敵】スキルのミニマップが3匹のモンスターを捉える。表示されるのは、《枯れてしまった木人》と《人食らう花》と《跳びはねる種》というものだった。

何とも厄介な混成パーティーである。特に厄介なのは《跳びはねる種》だ。人の頭サイズの種がバンバン跳ねている奴で、小さいのに動きが素早いから面倒くさい。あと、いきなり突撃してくるのも痛い。

そんなわけで俺はそれらを無視していくことにした。幸い、距離があるためにあちらに発見されている訳ではない。

——と、思っていたのだが。

「——ってあれ！？ こつちに進んできてる！？ しかも増えた！」
ってなわけだった。

不規則にユラユラ動いている筈のモンスターのパーティーは真っ直ぐこちらに向かってきている。

それに、見える光点も三つからいつの間にか十二になっていた。一匹の奴が三つと三匹パーティーが二つ程増えている。

「なあ——っ、んう——っ、でえ——っ、だあああああつ！！」

逃げるように走り回る俺の後方を、ぞろぞろと付いてくる。

移動速度は俺の方が勝っているようで徐々に差は開いてはいるが

「また増えたあつ!？」

光点は約二倍の二十六になっていた。やっていられるかボケ。

まあ、ここで愚痴ったところでどうしよも無いので、俺は叫びながらも爆走を続ける。

「うおおおッッ、らあああああああ——ッッ!!!」

ザザザザッ、と足音を立てながら体を前に跳ばす。

正直、今までの様な楽しみは消えかかっている。なんせ、二十六匹のモンスターに追いかけてるにいるんだ。この状況で楽しめるってどんなニンゲンだよ。少なくとも俺はムリだ。ムリ。

——と、そんなことを考えてたら数が減った。

何が? ——モンスターの数が。

二十匹越えだった数が、いつの間にか十八匹になっていた。

「撒けた? 撒けたか……? ——ってうべらばっ!？」

変な声が出た。……が、しょうがないと思う。

目の前にいきなりモンスターが湧^{ホップ}出し出して、それにモロぶつかった。

大半が光の粒子で構築される途中であつたので良かったが、そう

じやなきや俺の方が吹っ飛ばされそうだった。

——むしろそのおかげで顔面だけにクリーンヒットするなんて言う事故が起きたんだが。危うく転ぶ所だった。

「ちよつちよつちよつ、ちよつとまてえ——っ！ 明らかにデカイのが混じってるだろうがあ——っ！」

何か知らない内に視界の端のマップに普通の奴の三倍くらいの光点があった。位置的に、俺がぶつかったヤツ。

ついさっきぶつかった訳だから、当然距離も近い。しかもそのぶつかったおかげで俺は一時停止してしまった訳で。

まあ、何が言いたいかというと——、

「こええええええええええええええええ——っ！」

うん。そうなんだ、怖い。

あの三倍野郎を筆頭に、俺の3メートル後ろくらいを爆走してる。その裏からも、ぞろぞろと軽く十を超えるモンスターの大量がっ！

ちらつと後ろを盗み見ると、いるわいるわ植物の塊が。

一番前のヤツは《^{みなぎ}漲る大樹人：Lv29：》とかいうので、身長3、4メートル位で頭に生茂った緑をかぶったデツカイ樹だった。しかも無駄にムキムキである。両端から突き出た腕はどつかのボデイビルダーの様だ。

ちなみに後ろについてる” はフィールドに稀に出るフィールドボスの証らしい。ぶっざっけっんっなっ！

「みなぎってんじゃねえよおおおおおッッッ!」

なんかこの惨事にイラついたので叫んだ。特に意味は無い。

「うぎぎやあああああああッッ!」

もう一度叫んだ。特に意味は無い。

——と、そこで視界の端に人が見えた。なんか騎士っぽい鎧に包んだガタイの良い男、イケメン。なんか見たことある顔の気がしたけど、たぶん見間違いだろう。

取りあえずここつてイケメン多いなーと呟いてから、よっしゃっ
エターナルオンライン
と胸の内言う。そちらに助けを求めようと口を開いた時――、

「あつ、すいません助けてくれま――」

ザンッ

「うぎぎやあああああッ!」

あ、この悲鳴は俺のじゃないからね。あつちの人。うん、なんか戦闘中だったっぽい。何に驚いたのか、俺の方を呆けて顔を見てたら目の前のモンスターにぶった切られて、おっ死んだ。

「——って、んなアホなあああああつ!？」

えーっと、まあ、とりあえず走った。

もはや楽しさなど皆無。恐怖しかない。それに心なしか空気がジメジメしてきてる気がする。

「もういやだあああああああ——っつ!！」

あれから、どれだけ走っただろうか。

さすがに俺も疲れて来ている。息もそれなりに上がっていた。

もうすでに二つはフィールドを超えた。上の空も煌びやかな月に照らされた夜空だった。突きが異様に輝いているので、今は明かりに不自由しない。それはいい。それは良いのだが——

「——って、何でこんなとこまでついてきてんだあああああああ
っ!！」

ちらつとほんの少しの期待を抱いて後ろを振り返るが、その期待をバツサリ切るかのように、やはりいる。

無駄にムキムキのボディビルダーの様な大樹が。

おかしいと思わないだろうか？ 俺は思う。

一つのフィールドに居座り続けるボス、の意でフィールドボスというカテゴリだと思っていたのに、現にアイツだけは俺をしつこく追い回す。他のヤツは全部撒いたのだ。というか、フィールドを移動する際に全部いなくなった。

今のフィールドは何処かは知らないジメツジメの草原。最初の草原とは違い、本当にジメジメしてて正直鬱陶しい。入った時に思わず「鬱になるわ、ボケっつー！」と叫んだ。

それに、この地図は俺は買っていなかったようだ。それがまた俺の鬱（？）を加速させた。それに地面が微妙にぬかるnderのもある。走りづらい。

「あー、ちつくしょう。やってやるっ！」

いい加減逃げ疲れたので、俺は振り返って翹剣を抜く。

ぬかるnderから余計疲れたっていうのがある。これ以上走るのはいくら俺でも無理なんだ、うん。

「行くぞおらああああ——ッ——！」

俺が声高らかに叫ぶ。

「ゴボウウウアアアアアアアッ——！」

あちらも叫ぶ。

その叫びを聞いて、俺は思うところがあったので、また叫ぶ。

「お前ってゴボウだったのか!？」

実にどうでもいいこととは、自分でも流石にわかった。

010:ザコを倒した俺はとりあえず(後書き)

主人公がなぜこんなに追われているかは、叫んでるからです。バカみたいに叫んでいるからなんです。

あと、ボスが何でいつまでも付いてくるかは、今はまだ明かさないことにします。

ザコを倒した俺はとりあえず、ムキムキの^{ボディービルダー}大樹にストーキングされてる。

次回はストーカーを追っ払うハナシ。

ついこの間に「お気に入り」が100を超えたぜーっ！ヤッフウーッ！」と喜んでいたのですが、いつの間にか3000になってました。

なんか驚きや喜びを通り越して怖いです。もしかして明日死ぬんだろうか……。気が気ではありません。

そして日間一位に続き、週間一位もいただきました。皆さんのおかげです。ありがとうございます！

こんな駄文ですが、これからもよろしく願いいたします。

011：湿原で澄んだ音を奏でた俺は

俺は翹剣を左の下方に構える。

妙にぬかるんだ大地を出来るだけ踏みしめ、掴む。

「——いくぞっ！」

俺は跳び出す。

まずは斬り上げ。しかし、それは凶太い根にコオンツと響いた様な音を立てて弾かれた。中は空洞なのだろうか、異様に響く。

大ぶりで振るわれた大樹の剛腕を、微弱なバックステップで避ける。

自分の眼が驚愕に見開かれる。ここから見えるHPは雀の涙ほどしか減らなかった。いや、本当に減っているかも定かではない。しかし、タネ^毒は植えた。

「ちっ！ 硬いなッ！」

でも、硬い事には変わらない。

俺は絶え間なく剣を振り続ける。

カアアン コオン カアンツ コカアンツ コオンツ コオオオン……

まるで良質な木琴を叩いているかのような、ムキムキの大樹には全く似合わない綺麗な音が響く。

——剣戟は続く。

はあはあと息が上がっていくのがわかる。
これまでの長かった走劇のおかげで、疲労はピークだ。今にも限界を超えてしまいそうな身体だった。

「……………取り合えず、一分だッ！」

一分。

それは俺の剣が持つ猛毒の制限時間。解除されるまでの、時間。出来るだけその間に、HPを減らしたいところだ。削れる時に、削れ！ 切れる前に、削れ！

コカコカカコココカカカコカコカコカコオオオン……………ッ！！

湿った草原に場違いな澄んだ音が連続して響く。

大樹が振るう剛腕を、俺は避け続ける。

そして、一分。削れたHPはギリギリ三分の一だけだった。

しかし、硬い。猛毒の効果が12パーセント、約一割。それに対して俺が削れたのは約二割。普通ならもうとつくに倒してる筈なのに……………、ってこれボスか。

一旦距離をとる。今のヤツは毒の解けた状態だった。対して俺は疲労のたまった状態だ。息が、切れている。

「……………はあ、はあ、はあ……………」

俺はもう一度翹剣を構える。

「願わくばもう一度……、毒の侵されるおッ！」

なんか物騒なことを叫びながら俺はもう一度剣を振る。黒紫の剣戟が、舞う。

「——なっ!？」

俺は目を疑った。

コオン……、と響いた後に訪れた変化は、HPバーの下に現れた。

「猛毒ってこんなに簡単に出るのか!？」

これは、俺がここに来る前に攻略サイトで見た話と違う。

俺がそこで見たのは毒系の状態異常は制限時間切れで解除された場合は次に掛かる確率が極端に落ちる——というものだったはずだ。これには、抗体が出来ているのでは？と言われていたが、真意は明らかではない。

だが——、

「らっきー」だ!」

猛毒が絶対に出る。

これは俺の絶対的なアドバンテージだ、と思う。これなら絶対に勝てる。あと数分粘れば勝てる。

俺は意気込む。

「行くぞっ!」

景気付けに一発。

今のところ一番威力のある戦技^{アーツ}のモーションを再生。そしてそれを己に投影。

自分の身体が、何かに突き動かされていく感覚。

身体が加速され、知覚が加速され、思考が加速される。

「おおおおおおおっ！！」

発動するは今のところ最大威力である《トライスラッシュ》。

黒紫の刀身が淡い水色の燐光を纏う。相当な速さで動かされる俺の腕に従って、剣の軌跡が水色の正三角形を描く。

「——あつ」

「ゴボオオオオオオオウウウウツツ！！」

初めて、奴のHPがが目に見えて減少する。

——俺は嗤う。

それから俺は大樹の剛腕を避ける事に専念しながら、自分が扱えるだけの戦技^{アーツ}を次々と織り込んでいく。

——毒に侵された敵を見て俺は、嗤う。

「ゴオボツ……、ゴボオオオオオ……」

消え入りそうな断末魔を上げ、《ガチムチストーカー漲る大樹人》は倒れた。湿った空気を通して響く断末魔はどこか悲しげだった。

その声を聞くときは俺はもうすでに湿った地面にぶっ倒れていた。というか聞く前からぶっ倒れていた。

——正直、猛毒のタイミングが間違ってたら俺は死んでた。

もう体力（HPじゃないほう）は欠片も残っていない。ぶっ倒れたままで、ぜえはあと切れ切れの息の音が木霊し、肩が激しく上下する。

とりあえずHP回復のためにポーションを取り出す。キュポンツとコルクを抜き、小瓶に入った薄赤の水薬をいっきに煽る。

剛腕を一度かすただけだったので、ポーション一本で事足りた。

今度は腹ごしらえに、とメニューを操作して虫肉を取り出す。

寝転がった俺の真上に出現。え、ちょっ、まっ——

べちゃ……

「うへえ……」

俺が避ける前に顔面に虫肉が激突。赤黒い血が滴る新鮮な生肉を熱いキスをするようになった。あ、これはノーカンね、ノーカン。

俺まだファーストキスまだだから。

顔に乗った虫肉をどけてから、ポーションによって少しだけ回復した体力（この場合は数値的なHPではない）を使って、むっくりと体を起こす。

ついさっき熱いキスを交わした相手ではあるが、俺はぐっちゃぐっちゃと喰いちぎって口に含む。

薄情だとは言わせない。むしろ俺のファーストキス（ノーカン）を奪ったあいつが悪い。

今度は喉が渴いてきたので、あの《スライムゼリー》を飲んでみる事にする。

とりあえず、今度は逃がさないぞっ！　と言わんばかりに俺はクラウチングスタートの様にすぐ動ける体勢になった。

そしてアイテム欄から《スライムゼリー》を選択し実体化のボタンを――、押すっ！

唐突に、とろりとろりと虚空から青色のゼリーがこぼれ落ちる。

俺は高速で体勢を変え、顔を上に向けたブリッチの様な体勢になる。ガバツと大きく開いた口には青のゼリーが入ってきた。ゼリーというよりも液体に近いソレをゴクリゴクリと喉を鳴らしながら飲んでいく。

味は確かに備考に書いてあったようなサイダーの味だ。だが、残念なことに炭酸が抜けた甘ったるい感じのヤツだ。まあ、俺はこれはこれで美味しいと思うが、人によりけりだろう。

そんな感じでゴクリゴクリと俺は飲んでい――、

「――っふッ！？」

むせた。

予想以上の量に俺の口がキャパティシイを超えた。うん、ムリ。

「ごっふ、げふ、げふ、げふ……………」

ブリッチ解除。

俺は湿った草原にどっかり座りこむ。

「こりゃあ、やっぱりコップとか入れ物が無いと駄目だな、うん」

口元に少しだけ残った《ブルーゼリー》を大雑把にゴシゴシと右腕で拭う。

俺は背中から倒れ込む。湿った地面が背中に感じられて少し気持ち悪い。でも同時に、何か暖かい。

今は月煌めく夜だという事を忘れそうだ。現に、月明かりがとめどなく輝いているので視界は良好である。

俺は少し目を瞑る。

じめじめとした空気が俺にかぶさるように漂う。

そこからちよつと……、まあ、寝た。

「――^{何だ}Way!? Oh!」

あれ？ 何故に俺の口から急に英語？――ハッ！もしかして俺には英国人の血が……

「――つて、痛いっ！痛いっ！」

バカなこと言ってる間に頬とか脇腹とかチクチク、チクチクと何か鋭利な物が突き刺される。

寝ころんだ身体を起こして何だ何だと俺の周りを確認すると――、なんか50センチメートル位の角の生えたイモムシが三匹、もぞもぞと俺に群がってる。サイズは中型犬くらい。確認すると、名前は《イツカク芋虫：Lv26》とかいう……

「うぎゃああああああっ?!?!」

思わず悲鳴を浴びた。じゃない、上げた。

何だこの状況!?そしていつの間に朝になった!?お天道さんが異常に眩しいのだけでも!?

もぞもぞと群がりながら《イツカク芋虫》は俺のいたるところをチクチクと突き刺してくる。幸い、防具が機能しているのか知らないが貫通するまでに至っていない。

しかしそれでも攻撃は攻撃、俺のHPはちゃんと減ってる。

――ハッ！そうだ昨日は、

チクッ

「いたっ、痛いっ！ちょ、お前ら！大人しくしてろ！」

俺がそう言つと、言葉がわかるのか一歩引いた位置になる。なんだ、話のわかる奴で助かった。

——そうそう、昨日は、

チクチクッ

「いでっ、ちょ、さっきより痛くなってるっ！……ほら、まてっ！」

俺は今度は身ぶり手ぶりで相手を落ち着かせるように手を向ける。なんか猛獣に「どーう、どうどうどう」って言ってるみたいな雰囲気。よし、今度は大丈夫だな。

——よしこれでオッケーだ。そうだ、昨日は、

ブスッ

「いつでえええええええっ！！　ちよつとまて！　何だその一線を越した効果音は！　刺さってる！　俺の脇腹に刺さってるんじゃないかねか！！」

一匹の《イツカク芋虫》のそのご自慢の一角が俺の脇腹に刺さっていらっしやる。座っていた俺は思わず立ち上がった。

それと同時にぐわん、と釣られるように《イツカク芋虫》がくっ付いてくる。

スポッ、ヒュッ

——と、思ったら抜けて飛んでった。二、三メートル飛んだところで地上とグシャツと再会している。……何がしたい。モンスターに聞いても駄目だということは分かっているが、もう一度問う。何がしたい。

とりあえず、いい加減キレた。

「さすがに我慢のげっんつかっだった！」

腰の翹剣を抜く。

弧を描いて飛んでいった方は一旦放っておいて、目先の二匹の《イツカク芋虫》を狩る。

袈裟、逆袈裟と景気付けに二閃。そのあと絶え間なく剣を動かす。《ガチムチストーカー漲る大樹人》と戦った後だからか、皮膚が異様に柔らかい気がする。

ズザザザツと剣閃が走り、それと同時に二匹がデータの屑となる。

そしてそれと入れ替わりに俺の脇腹に刺さったヤツだ。コロスコロスブッタギル。

とりあえず《トリスラッシュ》をお見舞いしといた。さっきの落下ダメージが少しあったからか、今回は一撃でデータの屑となった。

「おし、片づけは完了だな。これで思考を再開出来るぜ。そうそう昨日は——」

——そうだ昨日は野宿したんだ。

「——ってまたか俺っ!!」

俺のツツコミが湿った空気に木霊した。

さすがにまた野宿は自分でもどうかと思った。うん。

「……………」

あと、一人ポケツツコミは寂しい。

あー……………、こついつときだけの都合のいい仲間がいればいいのに。
はぁ……………

011：湿原で澄んだ音を奏でた俺は（後書き）

ガチムチストーリー

《漲る大樹人》の防御力の高さは、完全物防特化になっているからです。魔法防御は、相当おろそかになっています。

その証拠に、わずかながら魔力（もしくは”気力”。もしくはM P）を伴う戦技^{アーツ}は目に見えてダメージを与えることが出来ました。

湿原で澄んだ音を奏でた俺は、どこかデジャブを感じえない芋虫にどつきまわされていた。

012：ジメった場所を抜けた先で俺は

ついさっきまで脇腹にぶっ刺さっていたところを癒すために、俺は「HPポーションLv1」を口に含まずそのまま傷にかける。

しかし一本では回復が始まらず、俺はもう一本取り出してもう一度かけた。やっと回復が始まる。

じゅくじゅくといやな肉の音が俺の脇腹から聞こえてくる。だがそれは数秒程で収まり、一度確認するともうすでに俺の脇腹に傷は無かった。

先にもやったとおり、ポーションには二通りに使い道がある。

一つはそのまま飲み、HPという数値的な体力と精神力にも近い体力を回復する方法。

一つは傷口に直接かけ、HPのほかには傷の処置を一度に行う方法。この方法だとHPの回復は五分の一度まで下がってしまうが、傷等の持続ダメージ（HPというよりも、痛みに耐える精神面へのダメージ）を回復するのに効果的らしい。

……全部リンさんの受け売りだ。あの人は何でも知ってる俺の知恵袋である。お婆ちゃんの知恵袋、みたいな感じ？

「——っ?!」

び、びっくりした……

なんか寒気がしたからリンさんに聞かれたのかと思った……

タイミングが良すぎるのも困りものだ。よし、”知恵袋”は言うても”お婆ちゃんの知恵袋”は絶対に言わないようにしよう。うん。

俺の感が告げている。言ったら絶対修羅が出る、と。

「うーん……さて、どうしよう……」

俺は呟きながら、首を捻る。

周りはジメジメとした湿原、真上は太陽がサンサンと照る雲ひとつない青空。そんな矛盾した風景の中で俺は、今からどうするかを考えていた。

「帰らないと、だよな」

暑苦しく高々と照る太陽を仰ぐ。

そんな太陽に反して周囲の空気はジメジメしたままだ。どうやら周囲の気候はフィールドの方が優先されるようだ。

「——つか、もう野宿は嫌だ。近代的あのほっかほかでもつふもふのベットが恋しい」

そうだ。もう野宿は嫌だ。絶対に俺は町に帰る！

そんな決意を俺を固めた。

「——いや？ 意外と野宿もいいのかもな。あの外独特の草木の香りとか、夜の香りとか……」

何か改めて決意を固めてみると、野宿もいいかなー、と揺れる俺がいる。どうした俺。なんか野生児臭くなってるぞ俺。

俺は町に辿り着くための決意が無くならない内に俺は足を動かした。始めた。

「うん。まだ、まだ走るなよ俺。町が見えてから走るんだ。そう、町が見えてから……」

どうもこんぐらの呪文めいた物を呟き続けないと一人では歩けないらしい。どうした俺。マジでどうした。

現実には居た頃はこんなに酷くなかった。きっと、周りに広がる大らかな景色がそうさせるんだ。こんなファアンタジイックな世界が俺を走りへと駆り立てるんだ。

これは現実に居た時も変わりなかったな、と歩きながら思う。

去年、頑張つて金貯めていった沖縄旅行でもこんなだった。夏姉と秋穂に白い目で見られたのは記憶に新しい……という訳でもないが覚えてる。うん。

そんな現実^{リアル}での思い出を頭に浮かべながら俺は、歩き始めた。

………ちなみに浮かんでいる主な思い出は「サーターアンダギーとかちんすこうとかむちゃくちや美味かったなあ、また食いてえなあ……」である。

もう少し……、景色とかの綺麗な思い出が浮かべられる俺でいてほしかった。

——まあ、そんなことを俺に期待しても無駄なことは俺自身がよく解っているのだが。

どれくらい歩いただろうか、時間にして四時間。途中に戦闘もあ

つたから、実質歩いたのは三時間くらいかもしれない。

俺はやっとお目当ての物を見つけ、感極まって思わず声を上げた。

「ま、町やあつ！」

この際エセ関西弁なところは気にしない。

いや、本当に長かった。ジメジメの湿原を抜け、そしてまた違った湿原を抜け、更に比較の木が多めの（前の二つに比べてほんの少しだけ、だが）湿原を抜け、ようやく町が見えた。眼前にはまだ少し湿原が広がっているが、なんかもう疲れた。

湿原湿原湿原湿原……、そしてジメジメジメジメジメジメ……。

なんか気が狂うかと思った。

走りたいのに走れないし、マジで狂うかと思った。この先俺がちゃんと生きてけるかどうかが自分でも心配でしようがない。

そんな中でもなにもいい事が無かった、と言う訳でもない。

これまで貯め込んだ戦闘の経験値（樹海出た後からね）の甲斐あってか、スキルが全部仲良く1Lvづつ上がった。

今のところ【Snow：スカウト：Lv50】の、スキルが【小剣：Lv1】【片手剣：Lv49】【短弓：Lv1】【索敵：Lv48】【隠密：Lv48】と言った感じだ。

うーん。もうちょっと頑張ってたなあ。やっぱLv上げてこそMMORPGだと思うし。しかし敵が俺と適正じゃないからどうにもならん。

いや、そんな事よりも重要な事がある。アレだ、アレ。もう俺の

身体が疼いて止まらない。……行くぞっ！

「——レッツダアアアッシュツツ!!」

ひゃっふ——っ！と奇声とか上げながらスキップする。偶に小躍りとかも加えて俺は走っていく。

湿った空気が全身を叩く。

ジメジメした空気はあんまり好きじゃないが、それが走る時に受ける風となれば話は別だ。

「おおお——っいえええ——いっつ——!!」

鼻唄が出る勢いで俺のテンションが上がっていく。……あ、いや、鼻唄とか通り越して叫んでるわ、俺。

そんなこんなで走る事数分。

町に着いた。——の、だが……

「ど、どこだ? っ」

見上げる町の入り口である門を見上げて、呟く。

「湿った町 ドンプティン……?」

所々に苔の生えた木製の門に刻まれた文字を読み取り、また俺は困惑顔になる。

「いや、本当にどこ……?」

俺はキョロキョロと周りを見回していると、町の中に居る人がこちらにあるいてくる。額に紋章が無いから、プレイヤーかな?

「お前、誰だ? 見たところNPCじゃないようだが……、だれが
h a h ^{ハーフ} に入れたんだ? カンヅキの奴か?」

どこかの山賊みたいな顔をしたチヨイワルオヤジみたいのが、魔法使いのローブを着込んで、俺の身長とさして変わらない長い杖をつきながら、俺に凄んでくる。……何だこのミスターミスマツチ。

いや、それよりも疑問に残る事があった。

「えっと、h a h って何です? それとカンヅキって?」

「……はあ? お前、何言ってるんだ? ここに居るってことは h a h に入って新しい町までの地図をもらったからだろ?」

「いやだから、新しい町とか、地図とか、それ以前に h a h って何なんですか?」

「……、まさかお前、クローズドβの経験者か?」

「へ? 違いますけど?」

「……お前、何もんだ?」

おおう? なんか疑われているらしい。何故だろうか? 生まれてこのかた犯罪なんかに手を染めた覚えもなく清く正しく生きてきたし、この世界でも特に突出した事はやっていないような気がするのだが……

……いや、そうでもないかもしれん。

兎に角、どう答えようか。

いきなり「何もんだ？」とか言われてもいまいち答えが見つからない。……なので、無難なの言っておこう。

「旅人です」

にっこり。出来るだけ爽やかな笑顔を意識して言う。

——どうだ、コレ。

ファンタジーで身元不詳と言えばこれだろ。……え？ 違っつて？ まあ、細かいこと気にすんな。その証拠に目の前の山賊顔のおっさんもポカーンと大きく間抜けに口をあけて——、驚いてらっしゃる？ え、これじゃ納得できない？

「旅……、人？」

「ええ、まあ」

「お前、ほんとにプレイヤーか？」

「ええ、まあ」

俺が単一の返事しか出来て無いのは、ズイツと顔を寄せ、さつきより凄みというか睨みが鋭くなったからだ。下手したら追いかけたモンスターの大量なんからよりずっと怖い。……このお方どのヤ○ザ？

「まあ、良い。何でも無い、気にするな」

「ええ、そうですね」

「……何がそうですね、なのかオレにはいまいち分かりかねるが、この街じゃ殺傷行為は控えろよ。オレが飛んでって肅清してやるからな」

「ええ、はい。そうします」

俺がそう頷くと、「引きとめてすまなかったな」と言ってからスタスタと速足で街中に消えていった。顔に似合わず意外と礼儀はあ
るらしい（失礼）。

「……にしても、肅清って……」

なんか番長みたいな存在なのかも知れない。……いや、ただ牛耳
ってるだけ？ そうじゃない事を祈る。

「とりあえず、入ってみるか ドンプティン！」

俺は偶然見つけてしまった新たな町に心躍らせてスキップぎみで
町の中へと入っていった。

……というか俺は方向音痴なのだろうか……？ こんな町に辿り
着いてしまって……、今後は激しく不安だ。

散々歩いたが、湿った町 ドンプティン の感想はこうだ。

「……男ばっかでむさ苦しいな……」

女性が圧倒的に少ない。

始まりの町 ユーレシア に比べて比較的小さい町の中を歩いているプレイヤーは全て男。その他に、売り子をしているNPCも八割は男。もうむさ苦しいったらありやしない。

「とりあえず、色々売って金手に入れて、宿を探さないとだな」

俺はさつき通った露店街への道をたどり、歩いて行く。

流石“湿った町”と付くだけあって町の空気全体は湿っぽい。

そして俺が今から行く露店街は、基本プレイヤー運営である。稀にプレイヤー不在の時の売り子としてNPCを雇っているところを見かけるが、それなりにお金がかかるらしくあまり見かけない。

そんなわけでした露店街。

町特有の元々の湿った空気とむさ苦しい男の空気が混ざり合って……なんつか、息苦しい。

とりあえず並ぶ露店の中でも出来るだけ爽やかなイケメンの露店を選ぶ。山賊みたいな顔の人や、でぶつと太ったサラリーマンの様なヤツよりは幾分マシだ。

「らっしやい！ どのアイテムをお求めで？」

ライトブラウンの癖っ毛に、スツと細められた糸目。口は三日月の様に吊り上がっている。にぱーっと愛嬌をふりまきながら笑う様は、どこか胡散臭い気がする。

威勢の良い掛け声のイントネーションは、どこか関西系のなまりに感じる。本物かどうか分からないが。

「あー、いや、買っんじゃなくて売りたいんですけど」
「おーけい、おーけい。じゃ、あい」

そう言うのと、目の前に前にも見たトレードウィンドウが現れる。
俺はそれに今から売る物を入れようと「アイテム」のウィンドウを開き、物色していく。これまでの旅路(?)で手に入れたアイテムを放り込んでいく。

ポンポンと軽快にウィンドウにアイテムを詰めていくと、俺の手が不意にピタツと止まる。

「? どしたん?」

「……いや、何でも無いです。ちょっと待っててください」
「あいよー」

俺が指差す先にあるアイテムは――、

《漲る^{みなぎ}ゴボウウ》

【森の中を練り歩く巨大な大樹の根の先。長寿の大樹では無いと根が“ゴボウウ”になる事は無く、非常に珍しい。ちまたでは珍味とされ、貴族にも受けが良い。シャキシヤキとした食感が絶品である。生でもイける。むしろ生のがイける。】

《漲る^{みなぎ}根棒ウ》

【森の中を練り歩く巨大な大樹の根の先が長年の時を経て硬質化し、細い棒状に凝縮された“ゴボウウ”。ただの根っこ、ただの牛蒡、ただのゴボウウと侮るなかれ。鋼にも近い硬度に達した“根棒ウ”は武器として店で売ってる鉄の棍棒よりも余程役立つ。しかし、それを振るって戦う姿は非常にマヌケに見えてしまうのが難点。】

―― おおう。なんだこれ。

あんの《ガチムチストーリー漲る大樹人》め、こんなモノを落としてたのかよ。
非常に処分に困るモノを……

ゴボウウの方は食べるにしても、棍棒ウの方はどうするか……

俺はそんなことでため息を吐きながら、ジッとアイテムの欄を凝視し続けた。

012：ジメった場所を抜けた先で俺は（後書き）

出来てしまったので勢いで投稿しました。次は少し間があきそうです。

ジメった場所を抜けた先で俺は、まさかのゴボウと棍棒を入手していたことに気がつく。

013：糸目の少年と談笑を終えた俺は

数秒の沈黙の末出した答えは、この前の毒系アイテムと同じだった。つまり、売らないでおいて置く。

俺はこれまでの旅路（？）で手に入れたアイテムを全て入れる。

「にーちゃんの売りたいもんはこれで全部？」

「ええ」

「あいよー。…………——フムフム、これなら、6790EL位かなあ」

その呟きを肯定するように、トレードウィンドウの反対面——つまり相手の欄に「6790EL」と表示されているのを見た。俺はそれを確認すると、了承のボタンを指先で押し込む。

「まいどー」

「いや、こつちこそありがとう」

「いやいやー、ボクも丁度《イモムシの一角》が欲しかったところやから助かったんよ」

前回よりも相当多いELの量に満足しながら俺も頷く。……ちなみに、この少年が言ってる《イモムシの一角》というのは俺の脇腹をぶつさしたアイツの角だ。あの後も結構狩ったのに一個しか無かったから、意外とレアアイテムなのかもしれない。

それとこのテンションの高い少年の関西弁、絶対エセ関西弁だよ。うん。

「ところでにーちゃん、^{ハーフ}hah のどこ所属？ 《スカウト》やし、ダクロさんトコ？」

「……………。えっと、何の話で？」

突然の話題について行けず、俺は疑問符を浮かべながら聞き返すと、さも当然と言わんばかりに目の前の少年は言う。

「なにつて、《half・and・half》の所属の事やん。あ、ちなみにボクは《メイジ》のガンテツさんのところ所属やから」

「…………。あれー？ 何で俺《half・and・half》に入っている前提で話が進んでいる？ 俺はこのギルドにも入って無いんだけど…………？」

「えーっと、俺はギルドに入って無いんですけど…………」

「えっ？ マジかあ！？」

「マジです。マジマジ」

糸目がつつすら開く。そこからは、触れれば呪われる金の様な、妖しげな瞳が見え隠れする。…………目、あつたんだ。

「じゃ、どうしてこの街に居るんや？」

「…………。それ、町に入る時にも聞かれたんですけど、どうして聞くんですか？」

「そりゃ、ここに居るんわ全員…………、とまではいかんが九割九分hahのメンバーやで？」

「えっと…………それはなぜ？」

「そりゃモチロン、hahがここまでの地図を独占してるからや」

「独占…………？ そんなこと出来るんですか？」

「おーともよ。ボクらが攻略した《小鬼王の塔》ってあるやろ？」

「ええ、ダンジョンですよ」

「そーや。そこでその初回攻略限定アイテムがここまでの詳細な地図やねん。こういう地図アイテムっつーのは最初の所持者がNPCに現物売らん限りそこらに出回る事が無いんや」

「……そうか、それで」

「そう言う訳や。今はなんとか地図をコピー出来る方法を見つけたから、それをギルドメンバーに配って独占してるんや」

……このギルド、なんつーめんどい事してんだろ……

俺ならそんな事思いつかないですぐ公開しちゃうと思うのに。

「何でそんな事を……？」

「あー、ボクみたいな下っ端は余り詳しくは聞いてないんやけど、やっぱギルド全体の戦力底上げやないの？」

「戦力……底上げ？」

「そーや。一つの町、ある程度のフィールドを独占出来ればその分だけLv上げとかしやすくなるやろ？それが序盤やからもっと効果が現れるだろうしなあ」

「そんなもんなんですか？」

「そんなもんや」

「そんなもんなんですか」

そんなもんらしい。

しかし、戦力底上げか……。どれほどまでに最高Lvは上がったんだろ？この前聞いた時はLv23位だつて言ってたから、もしかしたらLv25とかLv26位かもしれん。

……ふむ。俺もがんばらないと。

「つーかコレ言っただけやっただけ？」

「……いや、知らないですけど」

「んじゃ、これはナシな、ナシ。絶対オフレコや」

こんな感じでいいのか……大丈夫か《half・and・half》。ポロっと漏らしてるぞ。

「それよりーちゃん。なんか買ってかない？」

につと唇を三日月の形に歪めながら目の前の少年が問いかけてくる。そう言えばこの少年何売ってるんだろう？

「ええ、そうですね。何売ってるんですか？」

「んん？ 知らないでこ来たん？」

「そうですよ。だって周りがゴツイ人ばっかなんですから」

「は、はあ？ —— ああ、まあ言われてみればそうかもしれないなあ。でも、あそこの……、コンナ、だっけか？ も線細くて爽やかやん？ なんでボクんとこ来たん？」

糸目の少年は、きよろきよろと周りを一度見渡した後、針金のように細い指をシュビツとを俺の右斜め後方の方に居る金髪碧眼、髪の毛サラサラのイケメンを指差す。

……ハッ、何を言うんだこの少年は。そんなの決まってるじゃないか。何故かって——

「いやですよ、あんなあからさまに顔弄って自分を金髪碧眼の少女漫画に出てきそうなキラッキラのサラッサラにして。それで「俺力ツコイイっ」「みたいな事を思ってるに違いないナルシスト野郎なんかぜってー声掛けたくないんですよ。顔さえ良ければどうでもなるかと思ってそんな能天気面も気に入りませんしね。それに、ナルシスト菌が移ります。絶対に移ります」

ざっとこんなもんです。

だつて見てみるよ。あんな、『ふさあつ』とか効果音付きそうな感じで髪を掻き上げたり、『キーンッ』とか効果音が付きそうな目配せされたり、『H A H A H A』とかフキダシ付きそうな声で笑われたらいやだろ？ いやだろ！？

「……あ、うーん、まあ、そ、そやね……」

目の前の糸目の少年の口が引き攣つてる。……あれ？ 引かれた……？

もしかして見知らぬ他人をここまで非難するのはさすがにやり過ぎだったか……。まあ、後悔もしてなければ反省もしていないが。

「それで、何を売ってるんです？」

「あ、ああ、ウチは他とは違つてもろいもん売ってるんよ」

そう言つと糸目の少年はおもむろに俺の前に向けてウィンドウを開く。そこにあるのは――、

【煙玉Lv1】、【インスタント落とし穴Lv1】、【インスタント姿くらましマントLv1】、【毒針Lv1】、【毒矢Lv1】、
等々……

………なんか、ズルいつ！ 毒を使いまくってる俺が言うのも何だが、ズルイっ！ このラインナップは小者っぱさを連想させるっ！

「お、俺はよしときます」

「うーん、そうかあ？ 残念やなあ」

口ぶりと同じようにまことに残念そうに口元を曲げる。

まあ毒は余るほど(?) 持ってるし、【煙玉】とか【インスタント落とし穴】とかいらないし。なんかせこくて俺の思考に反しそう……いや、でも毒でじわじわ殺すのは楽しいかも……、フフフフフ……。

——ハッ！ 何か危険な思考になってる！

「それじゃあ、俺はこれで」

「はい、まいどー♪ また来てやー♪」

なんか危ない思考になりかけていた頭の中を振り払うようにぶんぶん頭を振り、立ち去る。

立ち去り際はほっそい糸目を更に細めてニッコニコの笑顔で手を振っていた。俺もそれに答えるように小さく手を振り、背を向け歩き出した。

——後方から感じる不吉な気配と不気味な嗤いに気付かず……

NPC商店街でポーション類を補充し、あるものを買った俺は(少し値段が上がったが、一ランクアップした【HPポーションLv2】と【MPポーションLv2】を買ってみた)宿が多く並ぶ宿泊街に来ていた。

今度は金欠で街中野宿（……野宿？　と言っているのか？）になる事のないように、有り金は残してある。

ブラブラと歩きながら今夜泊まるべく宿を探す。あるのは民宿みたいの所や、何かボロアパートみたいところばかりだ。それはそれで安いんだろうが、やはり久しぶりのベットだろうから良い物の方が良い。

「——うーん……、なかなか良いトコみつかんねえなあ……」

きよろきよろと周りを見回しながら歩く。——と、そこである物を見つけた。

「お？　アレ、よくね？」

俺の視線の先に移るのは、三階建ての白いアパートみたいな所。それまでの木造の民宿みたいところや、ボロツボロのアパートみたいなのとは別物のように小奇麗なところ。……イイ。

外観だけで決めた俺は、スタスタと速足と走りの中間みたいな速さで突き進む。

目の前にある白く塗装されたそれは清潔感を窺わせる。

俺はなかに入っていくと、受け付けで目を閉じてこっくりこっくり首を揺らしている結い上げた黒髪のお姉様（間違っても”お姉ちゃん”とかではない。少しだけ漏れ出るあの雰囲気は絶対”お姉様”だ）に声をかける。

「すみません。部屋借りたいんですけど」

「……………くう……………」

起きない。これは宿屋の受付として、お姉様としていいんだろうか？

「すいませーん。部屋借りたいんですけどー」

「……………くう……………」

なんか「くう」の間隔が長くなった気がする。なんか眠りがより深くなった？

「すいませーん。部屋借りたいんですけどー」

「……………くう？……………」

お？ おお？ 起きるか？ 起きるのか！？

「……………くう……………」

寝るのかよおっ！ 何だ！ さっきの俺の淡い期待を返せ！ 返せええええつつっ！！

「……………ふもっ！？」

俺の心の叫びが聞こえたのか、不意にパチリ、と黒髪のお姉様が目を開ける。

しかし完全には開いておらず、半眼である。まだ寝ぼけてんのか。だが起きたという事実だけで俺はもう十分であり、やっと会話を始められると内心喜んでいた。

「す———」

「……………ふもおお……………」
「……………」

何だこのお姉様！ 一文字しか喋らせてくれない！ 寝てばっかじゃねえか！ しかも何だよ！ 今更だけど寝顔とか寝息とかむっちゃ可愛いよ！ 一回開けたトロンとした瞳が……っ！ アレは反則だろう！ お姉様とかに似合わない仕草に思わずキュンとしちゃったよ！ ああもう！ なんかもう、わっかんねえっ！！

なんか不意に顔が赤くなって俺は座り込む。ガシガシと頭を掻きながら顔を隠すように膝の間に埋めた。

「……………すう……………」

座り込んだ状況なのでカウンターに阻まれて黒髪のお姉様の顔は見れないけど、たぶん庇護欲かき立てられるような可愛い顔してると思う。見えないけど。

「……………ん？ あれ？ 私、眠ってた……………」

どうやらやっと起きたらしい。カウンターに阻まれて見えないけど、たぶん寝起きだからとろんとした可愛い顔してると思う。見えないけど。

「あ、お、お客は来てないみたいね。……………こんな姿、見られたら一生の恥だわ。本当によかった……………」

……………うおーい。

なんか出ていけないよおーう。

ほうっと息を吐く音が聞こえる。益々出て行きづらくなった。

.....
に於て、
マシムルニシテ、
.....

013：糸目の少年と談笑を終えた俺は（後書き）

勢い余って登校。……じゃない投稿。

糸目の少年と談笑を終えた俺は、宿屋の受付のヒトの可愛いとこ
ろを図らずも発見してしまう。

014：町の宿で夜を明かした俺は

カウンターで潜む事三十分。

スキルの【隠密：Lv48】が効いているのかいないのか知らないが、いまだ見つかっていない。お客が来てないのも見つからない理由の一つだ。

しかし、本当にどうしたものか。

このまま隠れている訳にもいかないというか、時間が立てば必ず見つかるだろうから、速くこの状況の打開策を打ちたてなくてはならない。

「それにしても、お客さんが来ないわね……。ちょっと値上げしたのがまずかったのかしら」

お姉様(?)のひとりごとを聞き流す。

もしかしたらここは結構お高い宿なのかもしれない。俺が入れもしないようなセレブが使いそうな感じ？ 外観がアパートの様だといっても、部屋自体は最高級だったりするのかもしれない。

今の時間は多分夜の八時とか九時くらいだと思う。たぶん、であるが。

窓の外は黒く染まっているのがここからでもわかる。

兎に角、これからどうするかだが……

……基本現状保持で行く！

ヘタレとか言わないで。

この行動にヘタレ要素があるかわかんないけど言わないで。
そうと決めた俺はカウンターを一つへだてたところで蹲^{カマ}ってる。
それはもう宿^{カキ}にこもるヤドカリの様に……。

——俺に宿は無いけどね！

つんつん

頬が、何か細い棒の様な物でつつかれている。

俺は樹海でゲットした（むしろしてしまった）即起きスキルを使
用して、目を開く。

窓から溢れた鋭い朝日が俺の眼を襲う。即起きスキルが備わって
いるとはいえ、起きてすぐの瞳に朝日直撃はキツイ。なかなかクル
ものがあ——、朝日……？

無遠慮に瞳を刺激する朝日にようやく慣れた俺は二、三度瞬きを
繰り返してみる。

目の前には箒を逆さに持って柄の方をこちらに向けたまま固まる
黒髪を結い上げたお姉様がしゃがみ込んでいて——

「うおぁっ!?!」

「ひいつ!？」

突然声を上げた俺に驚いたのか小さく悲鳴を上げる。悲鳴を上げたいのは俺もだ。

「——えっと、あなた、誰? どこから、いつ入って来たの？」

……えっと、俺は誰だ? ——スノウ、旅人(?)だ。

……俺は、どこから、いつ入って来たんだ? ——入口から、夜に入って来たんだ。

質問の答えは俺の中でそろった。あとは答えるだけだ。よし、行け。

「俺はスノウ。旅人で、その入り口から、夜に入って来た」

俺は右手で光の漏れる入口を指差しながらそう答える。——そう言えば何で今、夜じゃないの?

「……夜？」

「そう、夜。——夜……？」

何故かどちらも疑問形だった。

無理もない。今は朝で、夜という事は昨日だ。……あれ? 俺、宿屋にまで来てカウンターで夜明かした? しかも起こされなかった? 見つからなかった? ……何という俺の隠密スキル!

「あの、どうしてここに？」

もっともな疑問だった。

俺も一瞬忘れかけた。

「あ、ええつとですね、昨日泊まるうと思ってなかに入ったら受付の人が寝てまして、その姿が凄い可愛いとか言って悶えてるうちに受付の人が起きちゃって、なんか出るタイミング失っちゃいまして、そのまま……」

なんか頭の中を色々なモノがグルグルと回って上手く口にできなかった。たぶん上手く出来てない。

「では、うちのお客様だと……？」

「ええ、まあ、予定では……？」

またどつちも疑問形になってしまった。どうする……。どうすれば……。つ。

そんな風に会話の糸口を見つけようと必死になっていると、向こうから話しかけてくれた。

「ちょ、ちょっと待ってください、さっき『受付の人が寝ていて、その姿が凄い可愛いとか言って悶えた』って言いました？」

「ええ、ハイ」

話を振った、というのとはいささか違うかもしれないが、とりあえず半自動で俺の口が動いた。なんか凄い事を肯定した気がするけど、もう取り消せない。

「えつと本当に？」

「もちろん」

「その、受付の人って、コレ……？」

お姉様が自分の顔を指さす。

俺は特に否定する事もなく、コクンと頷いた。というか否定する意味がわからない。実際可愛かったし、悶えたのも事実だ。

……しかし俺は一つ忘れてた。目の前のお姉様は俺が眠りに落ちてしまう前、言っていたではないか。

——こんな姿、見られたら一生の恥だわ。本当によかった……。……

(……………オーマイガッ！俺とした事が！！)

心の中で小さく叫んだ。

俺の失敗を見せつけるかのように、目の前のお姉様の顔が真っ赤に染まる。それが寝顔を見られた羞恥故である事はすぐわかった。わかってしまった。……だって言ってたの聞いてたし。

「……………あう」

真っ赤になった顔を隠すかのように両手で顔全体を覆う。

それに伴って左手に握られていた簞がカランコロン、と音をたてて床に転がった。

ほら！ こういうのがズルイんだよ！　だって可愛いじゃないか！！

そんなわけで俺は鏡を合わせたようにして自分の顔を覆った。そしてそのまま、お互いにチラチラと指の間から視線を通わせながらまた指を閉める。あー、もう！　俺はどうしたんだ！？

俺はもう俺がわからなかった。

長めの前髪に隠れるようにしてひっそりと在る紋章を見つけ、ついでにこの人NPCじゃねえか、と今さら気が付いた。

こんなNPC反則だろ……、と俺は蚊の鳴くような声で呟いた。

まだ顔は熱かった。

これまでの事は、とりあえずカウンターへと戻ったリユーネさん（さっき頑張って名前を聞いた）への説明し終わった。

ついさっきまで俺も少し顔が赤かったが、いい加減戻るために最近お留守だったスルースキルさんに来てもらって、スルーしてみた。一発で治った。

……ようは気にしなければいいんだ。そう言うことが。すまなかったルーさん（スルースキルさんの略。特に深い意味があるわけでは無いが）、最近ないがしろにして。これからも俺を助けておくれ。

「——ま、そう言う訳で俺は泊まるうと思ったわけです。……結局泊まれませんでしたが」

「そ、そう……です、か」

所々途切れた言葉で、リユーネさんがそう返事を返す。

彼女はまだ顔が赤いままだ。俺の中のルーさんよ、戻してやってくれよ。………なに？ 範囲外？ ……そりゃしゃーない。

とにもかくにも、説明を終えた俺はここをとっと立とうと思う。だってルーさんいる俺でもこの状況が続くとつらそうだからだ。

「えっと、じゃあ、俺はこれで」

「……はい。夜は……、どうしますか？」

「あー、ええっと、ここまでたどり着いたら泊まります」

「そう……、ですか。よかつたら、是非泊まってください」

彼女はいまだ真っ赤のままそう答える。

俺はそれに会釈で返し、そのままクルツと背を向け扉へと歩き始めた。背後から視線を感じない事もないが、それを気にする事を俺はしない。

なぜなら俺の中でルーさんがちゃんと仕事してくれてるからだ。

俺はそのまま日が昇った街中へと躍り出た。

——そう言えば『ルーさん』って呼称は、どこその『ルー何柴さん』を脳裏に浮かばせそうだね。……今度からヤメヨ。

商店街でここの地図をあらかた買ってから、町の外を出た。
この前入って来た入口——北門の反対側の、南門から今回は出てみた。やっぱり湿った町の近辺であるから、湿原くさい。草とか木は少ないけども。

フィールドを歩くと三十分。まだ敵に端遭遇していない。——
——が。

なんか……、俺………

(——す、ストーカーされてるっ!!)

最近の俺は、どうなってるんだろうか。

モンスターの大群に追いかけられ、でっかい樹に追いかけられ、

拳句の果てにプレイヤーからも追いかけられるってどういうことだ
ストーカーされ

!!

マジでどうなってるんだ！ 教えてくれスーさん！（スルースキ
ルさんの略。ルーさんは芸能人のほうがあんま好きじゃないからや
めた。他意は無い）……なに？ こっちこそ教える？ ムチャだ！

とっにつかつくっ！

俺の【索敵】スキルの常に24メートルに四人の人影。付かず離
れずの塊が一定の距離を保ったまま行動している。

気が付いたのは町を出てフィールドに入ってからすぐだった。
出てすぐに【索敵】のスキルを使用した時に、遠くの方で四人パ

ーティがかかったので、俺とおんなじくらいの時間で出たのかな？
と特に気にしたことも無かったんだが、何時までたっても付いてくる。本当に。

絶妙のタイミングを使い、俺がさりげなく振りかえっても人影一つ見えない。……が、【索敵】スキルにはしっかり表示されてる。
一瞬、幽霊かなんかと思った。一瞬だけど。

特に俺に攻撃意識は持つてはいないようで、俺から見える光点は黄色表示だ。

これが攻撃意識——というか攻撃を行うと、もしくは戦技や魔法等の呪文詠唱などを行うと、赤色表示に変化するそう。要はモンスターのアクティブ、ノンアクティブと同じらしい。

おー、こわこわ。

……と、そこで何か四人のうちの一人が別行動をとり始めた。

小さなマップ上ではあるが、どこかのゴキブリ——、Gをふつとさせるような異常に速いコソコソとした走りで、俺の右側を半円上に迂回していく。やっぱり俺との距離は距離は24メートル。……なんだ、そんなに好きなのか24メートル。

そのまま俺の前方まで来ると、いつきに直線ダッシュをした。……なんだ、24メートルは捨てたのか。残念だ……

いくら遠いとはいえ自分の前方に居るはずだから、見えると思うのだが、それらしい人影は見えない。

偶にもやつ、と霧が霞むような黒いモノが見える。……もしや、あれが……？　だとしたらホントに幽霊さん……？

ここはデータの世界なのだから本当にそんな輩がいるとは思って

はいないが、なんかよくわからないモノは怖い。正体がわからないモノは、やはり少し恐怖が湧く。

……まあ、今回ののはそんなに怖いわけじゃないけど。

そんな風に考えながらスツタスタと歩いて行く。

そう言えば今日、俺走って無い……。たぶん、あれだな。ストーリーキングされてるから。なんかいつも以上に気が張ってるのかも。

そこで俺はちょっと気が付いた。

「そつだよ。その事スルーしちゃえば問題無いんじゃない——おごぼああ!？」

突然、何の前触れもなく、地面が、崩れた。

俺は想定外すぎる展開に全くついて行けず、変な悲鳴を上げた。

小さな堀の様になった地面に足を取られ、俺は呆気なく転ぶ。そりゃあもうマヌケなくらいに。

「——いっつっ……」

俺は小さく呻く。

尻もちついたので、とっても痛い。鈍い痛みが余計にツライ。

そこで、視界の端に映る小さなマップの中の、いつの間にか四つに戻っていた黄色い光点の内の三つが——、

——赤く、染まった。

「——ッ!」

014：町の宿で夜を明かした俺は（後書き）

町の宿（注：カウンターです）で夜を明かした俺は、今度はモンスターじゃなくてヒトにストーキングされた。

015:狙う——と狙われる俺 【改】(前書き)

すいません。改訂版です。

良くなったかはどうかとして、寛大な目で見てくだされば幸いです。

015：狙う——と、狙われる俺【改】

「よっしゃ、行くで」

ボクは小さく声掛けた。

混職課のカンズキ隊の中の比較的殺しを得意とする三人が、また小さく応えた。

「まずはトウ。自分の【索敵】距離ギリギリにターゲットが入るようにして迂回や。そのまま【インスタント姿くらましマントLv1】を使ったままターゲットの50メートル先に【インスタント落とし穴Lv1】を設置して、こっちに帰ってくるんや。しつとると思うが『マント』は一分しかもたれへんから気をつけるんで。その他のカンゼとノリはこのままボクとターゲットの追跡を続けるで」
「『御意』」

一糸乱れぬ声とともに、各々の行動に移った。トウは『マント』を身につけ影のように一時的に消える。そのまま足音が遠ざかって行くのがわかった。

その他二人は、ボクと一緒に追跡を続ける。……まあ、さつきと何ら変わってへんのやけど。

ターゲットには、気づかれていないようや。つかムリやろ。

こっちにはトップレベルのスカウトが三人もいる。一人を除いて【索敵】のスキルは今のところ最高ランクのLv24や。感知できる方がオカシイ。

そのまま巧いぐわいに隠れながら追跡を続ける。

あのーちゃんは、ボクの店に来た時からもう狙うと決めていた。顔は見るからに軟弱そうな女顔やし、話しててもどこかアホさがないじみ出るヤロウやったしな。人は見かけによらん、っつー言葉があるが、それを全面的に肯定できるわけやなし。

それに、あのーちゃんは一度買い取りの時に何か渋った。ちゅーことは、何かレアアイテムがあるんや、と確信してる。っつーかあのーちゃんの顔みれば誰でも気づくわ。

極めつけは今にーちゃんが腰に差しているあの剣。

市場にはそれなりに詳しいボクやが、あんなもんは見ただ事無かった。

おそらく、あれもレアアイテムやろうと思うとる。……どれだけ運がいいんや、とツツコミたくなっちゃうんやが、これからアイテムくれる力モにそんなツツコミは不要やろうと思ってやめた。

「隊長、仕掛け終わりました。半円状に二十個仕掛けましたので、引き返してこない限りかかると思われます」

「ご苦労、ご苦労」

いつの間にか戻ってきていたトウに、労いの言葉を掛ける。

それに会釈で答えたトウは無言で隊列の中に入る。

そして息を殺して追跡を続ける。この距離では気付く事は無いと思うが、念には念を入れて、や。

そのまま歩くこと数十秒、遂に――

――おごぼああ!?――

遠くの方からなんか変な悲鳴が聞こえてきた。
ボクは命じる。

「いけっ！ 【毒矢】装備の《スナイプ・アロー》やっ！」

返事の代わりに、ギリツと弓をめいっぱい引く音と、ヒュンツと風を切る音とともに濡れたように紫に光る矢が放たれた。

本来は水色の燐光だけを纏うはずの下位の狙撃戦技であるが、【毒矢】の毒付加効果に影響を受け、少し紫に濁る。

僅かのラグのあとに、視界の先には命中を知らせるエフェクトフラッシュと、男の悲鳴が響いた。

「ダメージから復帰する前に拘束するんや！ 行くで！」
「御意っ」

そこからは特に身を隠す事もせずに、一直線のダッシュを実行する。

しかし部下である《スカウト》の三人の方が《メイジ》であるボクよりも肉体のスペックが高いので、若干引き離される形になった。

が、特に問題もなく目的地に辿り着く。

ボクは土に足を取られ、不様に尻もちをつき、剣を構えてはいるが左の二の腕、左の脇腹、右の太股に濡れたように光る矢を受けた満身創痍のにーちゃんに向かって、言う。

「やア、にーちゃん、昨日ぶりやね」コロしに来たよ?」

ボクの声聞いてか、三本の矢に貫かれた所為か、にーちゃんの顔が苦痛に歪んだ。

「なんだよ……、これ」

俺は身体を蝕む激痛、目の前の惨状を見て茫然と呟いた。

俺の体は膝近くまで土の中に埋まり、身体には三本の矢が突き刺さっている。何やら塗られているようで、その矢が妖しく紫に光る。

「なんだよって、殺しに来たって言っただやん」

目の前には、ついこの間言葉を交わし、アイテムの売買をした糸目の少年。

その後ろには、全身黒色のピッチリとした服装に包んだ忍者みたいのが三人控えている。弓と矢を持っているから、俺の事を撃つたヤツらなのかもしれない。

俺はこの状況を少しだけならスルー出来ているらしく、不思議と心の内は冷静だ。……いや、これはただの現実逃避かもしれない。

俺は出来るだけ冷静に、状況の確認を急ぐ。

俺に突き刺さっている矢は、全部で三本。場所は左の二の腕、左

の脇腹、右の太股、だ。

その攻撃により俺のHPは七割ほどまで減っている。オマケに、
【毒】なんていう状態異常が付与されてる。これは十秒に付きHP
が1%もっていかれるらしい。

兎に角、時間を稼がなくちゃいけない。まずそれからだ。

「何でお前らはこんな事を——」

「よし、まずその剣を奪つとくんや。その方が確実にドロップする
からな」

ガッテム！　なんてこった！

全くもって時間稼がせてくれなかった！

——そんな俺の心の叫びを知らずに、糸目の少年の言葉を聞いた
黒服の内の一人が手にした弓を虚空へと消し、代わりに十センチメ
ートル位あるの鈍色のナイフをなにもない空間から取り出す。
その切っ先を俺に向けながら、じりじりと距離を詰めてくる。

（やばいつ、なんとか抜け出して反撃を——）

両手を地面につき、押し上げる。

「うぐ——っ！」

貫かれている左腕が、力を入れたことで痛みを増す。やはり、余
りにもリアルな痛み。

それでも俺は低い唸り声をあげて、身体を引き抜く。

「ぐおおおおおっ」

「ほれっ、はよう拘束するんや！」

返事の代わりに黒服はこちらに近づくスピードを上げる。それに伴い、俺も入れる力を増す。

これは勝負。黒服が俺を拘束するのが先か、俺が黒服の拘束から逃げ切るのが先か。

そして勝負は――、

「ぐああああああつ！？」

結末としては、黒服のナイフが俺の左の掌に突き刺さり、俺は羽交い絞めにされていた。

幸運にも、唯一攻撃されていなかった右手から、翹剣が落ちる。それをすかさず、残った黒服が掴みあげた。

「――重っ。隊長、これ予想以上に重いです」

俺が何時も軽々と持ち上げてる剣に何を言うか、と声を上げる前に、その声でここにいる俺以外の奴等がそちらに注意を向けるのがわかった。

（好機――ッ！）

俺は渾身の力を持ってして頭を振りかぶり、後ろに振り抜く。頭突きだ。

「がッ」

ゴンッ、と鈍い音を立てて後ろの黒服がグラつく。

身体を大きく捻り、羽交い絞めしていた黒服の体から抜け出す。意外と細身だったので、抜け出すのにはあまり苦労しなかった。その代わりに、身体の下四ヶ所が痛む。

悲鳴を上げる体に鞭打って、俺は走りだす。行先は、己の愛剣へ。走ってる途中に、左のナイフを抜き、右手で投剣。当たる自信はこれっぽっちも無かったが、牽制の意だ。

俺の剣を持っていた黒服は俺の投げナイフに反応して、一時的に体をすくませた。

思い通りに事が進んで、心が少し踊る。

俺はすかさず両手で持っていた翹剣を奪い返す。

その勢いで、——半ば無意識で——^{アイツ}戦技・《トライ・スラッシュ》を発動。

俺の中の戦技のモーションが再生される。

そしてそれを己に投影。——自分の身体が、何かに突き動かされていく感覚。

身体が加速され、知覚が加速され、思考が加速される。

俺はそれに乗っかるように一閃、二閃、三閃。淡い水色の燐光を纏った翹剣が、正三角形の軌跡を描いた。

今の俺の最高の技が、黒服を切り裂く。

プレイヤーのHP状態をプレイヤーが確認する事は出来ない（何らかのアイテム、スキルがあれば可能らしい）ので、黒服のHPは完全に確認する事は出来ないが、結構削り取ったはずだ。

手に肉を裂く感覚が残るのは余り良いものだとはいえないが、それをかまっている余裕は俺になかった。そしてそのあとすぐ、黒服の身体に変化が訪れた。

バキンッ！

世界にヒビが入ったような壮絶な音が響き、黒服の身体が、崩れた。

——死んだ、のだろうか。たとえこれが仮想の殺しであるとしても、その、何とも言えない違和感が俺に溜る。

「……っ！？」

俺以外の糸目の少年と黒服の二人が驚愕に息を詰まらせる。
だが俺にとってはそれは只のチャンスにしかない。

俺はスカウトであろう黒服よりも身体能力の低そうな焦げ茶と灰のローブに身を包んだ糸目の少年を無視し、先に黒服を狙う。

——もはや俺の中から”痛み”が抜け落ちてしまったかのようだった。

——こいつ等を止めなければ……、こいつ等を抑えなくては……。

——どうすれば……どうすれば……どうすればいい……。

何かが、俺に囁いた気がした。

それはきつと幻聴の類だったんだろう。

しかし俺にはそれが幻には思えなかった。

——殺せばいい。そうすれば止まる。さっきだってそうじゃないか。

俺はいつか見た格闘技の真似ただけの足払いで、俺の左手にナイフを突き刺した丸腰の黒服へ近づく。

相当に出鱈目な足さばきだったが、意外なほど良く決まり、丸腰の黒服が大きく体勢を崩す。すかさず俺は剣を振るう。華麗さなどとはかけ離れた、死に物狂いの剣戟。

その剣戟を受け、丸腰の黒服が先ほど同じように世界が割れるような音が響き、崩れた。

俺は足を最後の黒服に向ける。

——と、そこで気がつく。黒服はこちらに向けて矢をつがえ、糸目の少年の持つスタッフが淡く黄色の光に包まれている。

避けなくては……、と思ったときにはもう遅く、発射された矢は薄い水色の燐光を纏い、緩やかに螺旋を描きながらこちらに飛来する。

スタッフの先の黄色の光は、頭上に集まるように凝縮し、そこから雷状の矢が形成される。そのまま、雷の軌道を描きながら此方に飛ぶ。

すぐさま、被弾。

速度的には矢の方が速いらしく、俺の左の太股に二本目の矢が突き刺さる。

黄色の瞬く矢が少し緩やかな速度でこちらを襲う。避けられるかと身体を捻ると、それに合わせて少し軌道を変える。——多少の追尾性能があるようだ。

結局避ける事が出来ずに、俺を電流が襲う。

「うぐ……っ」

ビリッと俺の体を走る紫電に一瞬身を振じらせてから、氣力を振

り絞って立ち直る。

「——なッ！ 何で【麻痺】にならんのや!？」

叫ぶ糸目の少年を流し、俺は地を発つ。

走った先にいるのは弓を構える最後の黒服。もう一度矢を構え、引き絞っているところを、発動速度が最も早い《スラッシュ》を、上から下に落とすように一閃。

少々の硬直時間のあと、もう一度。今度は《クロス》を発動。これは下から一閃したのちに、横から一閃。十字状になった剣閃が最後の黒服の身体を崩した。

残りは糸目の少年だけとなった。

しかし俺のHPは立て続けに攻撃を受けた事によりもう三割ほどまでに減少していた。

糸目の少年は再度何やら呪文の様な物を呟く。
今度はスタッフの周りを赤い光が包む。

「——やら……、せるかつ」

俺は飛び出した。

まるで砲弾のように、突撃を繰り出す。

渾身のタックルが決まる。糸目の少年はその衝撃により杖を取り落とし、その隙に馬乗りになる。脅しの意味を込めて首筋に刀身を触れさせる。

「……はあっ、はあっ……ぜえっ……はっ……」

思いだしたように疲労が俺の押し掛かる。
俺は疲労で重くなった口を開く。

「なんで、こんなこと、してるんだ」

その答えは、異様に呆気ないものだった。

「——そんなの、儲かるからにまってるやん」

首筋に刀身を突き付けられてる者とは思えないほどの、気負いの
ない口調と言葉。

そんな理由で人を殺すのか——、と俺の内情が憤りに染まった。

「そんな事、していいと思ってるのかッ!？」

そして俺へと変えされたのは、またも気負いなく、にこやかな顔
で答える。

「いいんよ、なんせゲームなんやし」

俺の中の何かが、冷めた。

「とにかく儲かんねん。経験値もたらふく入るし、アイテムだつて
色々手に入る。これでボクは《h a h》の中で成りあがって来たん
や」

「……《h a h》？」

俺が突然出てきたその単語に疑問の意を示すと、糸目の少年は声
高らかに、自慢げに話し始める。

「そうや！ この世界で初めて『王の塔』を攻略したギルド、《half・and・half》や！ このギルドは、必ずトップギルドになる……っ！ その中でボクは”隊長”の地位を獲得し、成りあがった！ そしてこれから僕も僕は自分を強化し続ける……。そして最後はボクがこのギルドを奪う！」

あっははははははっ！ と狂ったように笑う。

俺としては、この自分のことしか考えていない利己的主義者を理解することが難しかった。

「……おっと、これは言わないんやっとな」

つい口が滑った、といった体の口調。

しかしまたテンションを上げたように、名案を思いついたように、声を上げた。

「おっ！ そや！ にーちゃん、俺と組まへん？ 今の内にボクと組んどけば、サブマスターの地位に着けるかもしれんよ？」

「——ッ！ お前、ふざけてんのか！？ 今の今まで俺の事殺そうとしてた奴と組むわけないだろっがッ！！」

「残念やなあ」

落胆しきつた声。

俺はその声に怒りを通り越して嫌悪に変わった。

たとえ殺そうとした相手にでもコロコロと手のひらを返し、取り入れようとする。使えるモノなら使い、使えなさそう捨てる。あの黒服もそういう物に違いない。

「なあ、にーちゃん。散々ボクの事嫌悪しとるようやけど、にーちゃんも同じなんやで？」

「……？」
「にーちゃんも、三人殺しとるやないか」
「——ッ！」

言い返せなかった。

言い返そうにも、反論のしようが無かった。俺は現に三人を殺し、今も殺そうと刀身突き付けている。これでどう反論しろというのだ。

「——それなら、もういい」
「……なんや？ 組んでくれるんか？」

俺は馬乗りの状況から解放した。

その状況に訝しげにしながらも解放された事に安堵と喜びを覚えているようだ。俺にとってはどうでもいいが。

「俺は、もうきつとお前らと一緒になんだ」
「おお？ やっぱり僕と組んでくれる気に——」

そこから先の言葉は聞こえなかった。
代わりに、ヒュンヒュンと風を切る音が空気を切り裂く。——それと同じく目の前の糸目の少年の肉を切り裂いた。

「……な、んだ……。け……。つきよく、コレか。……は、はは……
成程、ね。確かに……。ボクと、同じだ」

途切れ途切れにそこまで言い、バキンと壮絶な音を立て、糸目の少年が崩れた。

名前を聞くことも無かった少年との戦い^{殺し合い}は、こうやって終わることとなった。

HPを全て回復し、傷を全て癒したところには、手持ちのポーションはすべて無くなっていた。

湿原に腰を下ろした俺は空を仰ぎ、呟く。

「俺は……人殺しになっちまったな」

たとえゲーム。されどゲーム。

仮想の殺しであろうと、それは殺し。

軽いようで、重いような罪。

この世界では裁かれる事など無いだろう。

なら俺はどうするべきか。

これはゲームだと割り切り、無視し続けるのか。
それとも、自分がその道に染まるのか。

俺の答えは――、

――その道に染まり、その道を殺す。

015：狙う——と、狙われる俺 【改】（後書き）

これが、自分の書きなおした結果です。

元を読んでない人はこれで何が変わったのかわからない方も多いと思いますが、自分的にはこれでよかったのだと思います。

本当にすいませんでした。

狙うボクは——、野望を語る。

狙われた俺は——、決意を語る。

016: やつと宿らしい宿をとった俺は(前書き)

総合評価10000点超えました。

皆さんのおかげです。ありがとうございます。

016：やつと宿らしい宿をとった俺は

数十分後、俺は ドンプティン に戻っていた。

初めてこの街に入った時に見た蒼生した北門とよく似た南門をくぐる。

湿った空気とむさ苦しい空気が俺は襲う。しかし特に何も感じなかった。今だけは不快感も何もないようだ。

俺は休める場所を求め歩き始めた。
不思議と、走りたいとは思わない。

またも、気が付くと宿屋の前に来ていた。リユーネさんの宿屋だ。
正式名称は知らん。

俺は扉を叩いた。「すみません」と声を掛けて入っていく。

中ではリユーネさんがカウンターで書類の処理をしている。売上とかの計算だろうか……？ そんなことするのは疑問だが、なんか事務処理してる。

俺が入っていくのに気が付いたらしい彼女が書類から顔を上げる。

「すみません。泊まりたいんですけど」

「あ、す、スノウさん。来てくれたんですか。まだ昼前ですけど、いいんですか？」

「ええ、ちよつと色々ありまして」

「……？ そうですか。では、一泊ですね、1000ELになります」

「はい」

声と同時に俺の目の前に現れたウィンドウに、1000ELを入れる。

始まりの町の最安値の宿が『50EL』だった事を考えると、結構割高だと考えられる。

しかし四人殺したからか、俺の金が三倍近くになってた。思わぬ収入だ。アイテムも心なしが増えている気がする。今度確認しなくては。

「はい。じゃあ、二階に上がってからすぐの一番の部屋です」

部屋の指定をもらった俺は会釈し、階段を上がっていった。

上りきったあとすぐ横にある『1』と書かれた白い扉を開き、部屋に入る。中は白で統一されたテーブル、イス、クローゼット、ベットの丁度俺の部屋くらいの広さだった。広さが似てると居心地がいい。……気がする。

とりあえずシワ一つない真っ白なベットにどぶつ、と仰向けで寝転がる。予想以上にモッフモッフだった。

天井に付いた穏やかなオレンジの光を放つ照明を見ながら力無く呟く。

「俺はもう、人殺しか……」

ちよつとショックな事実だった。

しかし、すんなり自分の中に入っていく事実に対し驚く。

『殺し』の道を殺すなら、自分も『殺し』に染まらなくてはいけないのではないのだろうか。いや、そうで無いといけない。

「……じゃあ、どうすればいいんだろ……」

まず浮かんだのが、己の強化だった。

相手を殺すのにも自分の力量が必要になる。

圧倒し、虐殺するにも、影から暗殺するにも、力が無くては成し得ない。

——そうだ。

ここで俺は一つ思い出す。

この世界では殺されることにLvが下がっていく。

そのシステムを使えば、『殺し』の道を歩いて行く者を無くす事が出来る。殺しが出来ないほどに自分の力が落ちれば、モンスターを狩るなどの事しか出来なくなる。

これで俺の目標が定まった。

まずは自分を強化しなくてはいけないのだ。

全ては力の上に成り立つ。……俺的にはあまり認めたくない事実であるが、それは事実だ。故に、俺は力を願うんだ。

そのあとは汚物を洗い出す。

自己強化の途中にも、出来る事はするつもりだが、そういった情報を手に入れたら積極的に殺しに行く。

汚れは、拭き取る。

一日の蘇生時間があるから完璧に拭き取る事など絶対出来ないだろう。

しかし、汚れを弱める事は出来る。徐々に徐々に払拭し、最後は消す。

それが俺。

ここでの俺のあり方だ。

しばらくたって小腹がすいてきた俺は、食事の準備を始めた。

——と言っても、いつもの虫肉だが。

……いや、今回はそれだけじゃない。

俺は【アイテム】の中のあるアイテムを取り出す。ゴトン、と音を立てて大きな木樽が床に置かれる。その名も【木樽（大）】。今のところお店で売ってる一番大きな樽だ。

今度は《ブルーゼリー》をその中に流し込む。ドブドブと音を立てながら青い液体が樽の中を満たしていく。結構な量が入っていた。ちょうど五個分。

今度は【アイテム】の中の【ジョッキ（中）】をとりだす。

ガツとそれをテーブルの上に置く。……準備は整った。

また指を動かして、そのあとすぐにベチャベチャと血の滴る肉がジヨッキの横に三つ落ちた。

「わーい。今日はご馳走だー」

ちよつと言ってみた。

「……」

こんな何の加工もしないモノばかり食べる俺はホント不憫だと思う。……今度機会があったらサブ職業で【料理人^{コック}】とかとってみようかな。

いや、まあ、美味いからあんま不満は無いけどね。

俺はジヨッキの持ち手を掴んで、すくうように樽の中に通す。ジヨッキの中身が青い液体で満タンになる。

「いただきますーす」

虫肉を右手で掴み、もっちゃもっちゃと咀嚼していく。なんか久しぶりに食った気がするけど、毎日朝昼晩と食ってるからそう言う訳でもない。

まだ赤黒い血で汚れていない左手でジヨッキを掴む。そのまま口元に持っていき、思いきり煽る。気分はジヨッキの生ビールだ。味は甘ったるいけど。

俺は一心不乱に食べ続ける。

ちよつと手に俺を殺そうとしてきた奴らの肉を断ち切った感触が

よみがえる。人の肉を食ってるみたいな気分になるのかと思ったが、そんな事は無く、虫肉を美味しく喰いちぎっていく。

「……うんめえ」

改めて口を零す。

やっぱりうまいモノは何時食っても美味しいのだと、確認できる出来事だった。

そのまま俺は三つの肉を平らげ、足りなかったので四つ目を喰らい終わったころには、樽の中のサイダーも無くなっていた。

「ごちそうさまでした」

血に濡れた手でパンツと合わせて、そう言う。

その時に跳んだ血の雫を思わず目で追う。その先には真っ白なベツトが――、

「――あ……」

改めて部屋の中を見渡す。

それほど激しく飛び散ってるわけじゃない。

しかし、おもに俺の周り、テーブルやイス輝くような純白から、赤黒い斑点をつくる猟奇的な水玉模様になっていた。

――リユーネさん。なんかすいません……

飯を食べ終えた俺は何もすることが無くなったからきよろきよろと部屋の中を見回した。

——特に何も無い……、と思っていたら、入口のすぐ横にドアがある事に気が付いた。入って来た時は全く気が付かなかったのだが……

何か、と疑問に思いドアまで歩いて行く。そしてそのまま開けると——

——そこにあるのは部屋と同じく白で統一されたシャワーだった。意外と立派な浴槽も付いてた。何故そんなモノが……。そこまで考えて気が付いた。

「——と言つか俺風呂入った事無い……」

もちろん、この世界で、^{ゲーム}ではあるが。

——と言つか、入らなくても何ら問題ないと聞いていたので頭に全く残っていなかった。

ちなみに何故入らなくていいのかと言うと、全ての汚れ等は数時間たてば自然に浄化されるそうなのだ。虫肉の血が服についても勝手に消えるのもコレらしい。

随分と便利なものだ。

ついでに言えば、この世界では排泄も必要ない。

身体の中にはいろいろと入って言っている筈なのに、なにも出て行かないのは少し変な感じがする。まあ、特に不快感を感じる訳ではないので構わないが。

「折角だし、入ってみるか」

目の前にいい感じの風呂（ちゃんと湯も張ってある）があるので、入らないわけにはいかない。……と思う。日本人として。

服を順に脱いでいく、と言う事はせず、装備の項目から《スカウトセット》を全て外す。最後に残るのは、紺のトランクス。

それだけは手元の操作だけでは外す事が出来ないで、自分で脱ぐ。脱ぎ終わると、勝手に虚空へと消えた。たぶん、アイテムの項目の中に収まっているのだと思う。……そう思いたい。

俺はおもむろに自分の体を見下ろす。

「……」

……ちよつと言葉を失って、びっくりするくらいの再現度だった。

主にスキャンしていないはずの股間が。

まあ、その他の身体の再現度も半端ではない。父親譲りの細身の身体であるが、これまでの戦闘とLvアップの恩恵か、それなりに筋肉が付いている。

現実でもそれなりに運動していたから、今までのモノに毛が生えた程度ではあるが。

俺はシャワーの蛇口を捻る。

先の方から、行きよい良く水が飛びだす。俺はそれを顔面で受け、頭を洗いはじめた。

特に不潔にしている訳ではないから、身体を伝う水が茶色く濁る、なんて事は無い。

——しかし、ここにきてからの初めて身体を洗ったからであるためか、いろいろな外のヨゴレが水と一緒に流れて行くような錯覚に陥った。……ついでに、中のヨゴレも流れ落ちるようだった。

シャンプーやリンスと言った類の物は無いようで、一通り体を流し終わると俺は浴槽につかる事にした。

一度手を入れ、温度を確認する。感覚では大体四十度くらいだ、俺的には適温。

確認が終わった俺はゆっくりと右足を湯の張った浴槽の中に入れ——って、こんな野郎の入浴を細かく描写してもつまらないので、サクッと浴槽に浸かる。

「ふいっ……」

自然と声が漏れる。

溜まりに溜まった疲れが揉みほぐされていくような、気持ちのよい感覚が俺を包む。

ゲームの中だとは思えないほどリアルな湯の感覚に、若干驚く。先ほど浴びたシャワーも、特に意識したわけでは無かったが異様なほどリアルだった。

打ち付ける水の感触も全てデータで処理しているのだと思うと、驚かされる。何時の間にここまで世界の技術は進歩してたんだか。

なかなか……、いやそうとう気持ちがいい。

これまでは入れてなかったけど、今後は入れる時は出来るだけ入るようにしよう。

身体も心もさっぱりと一新出来るようだった。

俺はおもむろに計四人を殺した右手を掲げる。

そのまま三時間くらい湯船に浸かっていた。

——のぼせた。

016・やっと宿らしい宿をとった俺は（後書き）

やっと宿らしい宿をとった俺は、体の再現度に心底驚いた。

017：初めて料理と呼ぶ物を食べた俺は

風呂から出た俺は、赤黒い水玉から純白に戻った（これは人が掃除したのではなく、自然に浄化されたのだろう。どれだけ俺は風呂に入ってたんだろうか）ベットのの上に転がる。

のぼせた後は、浴槽から出てそのままちょっと倒れた。

湯に濡れた体で風呂場で倒れている俺が見つけれれば、どこぞの殺人事件だよっ！ と叫んでたはずだ。

まあ、再起した時には身体も乾いていたので、特に何も無かった。むしろ拭く物を用意していなかった事に気が付いたから、乾いてくれてよかった。

そのあとはアイテム欄の中のトランクス（ちゃんとあってよかった。ホントに）を取り出し、穿く。やはりそう言う類の感触は現実の物と何ら遜色のないものだった。

ちゃんと《スカウトセット》も装備した俺は、昼前の『殺し』の戦利品の整理をする事にした。

アイテム欄を物色していくと、増えていたのは以前俺が買った【HPポーションLv2】と【MPポーションLv2】の更にツーランク上の、【HPポーションLv4】と【MPポーションLv4】と言う物が増えていた。

それに、よくわからない物で、【始まりから湿りへ：小鬼王の道中絵巻】なんていう物があった。

出して確認してみると、長さ四メートルはありそうな長い絵巻だった。道筋が異様に詳しく書いてある。細かい。

……あいつ等、結構良い物もよく分かん物も色々持っていやがる。

まあ、あの口ぶりや手際の良さなどを考えると、PKを結構やっていたようだから、納得もいく。

自分でやってわかるが、コレは結構な収入になる。

お金も結構手に入るし、アイテムもいっぱい手に入る。

……まあ、こんな理由で『殺し』をする奴らの事はこれっぽちも理解したくないが。

そう言えばあの系目のガキが売っていた【煙玉Lv1】、【インスタント落とし穴Lv1】、【インスタント姿くらましマントLv1】、【毒針Lv1】、【毒矢Lv1】、等々が、結構な量が入ってる。

もちろん、俺は使うつもりはないから（俺の——……あれだ、生き方に反する。猛毒とか使ってるけど、それは俺の武器の能力であって、こういったアイテム等の小細工は使わないのが主義だ。でも、不意を突くのはアリ）、全部売ろうと思う。

正直言えば、こんなものより食い物が欲しかった。

そうして俺は売るもの、残すものを分別しながら、そのあとの時間をごすごした。

不意に、部屋がノックされる。

「すみませんスノウさん。夕食が出来たんですけど、お食べになりますか？」

ドア越しに、そう問われる。

予想外の出来事であったが、もちろん了承した。オー、ハンゲリ――！

下に降りてカウンターを通り過ぎ、奥の方へと進む。

まあ、それほど奥まったところに行く訳もなく、五メートル位の縦長テーブルと両側に計十脚の椅子が並べてある。

その上には、まだ俺が来るとはわかっていなかっただろうに、テーブルの上にはすでに食事が用意されていた。

何やら知らない魚のムニエルと、たぶんグラタン。それと琥珀色のスープに瑞々しそうな野菜のサラダ。

ヨダレが出てくる。冗談抜きで。

「これ、本当に食べていいんですか？」

「ええ、もちろんです。宿の代金には食事代も含まれてるんですから。素材にはそれなりにこだわっているので、期待してください結構ですよ」

ぼーぜんと呟いた俺に、リユーネさんは薄く微笑む。
俺は席に着く。

「いただきます！」

パン、と手を合わせそう声を上げる。

そのまま傍らのフォークとスプーンをとり、口に放り込んでいく。虫肉の様な、単純ながらに深い味わいとは異なり、調理したからこそその複雑な味の重なりが俺の口内を刺激する。

「……う、うめ」

感動し過ぎて目から勝手に塩水が流れる。

貴重（？）な塩分を失う訳に行くかと止めようとするのだが、そのたびに「ひつく……うえつく……」と嗚咽になる。

久しぶりに食べた文明的な味に、俺の身体——所詮データなのだが——が歓喜の叫びをあげる。むしろその叫びをあげる前に塩水を垂れ流してゐる。

喋るために口を動かすのではなく、ただ目の前にある料理を食す為だけに動く。

後ろのリユーネさんが、突然泣き出した俺にちよつと引き気味である事はなんとなく気配で予想が付くが、それにかまっている暇は俺には無かった。

ガツガツと目にも止まらぬ速さで口の放り込んでいく。

一瞬、自分でもどうやって料理を口に運んでいるのか分からなくなるほどの速度。

食への執着って本当に凄い。

そんな事実を、ゲームの中で、改めて自分の身で感じる事になると思わなかった。

——ズズズッ

鼻を吸る音が、俺の食事の終了を告げた。

「ごちそう……、さまでした……」

「お、お粗末さまでした……？」

何故疑問形なのかは聞かずに、俺は鼻をもう一度吸る。

目じりの塩水はもう乾いていた。

「すみません。あの……なんで泣いてたんですか？」

「ごもつともな疑問である。」

俺だつて目の前で食事中に突然泣き出したらこうなる。……と言

うか、良く食事中に聞かなかったものだ。

俺だつたら絶対聞く。そして泣いてる俺だつたらどんな大声で聞かれても、たぶん聞こえない。

「え、えつとですね、最近……、と言うかこれまで料理と言う料理を食べて無かつたので……なんか感動して……」

リユーネさんが驚きに目を見開く。

分かります、その気持ち。自分で言つて「なに言つてんの、コイツ……」って感じなのはわかつてます。

しかし、実際その通りなのである。俺はこの世界に来て一度も料理と言える料理は食べた事が無かった。

「それって……どういう……？」

「まあ、一応そのままの意味なんですけど……」

「……？」

何時までたつてもリユーネさんは疑問顔だ。

しょうがないから、俺は無理やり締めくくる事にした。

「ま、気にしないでください」

こんな感じに若干強引に締める。

質問は受け付けません。ハイ。

そのままちよつと談笑してから、俺は部屋に戻り、寝た。

天国の様な寝心地だった。

朝、目が覚めた俺はまたもリユーネさんに朝食をもらい、すぐに

町へと繰り出した。

先日はプレイヤーに物売ってなんか吃驚仰天な事に巻き込まれたから、今回はNPCに売ってみようかと思う。

市場操作のためにNPCへの売却額は少なめに設定してあるそうだが、今は金より安全だ。あ・ん・ぜ・ん。

商店街へと赴き、短く髪を刈り揃えた二十歳くらいの青年に声をかける。もちろんNPCだ。

「すみません」

「あ、いらっしやいませ。本日はどういったご用件で？」

「ちよつと、物を売りたいなー、と」

「わかりました。では……」

そう言つて、青年が指先を振る。

その動作がキーとなり、俺の目の前にウィンドウが現われる。

俺はその中に例の小細工アイテムを放り込んでいく。それと同時に、相手側の金額が上昇していく。NPCに売る場合は、もう金額が決まつてるから一つ入れればその分上がっていくようだ。

ポンポン放りこんでいくのと同じく、買い取り価格もズンズン上がっていく。——と、そこでほとんど同一の変化しか起こって無かった金額が大きく変化を見せる。

「——おお？」

自分でも思わず声をあげてしまうほどの巨大な変化。

それまでは100、200程度の小さい変化だったのに対し、それを入れるとなると、いきなり10000（！）も上がった。

桁が違う。ケタが。

文字通り、全く別物だった。

まさかゼロが二個も増えるとは、なんたる予想外。

なにがこんなに高額なのか、俺は指先の文字を確認すると――

【始まりから湿りへ……小鬼王の道中絵巻】

コレかよっ！

なんだコレ！ そんなに重要なものなのか！？ 俺にや分らん！
なぜこんな小鬼ゴブリンの珍道中が面白可笑しく書いてあるだけの巻物が
こんなに高額なんだ！？ 誰か教えて！！

「あの、なんでコレこんなに高いんですか？」

とりあえず目の前の青年に聞いた。

NPCだからある程度決まった答えしか出来ないのかもしれない
けど、ダメで元々だ。……っ！ つか商人ならそんなくらい知つとけ！

「え？ —— ああ、これですか。これはですねとある業者がこの絵
巻を欲しがっていて、高値で買い取ってくれるらしいんですよ。……
と、行っても、私はその買い取ってくれるところの事は知らない
んですけどね」

最後は苦笑気味に、青年はそう締めくくった。

俺は、なんだそれ……と軽く顎を外しそうになった。

——それはともかく、売れるなら売ってしまおうか、と俺はそれを
相手側に放りこんだままにして、尚もアイテムを入れ続けた。

その結果は――、

「27840EL」

なんだ、コレ……

いや、本当になんだコレ。

俺はこの前の『殺し』で手に入れたアイテムしか入れていないはずだ。あの絵巻だけでも10000ELだが、それ以外の物で17840ELにも達した事になる。

儲かり過ぎだろ！

ちょっと叫びそうになるのをこらえて、俺は指先で了承のボタンを押しこむ。

そして俺の有り金は何と45000オーバーとなった。この短期間で儲かり過ぎ。

俺は店番している青年に別れを告げ、歩き出した。

そして歩いたのはどの位だろうか。

「――あつ！ お前！」

突然後ろから声を掛けられた。

振り向くと、燃えるような短い赤い髪をワックスでも使ったかのようにツンツンに立たせた男が、俺の方を指差していた。

ガッシャガッシャと重装備――とまではギリギリ行かない鉛色の金属の鎧を付けたその男はこちらにどんどん近づいてくる。

なんか見た事がある気がするんだけど、思いだせない。

こう、自分の中でもそれなりの容量使ってたヤツの筈なんだけど、何時間垂らしても釣り針に魚がかからないみたいにな、全く引っぱらない。

「おい！ 俺だよ俺！ 気付け！！」

なんだろう？ 首を捻ってる俺の前に着た赤髪の男は、自分の顔を右の指先で指差しながらそう叫んだ。

尚も俺が、新手のオレオレ詐欺か？ まだ無くなってなかったんだ……なんて考えていると、今度は赤髪の男が俺の肩を掴んで、ぐわんぐわんと揺らしてくる。

俺はされるがまま。

「あーっ！ 何でわかんねえんだよ！ お前……、キャラネームは知らねえけど”冬紀”だろ！？ まだわかんねえのか！？」

な、なにいつ！

ほ、本名まで知られてるっ！

こ、ここここここまでディープなストーリーカーがここに居るなんて事が！？

——なんて馬鹿な事をさすがに口に出す事もなく、唯一浮かんだ名前を口にした。

「……………誠二？」

俺がそう言うと、赤髪の男——神田誠二は俺の肩を掴んだまま、

脱力するように崩れ落ちた。ガタイの良い身体に引きずられて、俺も座り込む。

「——つか、何で気がつかねーんだよ……」

俺はそれに苦笑気味に返した。

「は、はは……。す、すまん。マジで」

017：初めて料理と呼ぶ物を食べた俺は（後書き）

初めて料理と呼ぶ物を食べた俺は、泣いたあげく、旧友と再会する。

018：旧友の行きつけに入った俺は

丁度いい時間帯になったので、再会を果たした俺と誠二、その再会したばかりの誠二に行きつけの店で昼食をとる事にした。

そこの誠二の行きつけというのが、なんというか――

「ボロツ……」

思わず口を零してしまうほどだった。

そこらへんの木片の一本抜いたら今にも崩れそうな一階建ての木造建築。少し風が吹くと、キシキシと音を立てる。そのNPC店の名前は『おろろろろろ』。……なんだコレ。

何回見直しても、ボロボロで今にも朽ちそうな看板に書いてある文字は『おろろろろろ』。――俺はそれをスルーする事にした。一タツツコンでたら身が持たなそうだ。

中に入り、ボロカウンターのボロ椅子についた誠二は、「じいちゃーん、いつもの二つー」と声を上げた。厨房の奥から「おうともよー。まってなー」という意外と元気にあふれた老人の声が聞こえた。

……本当に行きつけらしい。

「ほら、お前もつつ立てないで座れよ」

「お、おう」

バンバンと隣の椅子を叩いて笑顔で勧めてくる誠二には悪いが、叩くたびにキシキシと悲鳴を上げるイスには座りたくなかった。

――しかし、周りの椅子もそれに勝ると劣らずのボロさなので、

もう座るしかない状況となり、俺は仕方なくそーつと慎重にボ口椅子に座った。

「しかし、ちゃんと連絡くらいしろよな」

「誠二だつてしなかつたろ。つーか、あつたのも今日初めてだろうが」

「はあ？ なに言つてんだよ？」

俺はその言葉に、頭の上にクエスチョンマークを浮かべる。

「……だつて実際そうだろ？」

「違つぞ。ほら、あつただろうがトンナの森で」

「トンナの森……？」

フィールドの名前を聞かされても、俺は首を捻るばかりだ。
俺があそこであつた人間といえば、ナツ姉とアキホとスイ達だけのはずだ。それ以外にはあつた記憶は無いが……。

「なんか、あれだよ。お前がボスモンスターとか引き連れて走りまわつてた時だよ。お前、俺に声かけただろうが」

あ？ あ……。——ああっ！

「アレお前だつたのか！？」

——そう、それは俺がボスモンスターとザコモンスターを引き連れ森の中を練り走っていた時。

人気の全く無かつた森でやっと見つけた人に助けを求めたら、その人も戦闘中でこっちに気を取られておっ死んじやつたつて話だ。

「ったくよー、あんときはマジでビビったぜ。職業の初期装備であんな奥の森にいて、しかもあんなにモンスター引き連れてんだから。MPKかと思っただぜ」
モンスターブレイヤークル

「す、すまん」

「俺も戦闘中だったってのによ。おかげでLv上がりそうだったのにおじちゃんになっちまったぜ」

「う、うおお……。マジですまん」

「——しかし、それよりも、だ」

突然雰囲気を変えた誠二に、俺もちよつと顔を真剣にする。

「何でここにいるんだ？」

「……え？ それ？」

「いや、他に何を聞けと……」

「何で森にいたんだーとか、何で初期装備のままなんだーとか」

「それよりも俺にはこっちの方が重要なんだよ」

なんかよく分からんが重要なんだそうだ。

さて、なんて答えたものか。

「うーん……何でだろうな？」

「……はあ？」

「いやさあ、俺もよくわかんないんだよね？ 走ってたら適当に付いたって言うか？」

「じゃあ、お前は《h a h》に入っただんじやないのか？」

「ああ、入って無いぞあんなギルド」

「……一応俺も入ってるギルドなんだが……」

「なにい！？」

衝撃だった。

誠二があんな殺人集団——、じゃないか。殺人集団と化してるのは一部の奴だけっぽかったからな、あいつの話としては。それに誠二はそんなのを見過ごす野郎じゃないから、巧く隠してるんだろ。

「なに驚いてんだよ。ここにいる奴は皆入ってるだろうが」

「ふーん……。まあ、俺はあんなギルド入らん！」

「……なんなんだお前。もうよくわかんないな」

「なんだろうな、ホント」

こうしか答えられない。

そんな俺に心情を察してください。

自分が……、自分の事が良く分かりません先生。

「……じ、じゃあ、れ、連絡、とったのか？」

「は？」

突然の話題変換と、急に口ごもり始めた誠二に俺は顔を疑問に染める。

誠二はなおも口ごもりながら話を続ける。

「だ、だから、夏乃先輩と——」

「ヘイツ！ お待ちいー！」

「「うおわっ！？」」

妙に元気にあふれた声に遮られた誠二の声は聞こえず、そして俺の前には——食の塔があった。

「……………なんだ、これ」

「おおう？　なんだねーちゃん、知らずに来たんか？　ウチは『おろろろろろ』、大盛り限定の店だぜ？」

俺の視線は目の前の『塔』に釘付けになりながら、老人の声を聞いた。一瞬、一文字だけの巨大な間違いを聞いた気がしたが、それよりも俺の関心は目の前の『塔』にしか向いてなかった。

20センチメートル大の巨大な皿に乗った、カツ。

二、三合は軽くありそうな純白の白飯の上に、サクツサクに上げたカツを卵で綴じたボリユーミーなソレが大量のついていた。

——それはカツ丼だった。

しかし先にも言った通り、ただ量の多いカツじゃない。

高さ30センチメートルに届きそうなほどに何層にも折り重なった、カツの『塔』だった。

「す、すつごおおおおおつ！！」

「おおつ！　良い反応してくれるな！　よしっ！　そんなお前さんにはサービスだ！」

ちよつと待つてろよ！　と厨房の奥に消えて行つた老人を見送ると、今度は横の誠二が話しかけてくる。

「な、なあ、だから夏乃先輩と連絡——」

「ほらっ、これだ！」

「うほお——っ！」

がしゃんつと大きな音を立ててカウンターに置かれたのは、俺の顔くらい軽く超えるほどの大きさの大ジョッキ。俺が持つてる木製

の物とは違い、光を折り曲げ輝くガラス製だ。

中身にはカランカランと気持ちいい音を鳴らす氷と、薄く透き通った炭酸飲料——見た目から言えばジンジャーエールその物——がタップリ詰まってる。上に浮く泡もなんかお酒みたいで美味そうだ。

俺はそれにありつこうと何故か備え付けられてる箸に手を伸ばす。

「それじゃいただきます——」

「だからっ！　夏乃先輩と連絡取ったのかって聞いてんだよ！」
「おわっ！？」

突然叫んだ誠二に驚きの声を上げながら、仕返しとばかりに叫んだ。

「連絡取ったよ！　とったから食べていい！？」

「ほ、本当か！？」

「本当だよ！　だから食べていい！？」

「な、なあ、俺にも取り次いでくれないか！？」

「わかった、それくらいやってやるよ！　だから食べていい！？」

「本当か！？」

「本当だって言っただろ！　だから食べていい！？」

「本当に本当か！？」

「本当に本当だって言っただろ！？　だから食べていい！？」

「ちよっ、待て近づくなんて！　俺が喰われるっ。食っていいから

！　頼むから一回どけ！」

「やつほ——いつ」

やつとオツケーが出た俺は右手の箸でカツを掴み、口の中に放り込む。

柔らかい牛に——牛肉か？　これ？　……兎に角、柔らかい肉を

噛み砕いて行く。噛むたびに跳び出る肉汁に、俺の顔が恍惚に包まれる。

そのあとは傍らのジョッキを煽る。

本来なら片手でなんて絶対持てないような質量だろうが、Lv5の賜物が、すんなりと持ちあがる。

シュワシュワと気泡の破裂する音を聞きながら、俺はそれを自分の口に流し込む。ゴクゴクと喉が音を立てながら呑みこんでいく。少し苦めのソレは、非常にいい喉越しだった。

そのまま俺は、美味しい料理を口に運び続けた。

「ごちそうさまでした！」

「おおっ！ 良くそんなほっそい体に入ったもんだな」

「じいちゃん！ そこ気にしてんだから言わないでいてくれよ！」

「はっはっはっ、わりいわりい」

カツの塔を食べ終わった頃。俺とじいちゃんの仲は急激に良くなっていた。美味しい物作る者と、ソレを食う者。そこには強固な信頼関係が出来るものなのだ。

…… 入る前も入った後も散々ばろいと思ってスマン。

ちなみにとりの誠二はまだ半分も食べ終わって無かった。誠二曰く、「お前のペースが速すぎるんだ。普通はこれでも早い方なんだよ」だそうだ。じいちゃんも頷いてたし、俺の喰う速度は速いらしい。

「それじゃ、腹いっぱい食ったし運動でもしてこようかな」

「おおう？ もう行くんか？」

「おう。じゃあねじいちゃん」

「そんなら今度もサービスしてやつから、来いよー」

「オツケー」

代金はもうすでに誠二が払っている。アイツが二つ頼んだ時点でもう支払われたらしい。なんて便利。

そっぴやって気持ち良く店の外に出ようとした時、誠二に呼び止められた。

「ちょっとまって！　せめてフレンド登録していけって！」

そう言われて、そっぴやして無かったな、と誠二とフレンド登録をした。

俺のフレンド欄には新たに『セイジ』という名前が追加された。つか何で本名で登録するんだよ……

「へー、スノウ、な。じゃ、これからよろしくなスノウ」

「おう。よろしくなセイジ」

セイジが死に物狂いでカツの塔を食ってるところだったけど、そう言っただけ俺は手を振って別れた。

『おろろろろろ』を出た俺は、食後の運動を始めようか、とクラウチングスタートの姿勢をとった。

行先は、この前ストーカーに襲われて、十分に探索なかった南門方面にする事にした。

「いっくぜえええっ！」

バンッと身体をバネのように飛ばす。

瞬間、男ばかりのむさ苦しい空気を俺の身体がかき分けて行く。人ごみをするりするりとすり抜け、駆け抜ける。

「やつふう——ううつつっ!!」

喰ったばかりで少々重くなってる身体には荷が重いかと思ったが、意外や意外、普通に走れていた。最近は美味いも料理をいっぱい食えて満足だ。うん。

「ヒヤッツツフウ————ッッ!!」

走り抜けた先の門を抜けると、むさ苦しさよりも湿気が強くなった空気をかき分け始める。

湿った空気が駆け抜ける俺に動かされる事で風となり、俺の肌を撫ぜる。

「いっつえええ——っいっつ——」

そこからも俺は走れる喜びに浸りながら、湿原を風のように走っていった。

こんな言葉を聞いた事は無いだろうか。

——『二度ある事は三度ある』。

しかし、俺はこの言葉は少し違うと思う。
俺が思うに、こっちの方が正しいと思う。それは、

——『二度ある事は三度あるし、三度ある事は四度だって五度だって六度だって七度だってあるんだよ！ あきらめろ、バカめ——』。

……である。

つまり何が言いたいかといえば——、

「いじどいじゃああああああっっ！！」

そう言っことだった。

018：旧友の行きつけに入った俺は（後書き）

旧友の行きつけに入った俺は、迷った。

次回、懐かしきあの地に帰還（……？）

019：螳螂と戦うことになった俺は

湿った湿原を抜け、俺が辿り着いていたのは森と樹海の間くらい
の深みを持った森だった。

何だか来た事のあるような、デジャブを感じてしまう土地。

しかし俺はここに来るのは初めてであるはずだ。……たぶん。自
信ないけど。

「それじゃあとにかく、散策と行こうか」

これからの行動を定めた俺は腰の翹剣に手を掛けながら、けもの
道のような草の踏み倒された道を歩く。

これまでのダッシュや野宿経験で、この手の森等の道には大分慣
れた。森の歩き方（？）みたいな物がわかってきている気がする。

そのままズンズン進んでいくこと数分。途中で前方にモンスター
が湧出した。数は、一。

翹剣を抜き、右下方に構える。敵の力量が今一つ掴めないため、
今のところは待機。

そのまま数秒後には、全長1.5メートルに迫りそうな巨大な螳
螂がそこに姿を現した。

枝のように細い身体は濁った緑に染まっている。キシキシと顎を
鳴らし、ギョロギョロと動く拳大の二つの目玉を動かす。その体軀
で最も特徴的なのはやはり、両手に付いた巨大な鎌だ。

両手にある大振りの鎌には——少し矛盾するようだが——まるで
鋸のような三角状の刃がハッキリとしないバラバラな間隔で並んで
いた。

その刃は俺の身体を削ぎ落とすのには十分すぎるほどの凶器に見

えた。それを大きく広げれば、全長は2メートル以上になるだろう。

そして不意に、その螳螂と目が合う。

俺の目の前に浮かび上がる文字と数字。

《グリーンマンティス：Lv52》

「——っ!」

俺の身体が歓喜に震える。

それは、やっと対等に近い敵と対峙できた事にある。

(これで……、これで自己強化が存分に出来るっ!)

今までの敵は余りにもLv差が存在し過ぎて、ろくに経験値を手に入れることが出来なかった。あの樹海を出てから上がった俺のLvはスキルLvだけであり、職業Lvはこれっぽちも上がっていない。

だから俺は飛び出す。

先にある筈の俺の”力”を求めて。

ダンッと足元を震わせ、緑カマキリへと迫る。

先ほど視線が重なったことで流石に気がつかれたようで、キシヤアア——ッ! と本来ある筈のない発声器官から、奇怪な叫びが響く。

そして、接触。

大振りの鎌と、翅剣が接触する。

一撃の重さ的には向こうの方が上回る筈だが、振り抜くスピード

は俺の方が多いに上回っていたようで、押し返すように弾く。

そのまま続く大振りの鎌と翹剣の掛け合い。

打ち合う隙を見つけてはその枝の様な体躯に剣閃を巡らす。

二振りの大鎌は手数的には俺の手に余るが、速度に優位を持つことでそれを覆した。

そして長いようで短い剣戟が終わる。

最後は俺の戦技^{アーツ}だった。丁度いい感じに削り取れそうだったので十字状に斬り伏せる《クロス》で、けりがついた。

最後の最後まで止まる事無く鎌を振りまわし続けた《グリーンマントイス》が、光の粒子となって崩れ去る。

その瞬間、俺の耳に久しく聞いていなかった”ポーン”という軽快な電子音が響いた。

どうやら、蓄積された微量な経験値が、《グリーンマントイス》を倒した事によりLvアップの敷居をまたいだらしい。

俺の口の端が歓喜に歪んだ。

感覚的には、数時間が経過していた。実際の時間経過は確認して

いないのでわからない。

俺はそのまま前進を続け、森の中を歩いる。
道中に出現するのは、全てマンティス種だった。群れる事はしないのか、全て一体ずつだったので戦闘がしやすかった。

マンティス種でもいろいろいて、身体が赤く、攻撃的な印象の《レッドマンティス：Lv53》や、麻痺攻撃を使ってくるらしい薄く黄色がかった《パラライズマンティス：Lv54》だとか。まあ、麻痺は喰らった事無いけどね。ビリビリしてそうだから避けた。

ちなみに俺のお気に入りは刃先から毒を出す《ポイズンマンティス：Lv55》。毒は厄介だが、俺には称号の補正で若干かかる確率が下がっているし、なにより俺と同族っぽい。ほら、身体から毒出るとことか（正確に言えば俺は出ないのだけれど、投与だし）。

そんなこんなのカマキリに溢れた道中の結果は、スキルのレベルアップだった。

具体的に言っと、こうなった。

【Snow：スカウト：Lv51】・【小剣：Lv1】【片手剣：Lv50】【短弓：Lv1】【索敵：Lv49】【隠密：Lv49】

【片手剣】のスキルがちょうどキリの良いLv50に達したことで、戦技の欄に新たな物が追加された。

今度のは四連撃だ。先ほど使ってみたが、素早さよりも威力重視の戦技に感じられた。俺としてはスピード重視のスタイルだから、これはあまり使う機会が無いかもしれない。

この調子なら、【索敵】と【隠密】もLv50に達したら何か出るかもしれない。これまで何もない故に、少し楽しみだ。

そして俺が歩みを進める森はより一層深みを増し、まるであの樹海・の様に见えてくる。

出てくるなら出て来い。喰ってやるわい。……それが今の俺の心境。

そんな事考えながら進む森の道。

——再開して出会って、しまった。

「あ、ああああああ、アレはっ!」

目の前で湧出したのは、黒と紫の毒々しい色使いをした巨大な芋虫。目の前にいる俺を無視してた身近な葉っぱを食べ始めるその思考。

あれこそは——、

《デスポイズンキャタピラ：Lv60》

突然敵のLvが跳ね上がった事など、気にならなかった。きっと知らない間にフィールドを移動したのだ、と勝手に頭の中で結論づけ、叫んだ。

「久しぶりだなっ、俺の旧友エサよっ!」

そして立て続けに、叫ぶ。

「ただいま! 第二じふかいの故郷よ!」

こうして俺は第二の故郷（……こきよ、……故郷？）へと帰郷する事になるのだった。

俺は【アイテム】の中に収まっている、久しく握っていなかった最初の愛剣に触れる。そのまま、装備。

手元には重力を具現化したかのように重く、そして銀に瞬く美しい剣が出てくる。

俺はそれを力強く握り、思いきり振り降ろす……！

斬ッ

「グギヤアッ」

地面の突き刺さる銀剣の傍らには、落とされた頭と、ずんぐりとした首無し芋虫が完成した。それも一瞬の間。すぐに光の粒子となって消えた。

これもまた、久しい感覚。

もう一度開いて銀剣を戻し翅剣を装備すると同時に、《黒紫の蟲肉》が二つほど増えているのを確認した。ラッキー♪

周囲を見回す。

目視でも、【索敵】のスキルにも敵の気配は今のところない。

「帰って来たのか、俺は」

眼前に広がる”似ている”と思っていた景色は、記憶と”同じ”景色になっていた。

鬱蒼と茂る木の葉に閉ざされ、日の光はほとんど届かない。先ほど確認した時の時間は夕暮れ時のはずだが、その欠片も感じない。

「……いや、帰って来たという表現はおかしいか？」

自分の言葉に多少の疑問を持つが、少し経つとその疑問も消えた。やはりここは俺の力の”土台”を築いた大切な場所であり、原点なのではないかと思う。

「——ん？　そう言えば……」

そう言えば。

アクティブ

ここは好戦的なモンスターの出現が極端に少ないのでは無かっただろうか？　出てくるのはほとんど《デスポイズンキャタピラ》である。

まあ、その代わりに一匹でもあの”黒紫の雀蜂”に出会ってしまえばそいつらとの混戦かつ連戦になる事は避けられないだろうが。

そこで一つ、俺に考えが浮かぶ。

「ここで強化合宿でもすればいいんじゃないか……？」

合宿、と言うには宿もなければ仲間もないが、この場所は俺にとって好都合の気がする。

一日中狩りをし、腹が減ったら虫肉を食べ、喉が乾いたら《ブルーゼリー》を飲み干す。寝床に関しては、少しだけ——ほんの少しだけだが——【隠密】スキルの姿を隠す効果が上がりそうな樹の上

で寝ればいい。

ただ、その上で一つの問題が上がる。

「——なんか、また心配させることになりそうだなあ……」

そうだ。またここで何週間も（今のところの予定では、であるが）居座り続けたら、ナツ姉やアキホにまた心配をかけそうなのである。それに今度は、セイジやスイ、リンさんもいる。

心配掛ける事は、余りしたくは無い。

うんうん唸っていると、ちょっと気がつく。

「"コール"で連絡をとればなんら問題ないんじゃないか……？」

俺の中では、『知り合い"フレンド登録してる人"である。これなら心配になればあつちから"コール"してくるはずだ。そうすれば何も問題ないじゃないか。

一人きりで孤独感でも感じようものなら此方から誰かに"コール"して少しのあいだ話相手になって貰えばいい。

「なんて……、なんて良い考え……！」

自分の中に浮かんだ妙案に、軽く小躍りしそうになる。……いや、しないよ？ 周りに人いなくてもなんか恥ずかしいし。

そんなこんなで、俺の強化合宿が始まる——。

019・螳螂と戦うことになった俺は（後書き）

螳螂と戦うことになった俺は、
　　強化合宿始めました
し中華風）（冷や

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6009x/>

走りたがりの暗殺者（仮）

2011年12月13日03時03分発行